BIRTH
SFアクションアニメ
バース
文　首藤剛志
絵　金田伊功
X
講談社文庫

若者シュルギ・ナムが聖剣(シェード)を求めて、イノガニックとかっこよく戦う！
美少女ラサがイノガニックに追われ、フローターバイクに乗って荒野を疾走する！
息もつかせぬスピードとアクションの連続で、「バース」の世界が展開――。
人気オリジナルビデオ作品の完全小説化！

アーリアが，ゲーム開始のボタンを押したとき……
その宇宙は動きはじめた。

生まれたときから結婚を約束されたナムとラサは，今，15歳と14歳の若者に成長していた。

「なあんだ、若いねえちゃんだなや。」
「ありは、原動機付き自転車やないけ。」

アーリアはラサにほほえみかえした。
「うん，私は，私の世界で私を生きるわ。」

講談社X文庫

バース または 子どもの遊び

文　首藤剛志
絵　金田伊功

講談社

オリジナルビデオ作品　**バース**

―――――――――――スタッフリスト

製作　あいどる・カナメプロ

企画・制作　小野寺脩一・相原義彰

プロデューサー　長尾聡浩

アニメーションディレクター　金田伊功

脚本　カナメ企画・武上純希

監督　貞光紳也

アニメーション
コーディネーター　影山楙倫・いのまたむつみ

メカニックデザイン　小原渉平

美術監督　勝又　激

目次

イラスト／金田伊功

〈人物紹介〉

アーリア

十四歳。異形の少女。神殿の一室で毎日、コンピューターのレーリアとゲームをするのが唯一の楽しみ。ラサたちの宇宙の創造主。

シュルギ・ナム

十五歳。ラサの幼なじみ。ザックスの勇敢な男の血を引いているが、戦いのない村では、じゃま者扱いされている。村の英雄になり、皆を見かえすため聖剣を手に入れようとする。

ユピテル・ラサ

十四歳。リド星系、惑星アクアロイドの先住民族ザックスの末裔。オイルフルーツから採れる燃料を精製して、星間商人のバオに売って生活している。

バオ・ルザン

三百歳。星間商人。ラサから買った燃料と他の惑星の武器とを交換して、イノガニックに売りつけている。ラサに対して、ロリコン的な愛情を抱いている。

ジュノベル・キム

十九歳。バオの相棒。男のロマンが大好きなバオとは正反対の、ドライな現代青年。ラサに対する、バオのロリコン的行動にあきれつつ、ラサにほのかな恋心をもっている。

モンガー

?歳。アクアロイドに棲息する、ラサのペットの軟体生物ムーン。妻子があったが、現在消息不明。

あいどる・カナメプロ製作　オリジナルビデオ作品

バース　または 子どもの遊び

プロローグの前の言葉

古典の時間で〜す。

つれづれなるままに
日ぐらし遊戯盤にむかひて
心にうつりゆくよしなしごとを
そこはかとなく遊技しつくれば
あやしうこそものぐるほしけれ

ニュータイプ　ツレヅレグサ

A・AD二五〇〇年
作／アーリア・ユピテル

（訳例？）

やることないから、

一日じゅう、ゲームコンピューターに向かって心に浮かんでくる阿呆（アホ）なことに気をとられながら、なんとなく気分でキーボードを動かしていたら、そのうち私、乗ってきちゃって、夢中になって、あつくなっちゃったりしたりして、バッカみたいね。私って……。

（訳注）

＝つれづれ＝

普通は、「退屈」という意味で訳されているが、俗な意味の「退屈」ではなかったりする。なにかしたい気持ちはあるのに、なにもすることもなく、心に空虚（ムナシイ）な感じを抱いている。要するに、すこし重め（リトルヘビー）にシラ～ッとした気持ち（フィーリング）である。

（注）

蛇足（へびのあし）ながら、この本は、古文の参考書ではもちろんなく、まして、一九八四年ごろ、大

阪の万年二流棒球球団「張り子の虎達軍」で、活躍した外人選手の伝記でもない。
もともと、「張り子の虎達軍」の愛好者である筆者にとって、一九八四年の成績は、東京に愛好者の多い、「卓(すぐれ)ない大巨人軍」と同じく、「つれづれ」このうえないものであるが、それも、この本とはまったく関係がない。
「BIRTH(バース)」とは誕生の意味をもつ英語であるが、なにが誕生するのか、筆者には見当がつかない。
たしかに、「BIRTH」という名の、磁気録画帯(ビデオテープ)が誕生したことはあるが、その録画の中にも、なにが誕生したのか明解な答えはない。
かくして、つれづれなるままに、この本は始まるのである。

プロローグ

☆　シャッタースピード　$\frac{1}{\infty}$

その宇宙は停止していた。
なにものも動かず、なにものも息をせず、時間すら流れず、まるで無限大分の1のシャッタースピードで写したスチール写真のように静止していた。

☆　A・AD二五〇〇年　ギリシア・アクロポリス―神殿―

（注）BC＝紀元前
AD＝西暦
A・AD＝アフターAD＝後西暦

今は、西暦の時代より二五〇〇年がたっている。
その少女は、肩をひくつかせながら、アクロポリス―神殿―の一室に入ってきた。
顔は涙でぐちゃぐちゃだった。
親友のレーリアが、少女にやさしく声をかけた。
「アーリア、また誰かにいじめられたのね。」
「誰かに？　……そうじゃないわ。いつものように、みんなにいじめられたのよ。」
「いつものことでしょ。アーリア、元気を出して……あなたは、もう十四歳、いじめられるのに慣れてもいいころじゃない？」
「いじめられるのに慣れるなんて、みじめだわ。」
アーリアは、涙をふいて、レーリアの前にすわった。
「仕方ないのよ。アーリア、あなたは他の人と違いすぎるもの。」
レーリアがアーリアにそういった。
「確かに……。」
アーリアはレーリアの表情のない顔を見つめた。
「あなたが、他のメカニックと比べて、そう違いはないのとは正反対に、私は、他の人間と

は違いすぎるわ。でも、人間は人間……他の人と同じ人間なのよ。私は……それなのに私は生まれてからずうっといじめられつづけてきた。化け物だ。化け物だっていわれてね……。」
「でも、この神殿の中ではたいせつに育てられてきたわ。」
「私のような化け物は珍しいからでしょ。」
すねてみせるアーリアに、レーリアはため息まじりの音声でいった。
「ここ数年、あなたとは、同じ問答をくりかえしてきたわ。私のフロッピーディスクはすりきれちゃいそう。答えのでない、発展性のない会話はやめましょう。あなたは、いつもいじめられている化け物……それでいいじゃない。」
「ええ、それでいいのかもね……。」
アーリアは肩をすくめると、笑顔をつくってレーリアにいった。
「気晴らししたいわ。」
「また、あのゲーム?」
「それっきゃない。」
「アーリア、あなたに勝てる見込みはないわ。」
「今度こそ勝ってみせるわ。あなたにね。」
「無理だわ。」

「やってみなきゃわかんないもん。」
「しようのない娘ね。いいわ、あなたの気休めになるのなら、つきあってあげるわ。」
レーリアの顔に宇宙が映しだされた。
「切り札はどちらが持つの？」
レーリアがアーリアに聞いた。
「あなたがどうぞ……私、攻撃が好きだから……。」
アーリアが、そう答えた。
「OK。切り札の聖剣は、私が持つわ。」
レーリアの顔に、聖剣のキャラクターグラフィックが映り、
「所有者、イノガニック」という文字がディスプレーされた。
続いて、「攻撃者、オーガニック」と表示された。
レーリアがつぶやいた。
「それでは始めましょう。」
アーリアが、レーリアにいった。
「手かげんしないでね。」
「無用の心配はしないで。機械は手かげんなんて言葉、知らないわ。」

こうして、人間のアーリアと、電子計算機のレーリアのゲームが始まった。

ゲームの名は「ＢＩＲＴＨ」。

ゲームをプログラミングしたのはアーリア自身だったが、ゲームを作ったアーリア本人が勝ったことがないほど、アーリアにとって難しいゲームだった。

アーリアが、ゲーム開始のボタンを押したとき……。その宇宙は動きはじめた。

宇宙の運行は時を刻みはじめた。

ゲーム「バース」と聖剣（シェード）の飛来

果てしない時のむこうの、宇宙のとある星雲リドで、数万年にわたって、二種の生命体の戦いが続けられた。

片方の種の生命体の名はオーガニック、有機質によって形づくられた生命であり、敵対する一方の生命体の名をイノガニックといい、無機質によって形づくられた生命だった。

と、いうとなにやら難しいが、早い話が地球でいう普通の動植物、いわゆる生物がオーガニック、鉄や岩石などの鉱物がイノガニックだと思えばよい。

この世で、鉱物が命や心をもつはずがないと考える人には、広い宇宙なのだから、そういう星雲や星があってもいいじゃない……とイージーに説明するよりない。

ま、SFの基本的かつ幼稚なパターンの一つであり、本気で説明すると、こむずかしいSF用語が山ほどでてきて、頭が痛くなるばかりである。

（注）もともとSF用語なんていうのは、作者の創作が多く、ここでまた新しい用語を作りだしてプレーヤーを混乱させる愚を犯したくないのである。

たとえば、ワープ航法も瞬間移動も、時空飛行も、早い話が、あんまり大差ないのであって、ようするにあっというまに遠くの地点に移る方法のことで、その方法をあれやこれや考えて説明しているとあっというまで、すまなくなるので、やめたほうがいいと思ったりするのである。

それらのSF科学用語をお好みの方は、巷に、その種のハードSFやSF用語辞典があるので、それを推めます。

でもって、どこまで説明したかというと……。あ、そうか。

ともかくオーガニック（有機生命体）とイノガニック（無機生命体）とが長い間、戦って、どっちが勝ったかというと、SF古来のクラーイ作品にあるように（人間が機械に支配される類）、どうやら、このリド星雲では、イノガニックが勝ってしまったのだ。

こうして、オーガニックの文明は滅亡し、敗れたオーガニック軍はちりぢりになって、星々の影と闇の世界に消えた。

彼らは、負けたくやしまぎれに、捨て台詞(せりふ)風の伝説をリド星雲に残した。

いつしか、オーガニックの守り神、聖剣(シェード)をたずさえた勇者が集まり、イノガニックに天誅(てんちゅう)を下すであろう。それがいつのことか……それはさっぱりわかりません。

伝説なんて無責任なものである。

さらに数千年が流れ、イノガニックは、リド星雲を神のように支配しつづけた。

わずかに生き残ったオーガニックは、生命を維持できる星々で、細々とカビかコケのように生きながらえたが、誰(だれ)の目にも滅び去るのは時間の問題だった。

さらにわずかのオーガニックが、星々に定住せず、宇宙をさまようように生きていた。

彼らの名は星間商人といった。

彼らは、遠い祖先から受け継がれてきたポンコツ宇宙船で星々をめぐり、滅び去ったオーガニック文明の遺産である武器を拾い集めては、イノガニックに売りつけて、生きていた。

いわば、廃品回収業のようなものだった。

＊　＊　＊

「リド星雲のみなさま、たいへんおさわがせして申しわけありません。まいどおなじみ星間商人のバオ・ルザンでございます。

ご不用になりました、古鉄砲、古乗り物、古剣、古爆弾などございましたら、遠慮なくお

呼びください。アクアロイド星のラサちゃん印のオイルフルーツ燃料と交換いたします。」

今、リド星雲、リド星系、十三惑星サドの近くを、修理に修理をかさねてつぎはぎだらけのボロ宇宙船が、宇宙空間用のスピーカーをがなりたてながら飛んでいた。

宇宙空間用のスピーカーなら、サド星じゅうに聞こえてもいいはずなのだが、なんの返答もない。

「チェッ、もうこの星には、古道具は残ってねえのかよ。不景気なこったぜ。」

操縦席の後ろのバスタブの中から、しずくをたらしながら出てきた、バオ・ルザンがバスローブを着ながら、はきすてるようにいった。

平ぺったく、アゴのつき出した顔、そして、水かきのついた手足は、水棲生活の長い河童風種族独特のものだ。

「ちょっと、ぬれた体で操縦室を歩かないでください。感電してショートでもしたら、どうするんです？」

操縦席にすわっている相棒のキムが口をとんがらかした。

バオとは、うってかわった人間型の美形少年だが、様々な種族の住む、リド星雲だ。かならずしも地球人風の美形が、リド星雲全体の美意識から見て、美しいのかどうかはわからない。

「退屈な毎日じゃもん、感電でもしてしびれたほうが刺激があっていいわい。」
水のしずくをぺたぺたたらしながら、操縦席についたバオは、横の棚から酒のビンを出すと、グイグイ飲みだした。
鮟鱇のような平たい口からたれた酒が、無重力のため、プカプカと浮き上がってくる。
「きったねえなあ。今週の掃除当番は僕なんですよ。」とキム。
「だから汚すんじゃねえか、青少年は暇なとき労働を惜しんじゃいけねぇ。」
「よーし、バオさんが当番のときは、僕が汚してやる。」
「青少年は、お年寄りをいじめちゃいけません。ねぇ、清く、優しい青少女のラサちゅわーん。」
バオは、操縦席の横にぶらさげた少女の姿をした人形に頬ずりした。
「あーあ、ラサちゃん人形によだれつけちゃって……きっと今ごろ身ぶるいしてますよ。本物のラサちゃんは。」
「いいの、ラサちゃんは、そんな冷たい娘じゃないもん。僕ちゃんのアイドル、ラサちゃんわん。」
「あーあ、三百歳になっても、このロリコンぶりっこ……ラサちゃん、かわいそ。」
ラサは、アクアロイドという惑星で、リド星系では貴重品といえるオイルフルーツから

採れる燃料を精製している十四歳の少女だった。オイルフルーツの精製は、アクアロイド星の一部の人たちにしかできない伝統芸だった。
ラサの両親は、その数少ない名人の一人だったが、数年前イノガニックのオーガニック減らしの人間狩りが行われたとき、殺された。
十四歳とはいえ、両親の伝統芸を継承したラサは、オイルフルーツを星間商売の餌に使っているバオにとって、ラサはたいせつな取引の相手だった。
バオは、ラサのオイルフルーツで、オーガニックから旧式な武器を買い、それをイノガニックに売りつけているのだ。
もちろん、その武器を、イノガニックに抵抗しているオーガニックのレジスタンスたちやゲリラにもときおり横流しする、闇の仕事も受けおってはいた。
「敵、味方かまわず商売する……そ――いうの、死の商人っていうんじゃないんすか？」
ある日、キムがバオにそう聞いたことがあった。
「い――の、商人とはそういうもの。おまけに俺たちゃ明日をも知れぬ、滅びゆくオーガニックじゃ、死なんて言葉を気にしちゃいられないぜ。」
「そ――いいながら、三百年も生きてきちゃったんですね。」
「憎まれっ子、世にはばかるってな、ギハハハ……。」

バオは舌をベロベロ出して笑った。

……三百年も生きてきたのなら、もうすこし上品な笑い方を覚えてもよさそうなものなのにな……。

キムはときおりそう思うが、この下品で無神経なところが、三百年も生きながらえてきた秘訣なのかもしれなかった。

もっとも、キムのような地球風人間の寿命は七十年、水かきのついた手足のあるバオのような河童風は、五百年……と、すれば、キムは一生バオとつきあいつづけるハメになるかもしれない……それを考えると、頭が痛くなるのだった。

「商売あがったりだな、サド星は……。次の星へ行くか。」

「了解。」

キムは、宇宙船の進路を変えた。

と、そのときだった。

操縦席に警報が鳴った。

「なにかのエネルギーが近づいてきます。」

キムが叫んだ。

「ものすごい速さです。このスピードが出せるのは、イノガニックの戦闘艦だけですよ。」
バオは飛びあがった。
「ぬあんだ？　イノガニックの戦闘艦？　わしら平和で明るい星間商人だぞ！　悪いことなどしとりゃせんぞ。勘弁してぇな……おかあちゃん、助けてぇな。」
バオはオイオイ泣き出した。
「エネルギー、衝突寸前！」
警報がわめく。
「ひえっ！」
バオは、頭を抱えて倒れこんだ。
宇宙船を揺らして、なにかがすりぬけていったのが感じられた。
キムが、すっとんきょうな声を上げた。
「あれ、イノガニックじゃないですよ。」
「ぬあにィ？」
バオは、操縦席の前方を恐る恐る見て、わめいた。
「あ、あ、あ、ありゃ……ぬ、ぬぬあんと……。」
それは、宇宙空間を飛んでいく剣だった。

「なんで剣が宇宙なんか飛んでんでしょうね。」
キムが首をひねった。
「聖剣だ……。」
バオがうなるようにつぶやいた。
「伝説の聖剣だ。俺は聞いたことがある。ある日聖剣が現れて、イノガニックに挑戦するオーガニックの勇者の手にわたる、そしてふたたびイノガニックとオーガニックの戦いが始まる。あれじゃ、あれこそ聖剣じゃ。キム、追え、追いかけるんじゃ。」
「なんだか知らないけど了解……」
キムは、宇宙船の推力を上げた。
聖剣は、先刻までのスピードを落とし、宇宙船をからかうように飛んだ。
しかし、それでも、バオの宇宙船よりは速い。
「全然追いつかないじゃないの。それにあれだけのエネルギーを感じるんだもん、イノガニックに感づかれて、先に取られちまうよ。」
キムが肩をすくめていった。
「うるせえな、キム！　イノガニックが怖くて、だてに三百年も生きてられっかってんだ。」
先刻のこわがり方がウソのようだ。

「イノガニックを倒す伝説の聖剣、こいつはロマンだぜ。」
キムが、けげんそうにバオに聞いた。
「バオさん、まさか、あの剣を使って、イノガニックを倒す勇者になるつもりですか？　たしかに、それ、ロマンとは思うけど。」
キムは、剣を振りまわすバオの姿が想像できなかったのだ。
「バーロ、バーロ！　そんなのロマンじゃねえ。剣振りまわしてけんかやって、どこがロマンチックなんでぇ。」
「はあ？」
と、キムは聞き返した。
「あの聖剣を手に入れて、生き残っているゲリラどもに売りつけてみろ。
俺ッチ、一生遊んで暮らせらあな。
こんな汚ねえ生活ともおさらば！　これぞ夢の実現、ロマンだなあや。」
そして、ラサの人形に頬ずりを繰りかえした。
「ねえ、ラサちゅわん、僕って男のロマンでしょ！　ラサちゃん、スキスキ、大スキ。」
こうなったら、バオにはラサの人形しか頭にない。
キムが白けきった顔でいった。

「あのね、バオさん、おとりこみ中ですけど……聖剣(シェード)が行っちゃいますよ。」
「なに！」
バオは、あわてて立ち上がると天井に頭をぶつけ、目から火花を散らしながら、窓の外を見た。
たしかに聖剣(シェード)のスピードが上がり、宇宙船から離れていく。
「あ――っ、お宝が――っ、ロマンが！　おいしい生活が！
ラサちゅわん。聖剣(シェード)ちゃん。」
バオは宇宙船の窓ガラスを開いて、思わず聖剣(シェード)に、水かきのついた手をのばした。
「♪窓を開ければ　シェードが見える」
「バオさん！　非理論的な行動はやめてください。
宇宙船の窓ガラスが開いてたまりますか。」
「なんか、理論的におかしいところがあるか？」
バオは船内を見わたした。
窓から空気が吹きだし、船内の備品がつぎつぎに宇宙空間に飛びだしていく。
たしかに理論的におかしくはない。
キムが、あわてて窓ガラスを閉じた。

「開く窓ガラスの存在がおかしいんです。」
「そか……それじゃ、この窓ガラスはなんのためにあるんだ?」
バオは肩をすくめた。
「……ギャグです、多分。」
「あ、つまんね。あっ、いけね!
こんなアホやってる場合と、場合が違う……。」
バオは、操縦席のレバーを足でけりあげた。
「全速で、聖剣を追跡や!
かまどをくべろ。最大出力五百パーセント。」
ピーッ!
宇宙船の煙突から蒸気が出た。
「ターボチャージャー、点火!」
キムが、石炭をかまどに入れた。
「点火したよ。」
操縦席の中に蒸気があふれた。
ここまで来るとキムも、

〈この操縦席がＳＦなのか、ＳＬなのか？　え――い、どうでもいいや！　……。〉という気になってしまう。

「ようし、ファイト、一発！」

バオが、徹夜明けで、ドリンク剤をガブ飲みする、アニメーターのような声を出した。それも、あまり忙しすぎて、テレビのコマーシャルもろくに見られないのだろう。台詞がえらく古いアニメーターそのものだ。

でもって、宇宙船は、大きく噴射して、ものすごいスピードで、聖剣の後を追った。あんまり速すぎて、なにが映っているのかわからない二十世紀末の日本製のロボットアニメのような動きである。

あれよあれよと思ううちに、前方に聖剣がふたたび見えてきた。

「お――っ、いました、いました。さすが、この船はガッツがあるぜ。」

操縦席のメーターや部品が見る見るはじけとんでいき、二人は避けるのに四苦八苦だ。

「ほんとうにガッツはあるみたいですね、あっちも。」

キムは窓の外の聖剣を見つめて肩をすくめた。

聖剣は宇宙船をおちょくるようにスピードを上げた。

バオは、体をふるわせてわめいた。

「あ――っ！　いっちゃう、いっちゃう。」
「やっぱ、聖剣(シェード)はすごいよなぁ。こんなボロ船じゃ追いつけないや。」
「バーロ、ボロは着てても、心はワープ。瞬間移動、時空移動、ワープ、ワープで、ワープの向こうにロマンが見える。」
「ワープったって、そんなモン、この船にはないですよ。」
バオはにやりと笑った。ニヤリと笑っても下品な声がもれる。
「グヒヒ、甘いよ、キム君。この日のために密(ひそ)かに用意のワープ装置があったりするのだ。」
……またか……たいしてアテにならないことはよくわかっていたが、一応、先輩への気配りは必要で、キムは感心する。
「ウヘ――、やっぱすごいや、これSFだったんですね。」
「でもって、ワープエンジン始動、3、2、1、GO(ゴー)！」
宇宙船の外側で、ワープエネルギーらしい光が輝いた。
「どーだ、すごいだろう。」
「すっごいですね。」
「宇宙にかけよう、ワープの輪！」
一瞬、宇宙船の姿が消えた。

次の瞬間、操縦席のワープ解除のランプがついた。
「ワープ完了。」
キムが首を傾けた。
「なんか速いですね。」
「バーロ、ワープいうたら、瞬間移動の配牌天和だぞ。速くて当然じゃ、さあ、聖剣はどこじゃ?」
キムは、操縦席のパネルの数字を読んだ。
「ワープ移動距離五百二十七メートルですけど……。」
バオは、数字をにらみつけた。
距離の単位は、光年でもパーセクでもキロでもなく、たしかにメートルだった。
センチやミリでないのが、せめてもの愛敬だ。
バオの額から、たらりと冷や汗が流れた。
そして突然、ばか笑いを始めた。
「ブアッファッファ……もうちょいやったな。六百メートルは飛ぶと思ったけど、ちょいとショートか……さ、もう一回ワープエンジン始動じゃ!」
宇宙船の外側が、ふたたびワープエネルギーで光りだす。

「やったるで!」
だが、次の瞬間、大爆発!
光の渦の中から、ズタボロの宇宙船が現れた。
操縦席で煤だらけになったバオに、爆発で髪をチリチリにパーマされたキムが、折れた操縦レバーを持ったままつぶやいた。
「ワープ距離、マイナス一メートル、船体航行不能……どうします?」
「敗軍の将、船をかたらず……。」
バオはそういって肩をふるわせてからキムにささやいた。
「キム、俺とお前とは友だちだよね。」
「はい。」
「ふる〜い、つきあいだよね。」
「はい……。」
「このことは誰にもいうんじゃないよ。」
「はい……。」
「とくにラサちゃんにはな。」
「はい……。」

「ラサちゃん、わし、みじめ……。」
バオが胸に抱くラサちゃん人形に、涙が落ちた。
「でも、聖剣(シェード)の行方はわかりましたよ。」
キムが、ケロリとしていった。
「あん？」
「聖剣(シェード)のエネルギー反応の移動が止まりました。」
「どこでや。」
「リド星系十一惑星、アクアロイド……ワープなしで、泳いだって行ける距離です。」
「アクアロイド！　ラサちゃんのいる星や！」
バオは、ラサちゃん人形を見つめた。
「やっぱ、ラサちゃんとわては、赤い糸でつながれとんじゃや。」
目には星が輝いている。
「おんどりゃ、いいかげんに年齢を考えんか。」
我慢の限界を越えたキムが、折れた操縦レバーで、バオの頭をぶったたいた。
「ラサちゅわん。」
気絶しながらも、その名を口ずさむバオにあきれながらも、キムは思った。

あのアクアロイド星が……赤い糸でなくてもいい、紫の糸でいいから、あの子と僕、つながっていたらいいのにな……。

キムの気持ちも、すでに宇宙空間から惑星アクアロイドに向かっていた。

ラサとナム

聖剣（シェード）は、ゆっくりとアクアロイドに降りていった。
アクアロイドの大気圏をくぐりぬけるうち、聖剣（シェード）は、さしわたし一メートル半ほどの中型の大きさに変わっていった。
宙を飛んでいるのとキラキラと輝いていることをのぞけば、どこにでもありふれた剣に思えた。
アクアロイドのほとんどは、やけつくような砂漠（さばく）と岩山だ。
聖剣（シェード）は、落ちつく場所を捜すかのように、一日じゅう、アクアロイドの上空を飛び続けた。
その輝く姿を見上げたアクアロイドの人間たちは、この星に伝説の聖剣（シェード）が降りてきたのを

知った。
この聖剣の、一見派手なデモンストレーションに心を動かすものは、ほとんどいなかった。
この星の人は、イノガニックに虐げられすぎていて、聖剣を手にしてイノガニックに抵抗する勇気をもつものは、めったになかったのだ。
だいいち、毎年行われる、イノガニックの人間狩りで、この星の若者たちは、おおかた死に絶えて、戦う意志も力もない老人たちだけが、滅びの日を待ち受けるように生きながらえていた。
だが、たった一人、熱い目で聖剣を見上げる少年がいた。
かつて、この星には、イノガニックと果敢に戦ったザックスという種族がいて勇猛をはせていたが、今は、わずかに残るザックス族の子孫の村にすら若者は消え、わずかに二人の子供が、種を保存するためだけにイノガニックの目を盗むようにして育てられていた。
生まれたときから、結婚を約束されたこの二人の男の子と女の子は、今、十五歳と十四歳に成長していた。
まだ、人間狩りの対象にはならない年ごろだった。
少年の名はナム、少女の名はラサ、両親から、オイルフルーツの精製法を教わり、星間商人のバオと取り引きして、村の唯一の収入源を支えているラサは、村の者たちから一目

置かれていた。

だが、ザックスの勇猛な男の血を引くナムは、戦いのない今のこの村では、穀つぶしの暴れん坊でしかなかった。

……いつか、皆を見返してやる……幼いころから負けずぎらいのナムは、いつも心の中で、そうつぶやきつづけてきた。

宙を飛ぶ聖剣を見つめ、聖剣を手に入れようと決心したのは、この星ではおそらくナム一人だったかもしれなかった。

「俺は、あの聖剣を手に入れて、ザックスの勇者になってやるんだ。」

夏の日の陽の光に焼けた岩の崖の上で、ナムはラサにそういった。

「ガキが無理すんじゃないの。」

「バーロ、俺は十五歳だぞ。来年には、イノガニックの人間狩りの対象年齢になるんだ。戦うための武器が必要さ。」

「戦わなくてもいいの。私があなたを守ってみせるわ。男一人ぐらい養える蓄えはあるし、星間商人のバオに、どこかイノガニックの少ない星へ密航をたのむ手だってあるもん。」

「そーいうのいやだっていってるだろ。女に頼って生きるのってさ。」

「頼るも頼らないも若いザックス族は私とあんただけじゃない。あんたに死なれたら、私

どうなっちゃうわけ？　二人で生きていくには、生活能力があるほうが、相手を守るよりないじゃん。」

こういう理屈を早口でしゃべられると、いつの世でも、男は女にとうてい勝てない。

「なんだっていいんだ。俺ァ女の力は借りねえ！　俺はあの聖剣（シェード）を手に入れるのだ！　いいか、女は口を出すんじゃねえ！」

ナムは、そう叫ぶと崖（がけ）を駆け降りていった。

「ナムのバカ……。」

ラサの目からちょっとだけ涙がこぼれた。

いつもこうなんだ。たわいのないことでけんかすると、ナムは村を飛びだし、十日は帰ってこない。

生活能力はあるといっても、ラサは十四歳の女の子だ。

しかも、同年代の子供はナム一人しかいない……ひとりぼっちの女の子……。

ナムだって、そんなラサの気持ちをわかってくれていい年だと思うのだ。

それに、今度という今度は伝説の聖剣（シェード）……万が一手に入れることができても、もうこの星にイノガニックと戦える若者はいない。

一人で戦うなんて、自殺以外のなにものでもない。

「ナムのやつ！　もう、知らないから……。」
　でも、もの心ついてから今まで、男といえば、ナムしかいない自分もせつないと、ラサは思うのだ。
〈こんなの続くんだったら、別の男に乗りかえちゃうぞ……。〉
　そうつぶやいてラサは、ふっと苦笑した。
〈別の男ってどこにいるのよ。〉
〈星間商人のバオ……？〉
〈問題外……。〉
〈その助手のキム？　……キムかあ……。〉
〈でも、ちょっと軟弱……。〉
〈それに異星の人だし……。〉
〈他にはなし……。なんだ、結局、ナムしかいないじゃない。〉
〈どうしようもないのよね……男の子の絶対数がないんだもん。〉
〈まるで男女交際のない女子校生みたいなもん。これじゃ、そっちの方面、徹底的に遅れちゃうな……。〉
　そんなとき、足元に、アクアロイド特有の軟体生物ムーンがすりよってきた。

子犬ぐらいの大きさのぶよぶよした体だが、かなり知能の高い動物で、人間の言葉はしゃべれないが、理解はできる頭脳をもっていた。

足元にいるのは体の三分の一を占める二つの瞳が愛くるしい、ラサのペットでモンガーという名前だった。

モンガーは、せつなそうなラサをさらにせつなそうに見上げた。

「モンガーどうしたの？　元気ないじゃん。私もちょっぴり落ちこみ……いつまでこうやって、ナムを追いかけなきゃなんないのかな。」

モンガーは、うつむいた。

「あ、そうか……モンガーも奥さんと子供たちを捜しているのよね。」

愛くるしく見えても、モンガーは成獣のしかも子持ちのオスだった。

だが、数か月前、ラサが見ても、ハンサムなオスのムーンが現れて、モンガーの連れ合いと子供を連れて消えてしまったのだ。

「逃げられちゃったんだよね。私ももうすぐそうなるかも……。危険なこの星では、いちど別れたら、いつまた会えるかわかんないし……。」

モンガーは、涙ぐんでうなずいた。

ラサは、そんなモンガーを見て、落ちこんでいた気持ちを、よいしょっと持ち上げるこ

とにした。
そして、モンガーにニッコリと微笑みかけた。
「モンガー、きっと帰ってきますよ。子供たちも奥さんも、今ごろきっとあなたのこと、思い出してると思うわ。」
モンガーは、ラサの心の奥を見つめるように涙ぐんでいた。
だから……ラサは、きゅうにモンガーが、いとおしくて、たまらなくなって……モンガーを抱きしめて、その場にしゃがみこんだ。
モンガーに頬ずりすると、なんだか涙が止まらなくて、涙が乾くまで、じっとそこで、モンガーを抱きしめつづけることにした。

聖剣は、落ちつく場所を捜しだすように、一日じゅう、アクアロイドの上空を飛び続け、やがて、夜になって、地表にわずかにしがみついているような森を見つけた。
そして、その中の小高い丘に囲まれた窪地へ降りていった。
そこには、巨大な墓石のような金属の塔が建っていた。
金属の塔の頂上に煙穴のようにぽっかりあいた穴へ、聖剣は、吸いこまれるように入っていった。■

ナムは、丘の上から、その塔をじっと見つめていた。
……とんでもないところに降りていっちゃったな……。
ナムは舌打ちした。
そこは、アクアロイドの人間たちが誰も近づきたがらぬ場所だった。
星空に突き刺さるように立つ塔は、支配者イノガニックたちが、オーガニックを畏怖させるためにつくった神殿だったのだ。
イノガニックを倒すための聖剣が、なぜイノガニックの神殿の中に入っていったのか、ナムには、わけがわからなかった。
しかし、十五歳の勇猛で知られるザックス族の末裔は、聖剣をあきらめたわけではなかった。
……聖剣がどこにあろうと、俺はぜったいに手に入れてやる……！
ナムの胸には無謀ともいえる勇気がわきあがっていた。

☆　A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

電算機のレーリアが、人間のアーリアにもういちど、念をおした。

「ほんとにこの条件でいいの？　聖剣(シェード)は、イノガニック側の手の中で、しかも、オーガニックの勇者の候補者は、十五歳の坊や一人。これで勝つのは、難しいんじゃないの？」
「やってみたいの、この最悪の条件で……。」
アーリアが答えた。
「それは、あなたの作ったゲームだから、あなたのかってだけれど……。でもね、私の記録(データ)の中に、こんな話があるの。
それはね、あるコンピューターゲームのプログラマーの話……。
ある日、彼は楽しさと難しさでは完璧ともいえるゲームを作りだしたの。
当然、世間では、誰(だれ)がゲームを作ったのか、話題になったわ。
でも彼は自分の名前を知らせようとしなかったの。
それは、ゲームを完全にクリアーできた人だけにわかるように、ゲームの最後に書き記されていたの。
世界じゅうのプレーヤーが、ゲームを作った人の名を知ろうとしてゲームに挑戦したわ。
そのゲームは最高のプレーヤーの、しかも頭脳と体力がベストのときでなければ、けっしてクリアーできないゲームだとされていたの。
でも、じつは誰もクリアーできないゲームだったんだわ。

最後に、作った本人がゲームに挑戦したわ。でも本人すら、勝つことができぬほど、難しかったの。
結局、そのプログラマーは、ゲームを作ったことすら認められず、ゲームの最後に記してあった名前は、誰の目にも触れなかったの。」
「レーリア、あなたは私になにがいいたいの？」
「勝つことが不可能なゲームをプログラミングしても、意味がないってこと。」
「不可能じゃないと思うわ。」
「あなたは、このゲームにそれこそ夢中になっている。このゲームが、まるであなたの人生のようにね。」
「かもしれないわ。」
アーリアはそうつぶやいた。
レーリアがやさしい口調でいった。
「だったらおやめなさい。負けるとわかったゲームをやってはいけないわ。負けるとわかった人生を、誰もやらないのと同じでね。」
「勝つわ。難しいからこそ勝ちたいのよ。」
アーリアの声は、泣き声に近かった。

「それほどいうのなら……先を続けましょう。あなたは、まず、イノガニックから聖剣を取り返さなければならない……そして、イノガニックは聖剣を勇者の手に渡さぬために、勇者の種を消そうとするわ。アクアロイドでは、勇者の条件を満たすコマはナムの一つしかない。おわかりね。」

「ええ、自分で作ったゲームですもの……。でも、私がプレーするいじょう、登場するコマを助けることはできなくても、コマに忠告することはできるわよね。」

「ええ……でも弱いコマになんの忠告をインプットしても、こなす能力があるかどうか疑問だわ。なにしろコマは、十五歳の子供ですもの……。」

「もうすぐそれがわかるわ。だって私はナムより若い十四歳だもん。」

ゲーム〝BIRTH〟は続行された。

ナムの決意

ナムは、金属の塔を見つめながら、夜じゅう、考え続けていた。
聖剣(シェード)を手に入れるには、イノガニックの神殿に忍びこむよりほかに方法はない。
でも、神殿の中には、狂暴なイノガニックソルジャーが、うじゃうじゃいるはずだ。
ナムはつぶやいた。
「イノガニックソルジャーか……ほんと、やばいんだよな。」
ソルジャー……それはもちろん戦うための兵士のことである。
だが、ただの兵士ではない。
イノガニックソルジャーは、人間ではないのだ。

全身が金属で作られ、手足は剣やバズーカ砲でできた武器そのものなのだ。
しかも、人間並の知能をもち、感情すらもっている機械生物なのだ。
生身の人間がとてもかなう相手ではない。
毎年、一回行われる人間狩りのとき以外はめったに神殿の外には出てこないが、身長三メートルを越え、プロテクターをつけたアメリカンフットボールの選手のような金属の胴体、なにより頭部に不気味に光る緑色の一つ目は、この星に住む人間はおろか、オーガニック生物のすべてにとって恐怖の的だった。
そして、イノガニックソルジャーの一つ目が、オーガニック生物の顔を真正面から見つめ、あざけ笑うように光ったとき、生きながらえたものは、ほとんどいなかった。
ザックスの村人たちを、情け容赦なく惨殺する姿を思い出し、ナムは背筋に寒気が走った。
さっきまでの決意がしだいにしぼんでいくのが感じられた。
〈聖剣(シェード)を取るのやめよかな……。〉
〈でもせっかく決めたんだもんな……。〉
〈ええい、じれったい。〉
ナムは、靴をポーンとほうり投げた。
裏が上なら決行、表が上ならやめよ。

靴底は、裏のほうが重い……表が出る確率のほうが高いことを、ナムはよく知っていた。
案の定、地面でジャンプした靴は表を上にして止まりかけた。
〈……やっぱ、やーめた……あれ……？〉
止まりかけた靴がグラグラと揺れている。そして、次の瞬間、くるりとひっくりかえった。
ナムも……こけた。
まるで、なにか目の見えない力で、靴が動かされたようだった。
〈……そりゃないでしょ……。〉
しかし、結果が出たには違いない。
靴は、あきらかに、聖剣（シェード）を取れといっている。
〈……もう一回、やってみっか……。〉
ナムは、もう片方の靴をほうった。
やはり、裏側が出た。
〈……二つとも、裏か……俺、足、三本ないしなあ……もう靴はない……やっかあ……。〉
ナムはザックス族特有の決断の早さをその血の中に引き継いでいる。
ナムは、聖剣（シェード）を手に入れることをもう一度心に誓った。
だが、だからといって、素手で神殿に忍びこむほど無茶な少年ではなかった。

〈……なんか武器を手に入れなきゃ……武器っていったってなあ……村にはないし……まさか棍棒や竹槍が、イノガニックソルジャーに通用するわけないもんね……。〉

武器を持っているっていったら……あ、いました、いました。ロリコン中年、イヤラシオジサンが……。

ナムは、ラサの元へオイルフルーツを買いにくる星間商人バオの顔を思い出したのだ。

ラサに取り入って、バオから武器を買ってもらおう……。

ここいら、「女の力は借りねえ！」とたんかをきったわりには、いささか調子がよすぎるが、ナムには、その矛盾がわかるほど、デリケートな神経な持ち主ではなさそうだ。

〈……だいいち、俺の欲しいのは、矛でも盾でもない。イノガニックソルジャーとけんかできる武器だもんね――！〉

たしかにラサは、ロリコンの星間商人バオからオイルフルーツの代償以外に、ときどきプレゼントをもらっていた。

「永久に枯れない花束」とか、「宇宙怪獣ドゴラのぬいぐるみ」とか、「リコー星名物、計算機付き腕時計」とか、「二千五百身合体パズルロボットプラモデル」とか、「カナメ星名物、一時間二十分一本勝負、数万枚使用のライター、アニメーター殺しアニメのセル画」とか、他愛のないのが多かったが、車輪のないスクーターのようなフローターバイクだけ

は、ナムにもうらやましかった。
「……ナムも欲しければ、あのイヤラシオジサンからもらってあげようか？」
「いらないよ。ラサをエサにしたものなんて。」
ナムはムキになって断った憶えがあった。
「……だいいち、イヤラシイだの、好きくないだの思っている中年オジンから、どうして
ラサはプレゼントをもらうんだよ。」
口をとんがらせるナムにラサは、遠くを見る目で、
「女ってね……殿方からプレゼントされるのって、どこかうれしいのよね……相手がどん
な人でもね。……私の足ながおじさん……じゃなくて、水かきおじさん……。」
そこまでいって、ナムを横目でチラリと見たりして、
「誰かさんなんて、なんにもプレゼントしてくれないもんね……。」
「お前だってなにもくれないじゃないか。ギブ・アンド・テイクじゃい。」
すると、ラサは、トロンとした目で、ナムを見たりして――。
「あげてもいいよ。」
そして、目を閉じたりして――。
ナムは赤くなって――。

「冗談いうな……おちょくるのか!?」
なんていって逃げ出したりして――。
〈あれ？　なんの話をしてるんだっけ――。〉
ナムは、にやけだした自分の顔をパシンと叩いた。
〈……今は、そんなときじゃない……聖剣のことを考えなきゃ……ともかく、今は大テーマがあるんだから、ラサに頼んでバオから武器をもらっても、わーるくないのだ。そう思いこむのだ。
それにしてもバオは今、宇宙で商売中だ。当分、この星に来そうにないし……ま、いいや、聖剣は神殿の中だ。あせって飛びこんで死ぬこともない。
バオが来るのをゆっくり待ちましょ……。〉
そこまで思って、なんとなく長生きができそうな気になり、ナムはホッとため息をついた。
ふと気づくと、丘の向こうから朝陽がのぼり、遠くでニワトリもどきの朝を告げる鳴き声が聞こえた。
ナムは大きく伸びをした。
「ハラ減ったな……♪ニワトリ鳴くから、か――えろ。」

そのときだった。
ギギギ……。
突然、機械音を響かせて、神殿の門が開いていく。
ナムはあわてて茂みの陰に身を伏せた。
ブルルル……そんな音が開ききった門の奥から、しだいに大きく〈なっていく。〉
〈なにかのエンジン音だ。〉
音はやがて耳をつんざく一五〇ホンの騒音になって――。
〈……出た！〉
「ヤッホー！」
歓声をあげてイノガニックソルジャー三体が、二五〇〇シーシーの白バイならぬ赤バイに乗って飛び出していく。
あっというまに、三台の赤バイは丘の向こうに走り去っていった。
〈……なぜだろう。人間狩りの時期じゃないのに……。〉
ナムは、わけのわからない胸騒ぎを感じて帰り道を急いだ。
赤バイに乗ったイノガニックソルジャーたちは、上層部から命令を受けていた。

……聖剣(シェード)がこの星に来たいじょう、オーガニックの勇者の候補者がこの星にいるはずだ……その勇者を見つけしだい殺せ……。

イノガニックは時期はずれの人間狩りを開始したのだ。

ファースト・ファイト

赤茶けた砂漠を、砂塵をまき散らしながら一台のフローターバイクが走っていく。
血のような本体の上に突き出したレバーに、しがみついて乗っているのはラサだ。
ラサは、まるでスケートボードの選手のように腰を振りながら、ハンドリングしている。

> **フローターバイク使用説明書**
>
> フローターバイクは反重力制御で、地上一メートルを浮かんで疾走する乗り物だが、スピードは、レバーで調整するものの、方向は体重の移動で

ハンドリングしなければならず、かなりの運動神経を必要とする。
免許は原付きで高校生でも取れるが、公道使用には学校の許可を取ること。

アクアロイド星、サイタマ地区　教育委員会

〈……ん、もう、まったく、ナムのやつ鉄砲玉なんだから……けっきょく、昨日は帰ってこなかった。
お弁当も持っていないのに……まったく世話のやける子……。〉
ラサは、ナムを捜しにやってきたのだ。
今はもう、ザックス族に二人っきりしか残っていない若者どうし。
〈……やっぱりほうっておけないもん……でも、あのばか、どこに行っちゃったんだろ……。〉
ラサは、フローターバイクを止めて、あたりを見わたした。
いつのまにか、バイクは砂漠を抜けて、岩山地帯の谷間に入っていた。
ラサは、谷を見降ろす山の頂を見上げた。
〈あら……。〉
なにかが、陽の光でキラリと光った。

〈あれは？　……金属……？〉

山の頂で光ったもの……それは、赤バイに乗ったイノガニックソルジャーのヘルメットだった。

三体のソルジャーたちも、ラサの姿を見つけていた。

「なあんだ、若いねえちゃんだなや。」

「ありは、原動機付き自転車やないけ。」

「高校の許可、取っとんじゃろか。」

アクアロイドは辺境の星である。

どうやらこのイノガニックソルジャーも辺境出身らしい。

「ともかく、聖剣（シェード）の勇者になりそうな若いの殺さにゃならんけ……あり、殺すだか……？」

「あんなねえちゃんが勇者になれっか？」

「女っ子は、スイジ、センタク、イドバタカイギ、これモットーだっちゃ。」

「ばかこけ、おみゃー田舎もんだからなあ、都会じゃキャリャヤギャルちゅうて、女のほうが強いちゅうのこれ、常識だっぺ。」

「ソルジャーたちは、皆、同じ顔で、口もないじゃん。誰がどの言葉をいっているのかわからないでしょ。せめて口パクがあるといいんだがなあー。」

某アニメーション声優　談

ソルジャーたちは、話を続けた。
「じゃ、やっぱあの女っ子殺すべか……。」
「くさい臭いは元からたたなきゃだめ!」
「それにしても、えんれえ、ブスッ子でねえーの。」
「女さかしゅうして牛売り損う。」
ラサの名誉のためにいっておくが、これはイノガニックのしかも辺境出身者の美意識である。だが、次の会話については、イノガニックもオーガニックも同意見だ。
「すんげえ、おしりっ子!」
「うっは——、たまんねっす。」
「早いとこ、イノガニック赤バイの怖ろしさを見せてやろうぜ。」

イノガニックたちは、赤バイのスイッチを入れた。
マフラーから二五〇〇シーシーの排気音が吹き出す。
タイヤが岩をはじきとばす。
「イエ～イ。」
三台のバイクは、ほぼ垂直に近い岩山を駆け降りていった。
「イノガニックだわ！」
ラサは、フローターバイクのスイッチを入れた。
イノガニックの一体が叫んだ。
「あっ、感づかれてしもた。」
これだけ派手に出現したら、気がつかないほうがおかしい。
三台の赤バイはさらにスピードを上げた。
「わしに続け！」
「旅は道連れ、世は情け！」
だが、ラサのフローターバイクには、なかなか追いつけない。
イノガニックの一人が首をひねった。
「ありィ？　原付きにあんなスピードありィ？」

「多分、改造したんだべ。」
「最近の暴走族のガキャ！　金持ってやがるからなあ。」
「こっちゃ、働けど働けど、なおわが暮らし楽にならざりき、じっと手を見る……。」
本気で、手を見たもんだから、崖に激突！　バラバラになったバイクの部品の下で、
「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、生者必滅、会者定離……。」
かくして、ラサを追う赤いバイクはあっというまに二台になった。
「ううう、許せん！」
「おしりっ子、待て！」
赤いバイクの一台は、さらにさらにスピードを上げた。
「音速、超えた！　……けど……行きすぎィ！」
いつのまにか、赤いバイクは、ラサのフローターバイクを追い抜いていた。
ラサは、二台の赤バイクに前後をはさまれていた。
前方を走る赤バイクが叫んだ。
「よーし、秘密兵器を見せたるわい！　ソルジャーマキビシ発射！」
赤バイクの後部のフタが開いて、マキビシが散らばる。
日本忍者の伝統的武器は、ラサに通じるか！

「効かない！」
効くはずがなあーい。フローターバイクは宙を飛んでいるのだから。
「この手が古いなら、まだまだあるで。秘密兵器、イノガニックオイル！」
このイノガニック、まるでわかっていない。
「007、ゴールドフィンガー」という映画でジェームズ・ボンドが使った路上にオイルを撒いて追っ手をまく方法も、敵の車輪が地面に付いているからこそスリップするわけで、したがってラサには効かず、迷惑するのは、ラサの後を走る赤バイだけ。
「おんどりゃ、アホーか！」
絶叫を残して、スリップダウンで大爆発！　ラサが、なんにもしないうちに、赤バイは二台脱落。
「戦友よ、我は君の死をけっしてむだにはしないだろう。」
赤バイを止めて、敬礼するイノガニックの頭上に石がコツン。
「ムギュ!?」
見上げる頭上の岩場に、石をぶつけた少年が立っていた。
ナムだ。
ナムは、走り去ろうとするラサに叫んだ。

「ラサ！　だいじょうぶか！」
　急ブレーキをかけて止まったラサは、振り返った。
「ナム……。」
「ラサ、俺が石、投げて助けてやったんだぞい、それに聖剣（シェード）のありかも見つけたぞ～！」
　ラサは舌打ちした。
「あのばか！」
　ラサは、フローターバイクを岩場に向けて疾走させた。
　ラサはナムに叫んだ。
「乗って、ナム！」
「やあ、おはよ。新しい恋人と鬼ごっこかい？」
　ラサは、ナムをにらみつけた。
「冗談（じょうだん）いっている場合？　なんで出てきたのよ。足手まといになるだけじゃん。」
「あん？」
「あんな石っころで、イノガニックがくたばるわけないじゃん。」
　と、岩場の下を指さした。
　だが、そこにイノガニックの姿はなく、赤バイだけが置かれてあった。

「そうよ、おじさんがくたばるわけないでしょ。」
二人の背後で声がした。
いつのまにか、イノガニックが岩場の上へ登ってきていたのだ。
「そんでもって、おじさん、ご気分は？」
冷や汗を一筋たらして、ラサが聞いた。
「当然……おじさんは、怒ってるんだぞ！」
イノガニックの手が剣に変形して、いきなり二人の頭上に振りおろされた。
とっさに身をかわすラサとナムの下で、フローターバイクが木端みじんにはじけた。
ナムは、飛び散ったフローターバイクのレバーを握って身がまえた。
「ラサ、さっさと逃げろ！」
「でも！」
「ここは俺にまかせろ！」
イノガニックが、ナムにいった。
「子供は、大人に逆らっちゃだめよ。」
「なにが大人だ。イノガニックのくせに人間の女の子を追いかけちゃって……ロリコンどころか、もはや変態だ――っ！」

「そう、おじさんはね、すこし変態ぎみなの……だから、ほんとうは、相手を一撃で殺すんだけど、おじさんはね、じっくり、いたぶって殺すのよ。」

表情のないイノガニックの一つ目が、ニヤリと笑ったように見えて、ナムはゾーッとした。

このあとは、語るに恐ろしい光景が展開しましたので、表現を変え、警察の取り調べ室の調書風に書いてみます。

――僕は、ラサだけは助けようと思ってもういちどラサにいいました。

「逃げろ、ラサ、僕のために。」

ラサはすがるような目で僕にいいました。

「ナム、死なないで。」……僕はラサを勇気づけようとして、「わかってる。死にゃあしないよ。」って。

刑事A「それからどうしましたっ。」

「僕は、岩のでっぱりを利用して、ジャンプして、レバーを棍棒がわりにしてイノガニックの頭に振りおろしました――。

刑事B「君が先に手を出したわけだ。過剰防衛にならんか？」

刑事A「さあ、このケースの場合、イノガニックのほうにも殺意があったことは明解ですからな。」

刑事B「で、イノガニックはどうしたのかね。」

――びくともせず、バズーカ砲に変形した手で、僕をはらいました。僕は岩場に倒れました。

刑事A「そのときのケガが、全治三日の尾骶骨打撲傷だね。」

――だと思います。

刑事B「それからどうしたのかね。」

――僕は痛さをたえて、その場から飛びのきました。だって、イノガニックが剣を、僕の頭の上に振りかざしていたからです。

そして、手に持ったレバーを、相手の剣に叩きつけました。

だけどそれもはじきとばされ。……もうだめかと思ったのに、イノガニックは、僕を剣で殺そうとせず、剣を手の形に変形させ、僕を殴りはじめたのです。

刑事A「全部で何回殴られたかね。」

――覚えているだけで五十発はありました。

刑事A「イノガニックのパンチを五十発も浴びてよく全治一週間の打撲傷ですんだね。」
刑事B「てかげんしたんでしょうな。ときどきそういうイノガニックがいるんですよ。
　じわりじわりと相手を苦しませて殺そうというのが……その間、ラサさんはどうしていましたか?」
――ちょっと離れたところで僕が一発一発殴られるたびに、「やめて。」「苦しめないで。」と叫んでいました。ラサは、何度も、僕にかけよろうとしましたが、そのたびに、僕も、「来るな!」って引き止めたんです。
刑事A「うん、それがまた、変態イノガニックを気持ちよくさせたんですな。」
刑事B「ナム君、ラサさんに感謝しなさいよ。そのイノガニックはラサさんの悲鳴が聞きたくて、君をひと思いに殺さなかったのかもしれないよ。」
刑事A「ありうることだな。で、五十発殴られてからどうしたのかね。」
――イノガニックは、ズタボロになった僕をラサのそばにほうりなげたんです。

「おしりっ子のボーイフレンド、こんなになっちゃった。どーする?」
ってていいました。
ラサは、倒れている僕を抱きしめて泣きじゃくりました。——
刑事A「で、イノガニックはどうしたのかね。」
——「ちょっと、おじさんもオーバーヒートしちゃった……一休みしよう。」
そういって、岩の日陰にすわって、オイルパイプを喫い出しました。
「逃げちゃだめよ、お楽しみはまだまだ続くからね。」って、バズーカ砲に
変形した手をこちらに向けていたから、どーしても逃げられませんでした。
刑事B「それから、一分もたたないうちにあの事件が、起こったんだね。」
——ええ、殴られすぎてぼんやりしていたからはっきりしないんですけど、
突然、頭の上から、「ラサちゅわ〜ん。」っていう声が……。
いやらしいというか虫酸が走るというか、じんましんが起きるというか
……そんな男の声がして、頭の上が暗くなって、なにかが僕たちの前に落
ちてきたんです。
そして、イノガニックの悲鳴とグシャという音がしました。
刑事A「それが宇宙船だったわけだ。」

アクアロイド星、少年暴行事件ならびに、宇宙船交通事故に関するナムの調書より抜粋。

――ええ、星間商人のバオさんの船で……。イノガニックは、その下敷きになってつぶれちゃったんです。あとでバオさんあわててました。上空からラサの姿が見えたんで、会いたさ一心で降りてきたんで、岩の陰のイノガニックまで気がつかなかった。……やばいなあ、よそ見運転しちゃった。でも酒は一滴も飲んでいなかったといっていました。
刑事B「どうやら単なる交通事故のようですな。ナム君、残念だが、君を殴ったイノガニックは死んでしまったので、慰謝料もキズの治療費もでない。ま、犬に嚙まれたとでも思ってあきらめるんだね。ま、自分が殺されなかったことでよしとせねばな……。」
――でも、みじめです――。
刑事A「ま、そこは耐えて……星間商人のバオ君は、業務上過失致死で罰金……ラサさんを追いかけて、衝突、転倒して死んだイノガニックは、本人の過失でラサさんには罪はない。これにて、一件落着！

こうして、聖剣(シェード)を追い、さらにラサ会いたさに、わずか一日で、宇宙船を修理して、アクアロイド星に降りてきたバオとキムのおかげで、ラサとナムはイノガニックの魔の手から逃れることができたのである。

☆　A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

アーリアはきげんが悪かった。
そして、レーリアをにらみつけた。
「レーリア、あなた手抜きをしたでしょ。」
「どうして？」
電算機(コンピューター)のレーリアが聞いた。
「あなたの用意したイノガニックソルジャーはできが悪すぎたわ。」
「手抜きじゃないわ。できの悪いコマを整理したかっただけ。……まだまだ手持ちの札はいっぱい……それより、あなたも手抜きというわりには相当苦しんだじゃない。ナムは死にかかるし、早くも、あなたは援助用のコマをさらけ出してしまった。バオとキムがそれでしょ。こんなに早く使い出していいわけ？」

アーリアは、いたずらっぽく微笑してレーリアに答えた。
「今回は、手ゴマを最初からフル回転して全力でゲームしたいの……。」
「お好きなように……でも、今日はゲームを中断しましょう。そろそろ、あなたは、病院へ行く時間よ。」
アーリアの顔から微笑が消えた。
「いやだな……検査、検査……私、モルモットじゃないのに……。」
そのとき、ブザーが鳴り、病人の乗るストレッチャーが、自動的にアーリアの傍へすべりこんできた。
レーリアが、アーリアをうながすようにいった。
「お勤めご苦労さま。」
「しゃあない。行ってくっか。」
アーリアは肩をすくめるとストレッチャーに乗り、出ていった。
レーリアの顔に、「ゲーム、一時休止」の表示が出た。

☆　A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

翌日、アーリアはいつもの青白い顔をさらに真っ青にさせて、レーリアの前にすわっていた。

「体調が悪そうね。だいじょうぶ？」

レーリアが優しく聞いた。

「多分だいじょうぶ、きっとだいじょうぶ……。」

アーリアは、無理して笑ってみせた。

「そうも見えないわ。今日のゲームはやめにしましょう。」

「いいの、ちょっと貧血ぎみなだけ……。

昨日、病院で、血を採られたもんだから……。最近、毎日のように血を採られるんだもん。まいっちゃうわ。」

「でも、採られた分は、ちゃんと輸血してくれるんでしょ。」

「まあね、でも輸血された血って、なんか違うのよね……なんとなく、コクがなくて……。」

「しようがないわよ。輸血の血は、他人の血ですもの……最初はしっくりしないものよ。」

「うん、なんちゅうか、その、ほんとうの牛乳じゃなくて、豆乳飲んでいる感じ。」

「豆乳は栄養があるわ。」

「そりゃ、そうだけど……ま、文句いってもしゃあないわ……ゲームを続けましょ。」

「いいの？」

「早くゲームに勝ちたいの。」

「そればっか。」

「そう、私にはそれっきゃない。」

「では。」

「では……。」

アーリアは、キーボードに向かってかまえた。レーリアの顔に「ゲーム再開」が表示された。

神殿への決意

ラサとナムの前に降りてきた宇宙船から出てきたバオとキムは、下敷きになってペチャンコになったイノガニックソルジャーを見て、思わず抱きあった。
「えらいことをしちまったぜ!」
「そのようですね。」
「どうする?」
「どうしましょ……。」
二人は見つめあっていたが、
「事故だよね、事故……。」

バオがキムの肩をゆすった。

故意にイノガニックソルジャーを押しつぶした、などということが神殿に知られでもすれば、反逆の罪でたちまち殺されてしまうのは明らかだった。

「え、ええ、ま、事故には違いないけど……。」

キムがうなずく。

「そうじゃ、事故じゃ。」

バオは、突然現れた宇宙船にまだ呆然としているラサにかけより、

「ね、ね、ラサちゅわーん。事故よね。それで口裏合わそうね。グハハハ。」

笑ってごまかし、おちゃらかすように、

「事故じゃ、事故じゃ……ランランラン。」

ラサの手を取って、抱きしめるようにして踊りだした。

バオの酒くさい口臭にハッと我にかえったラサは、

「場合じゃない！」

パシン！　バオの頰を平手打ち……。

倒れているナムにかけよった。

バオは、平手打ちされた頰を押さえて大粒の涙を放水した。

「ラサちゃんがいじめた～ァ！」
キムが、バオの肩を優しく叩く。
「そんなに涙をむだづかいしちゃいけませんよ。」
「でも、わし、せつなくて、悲しくて。」
「どさくさにまぎれ、中年をさらけ出すからいけないのです。
ラサとナム君は一心同体……。
誰も間に入りこめません。この完璧無比の美形少年の僕すら、ラサ君の心を奪うことができないのですから……。」
「わき役はつらいのね。」
バオが、しゃくりあげながらつぶやいた。
「どんなに目立ったところで、しょせん、引き立て役です。」
キムの目にも涙――。
「つらいわ～ッ！」
二人は抱き合って、オイオイ泣きだした。
だが……。
ラサの膝枕で横たわる傷だらけのナムの唇からもれるうわ言を耳にすると、シャキッと

背筋を伸ばして、涙腺のバルブをキチッとしめた。
「聖剣……聖剣……。」
ナムは、その言葉だけを繰り返していた。
「聖剣？　……聖剣といったな。」
バオが、ナムの顔をのぞきこんだ。
「あんまり顔を近づけないで。くさい息でナムが窒息しちゃうわ。」
ラサがバオに注意した。
「こりゃ、失礼！」
バオは、ポケットからマウスペットを出してシュウシュウ……。
「これならいいでしょ。ラサちゃんの汗の香り。」
「んな、もん、どこから手に入れたんじゃ！」
バシン！
二度めのラサの平手打ちがバオの頰に飛んだのは明らかですが、先を続けます。
バオは、両頰を押さえながら真顔でラサに聞いた。
「聖剣とナム君になんの関わりが？」
「ナムは、宙を飛ぶ聖剣を見て追いかけていったの。それでどうやら見つけたらしいわ。」

「なに？　で、聖剣(シェード)はどこじゃ、え？　どこなんじゃ？」
バオは、倒れているナムのえり首をつかんで揺すった。
「けが人になにすんの!?」
三回めの平手打ち!!
キムが割って入った。
「今のナム君の状態じゃ、なにを聞いても無理ですよ。」
たしかに完全に気を失っている。
「それもそうだね。」
バオはラサに猫なで声を出した。
「ラサちゅわん。あの聖剣(シェード)はね、某オーガニック反乱軍に頼まれて捜しとったんだよ。ナムが聖剣(シェード)のありかを知っとんだったら聞き出して教えてくりゃれ。わし、反乱軍に届けにゃならんけ。」
ラサは、ニヤリと笑って、
「ウッソー。どうせ、どこかに高く売りつけるつもりでしょ。」
「あら、あっけんからんとグサリと胸突くお言葉。やだなぁ、わしがそんなことするように見える？」

「見えるからいってるんじゃない。」
そっぽを向いていうラサに、キムもうなずいた。
「そら、そーだよ……。」
「こら、キム！　お前、それでもわしの相棒か？」
食ってかかるバオに、キムがしゃらりと、
「うん、そーだよ……でも、ラサとナム君もお友だちだし……。」
「気が多い材木屋、お友だちは一人でいいの！」
二人がもめているとラサがつぶやいた。
「教えてあげてもいいわ。もし、ナムが聖剣(シェード)のありかを知っているならね。」
「えーっ？」
バオとキムはラサの顔を見つめた。
ラサは思ったのだ。
〈もう今日みたいなこと、たくさん……聖剣(シェード)なんか持ったら、お調子者のナムは、勇者気取りでイノガニックに突っかかって……ああ、いやだ……けがだけじゃすまないわ……聖剣(シェード)なんか、ないほうがいいんだわ……。〉
「うん、教えてあげるわ。ナムから聞きだしてね。」

「わー、あんがと。」
バオは、こりずにラサに抱きついた。
キムは、四度めの平手打ちの気配を感じて他人ごとながら、肩をすくめた。
だが四度めはなかった。
「?」
バオに抱きすくめられながら、キムにウインクしたラサが、甘い声でバオの耳元でささやいた。
「それでさぁ〜、教えてあげるかわりにさぁ……。」
「うん、なんだい、ラサちゃん。」
「私のフローターバイク壊れちゃったんだ。」
「ちゃっかりしてますねェ……。」と思わずキムがつぶやいた。
ラサはペロリと舌を出した。
バオの宇宙船の格納庫から、商品用のフローターバイクの新型をせしめたラサは、気絶したナムを乗せた。バオが、未練がましく後ろからいった。
「もう行っちゃうの?」
「うん、早く村に帰って、ナムのけがを治したいもん。」

「そっか、じゃあわし、イノガニックの死体片づけたら、すぐ、村へ行くからね。」
「うん、どうも、ありがとう、バオさん。」
ラサはフローターバイクを発進させた。
「聞いたかキム。ラサちゃんが、〝ありがとう、バオさん〟っていってくれた。」
バオは、感無量極まりないといった感じでうめいた。
「チッチッチッ、甘いな……君は。」
キムが、ニヒルにいった。
「そのうち、尻の毛まで抜かれるぜ。あの娘によ……最近の娘は、とっぽいからな。」
「わかってんだよ。だがな、それでもいいんだ、俺にゃな……。」
バオが、葉巻の煙をフーッと吐いた。
「生まれてこのかた、女ってものを知らなかった。せつない中年の、これはロマンだ。」
「中年といっても、三百年間かけた中年ですからね。」とキム。
「それだけに貴重じゃねえか……三百年かけてさいた花の中年、これが愛の姿よ……美しいだろ。」
「珍しいことはたしかです……でも……。」
「でも？」

バオが聞きかえした。
キムはいつになく暗い表情で――。
「こんなことやってる僕たちって、どういう性格なんでしょうね。」
「さあな……やっているわしも把握できん。」
バオが肩をすくめるとキムがつぶやいた。
「インテリの僕としては、こうも性格に一貫性がないと、不安になってくるんですよね。僕ってまともな人間かな？　どこかが狂っているんじゃないかなって……。」
「もしかしたら色気づいたガキのSF学芸会のピエロ役……。」
「それ、それ……でも今どき高校生の芝居でもこんな我々みたいなキャラクターでできますか？」
「ウーム。」
キムとバオは考えこんでしまった。

ラサのフローターバイクは、ザックスの村に向かってまっしぐらに進んでいく。
「うん、なかなか快調……ね、ナム。」
ラサは、フローターバイクの上で気絶しているナムにささやいた。

「ん……？」
ナムがぼんやりと目を開いた。
「ここ、どこ？」
目の前に、丸い二つのなにかがある。ナムは、思わずタッチしてみた。
そして……。
「こら——尻をもむな！」
ラサが、たいして怒りもしていないような表情で叫んだ。
「あ、ども……。」
頭をかいたナムは、折れた歯をペッと吐き出してからつぶやいた。
「俺……どうしちゃったんだ。」
「イノガニックにやられてコテンパン。」
「コテンパンか……。」
ナムは、うつむいた。明らかに、体も表情も傷ついていた。
「……あ……。」
ラサは、ナムのそんな暗い表情を見たのは、はじめてだった。
〈……でも、……。〉ラサは思った。

〈……私のお尻に手が出るってことはだいじょうぶってことかな……そう、明日になれば元気になるわ……きっと！〉

だがナムの気持ちは、ラサの思うよりさらに打ちのめされていた。

フローターバイクは、ザックスの村に入っていった。

数百人あまりのザックスの村には、荒れ果てた木と藁の家が建ち並び、かつて勇者の村だった面影はまるでない。

ラサとナム以外の若者はいず、ほかは皆、六十を過ぎた老人ばかりだ。

そして、滅びを待つ村には、甘酸っぱい煙が立ちこめていた。

星間商人が持ちこんだ、夢見草を燃やした煙だ。

煙には、一種の幻覚作用があり、老人たちは煙を吸いこんでは、過去の栄光の日々を思い、また、村の平和な日々の思い出に酔っているのだ。

ラサはフローターバイクを、ナムの伯父の小屋の前で止めていった。

「伯父さんの家で、傷を治す？」

その家は、暴れん坊で村人にきらわれているナムにとって、村の家々の軒下のほかで、泊まれる唯一、身寄りの家だった。

ナムは、フローターバイクから身を起こし、開け放たれた扉の中をのぞいた。
囲炉裏をはさんで、ナムの伯父と伯母がすわっている。もう七十歳は軽く超えた老人だ。
二人は茶をすすりながらのどかに語り合っていた。
「ナムはどこへ行ったんじゃ……。」
「さあ、どこへ行ったんでしょうねえ……きっとラサちゃんを追いかけているんでしょう。」
伯母の言葉にうなずくと、伯父は茶をすすって、
「これは、また香りのいいお茶じゃのう。」
「新茶ですのよ。きのうから収穫がはじまりましてねぇ……。」
「ほう、もう、そんな季節か……。」
ナムは、そんな情景にかぶりを振った。
〈……新茶なもんか、もうこの村の茶畑なんか枯れ果てている。あのお茶は、星間商人が持ってきた別の星の紅茶なんだ……。〉
一見、のどかに見える老夫婦のやりとりも、じつは、毎日毎日同じ時間になると繰り返される、夢見草の幻覚のなせる術なのだ。
伯母は、窓の外を見てつぶやく。

「おや、雨が降ってきたようですね。」
「洗濯物は取り入れたのかい。」
伯父の言葉に、伯母はふらふらと立ち上がり、
「おや、おや、いけませんね。」
あたふたと庭へ出て、洗濯物を取り入れる。
〈……雨なんて……半年、この村には降ったことがなかった――これも幻覚――村が平和だったころの日々の再現……。〉
夢見草の燃える臭いを吸う時間になると、村じゅうの人たちが、この家のような「幸福な家庭ごっこ」を始めるのだ。
ナムは、夢見草を吸う時間になると、いたたまれず、いつも村の外へ遊びに行くのだった。
「い～いとこ暗いわ、この村は……。」
ラサがつぶやいた。
「こんなところで傷を治すのはごめんだ。俺までみょうな夢を見る。」
ナムの言葉にラサもうなずく。
「私の家においでよ。あそこなら夢見草のいやな臭いも届かないもの。」

「いいのかい？」
「私とあなたでしょ。」
さりげなくそういってラサは、フローターバイクを発進させた。
ラサの家は、村からすこし離れたオイルフルーツの果樹園の中にあった。
オイルフルーツの実から採ったオイルは、一滴で石油の数千倍のエネルギーを持っている。しかも、どんなに刺激をうけても、大爆発する危険性のない安全なエネルギーで、清浄なウランとして、星間商人の間では、ダイヤモンドより高く取り引きされていた。

ラサの家は、そのオイル精製所も兼ねていた。
ラサは、自分のベッドにナムを寝かせていった。
「薬を調合するわ。わたしの薬、抜群。一週間もすれば治ると思うわ。」
ナムはすねたようにいいかえした。
「ほっといてくれ。しぜんに治るさ。」
ラサはニッコリ笑って、
「あれ？　ボロチョンにやられたわりには元気じゃん。」
「負けちゃいなかったさ。」

ナムはムキになる。

「いいえ、ナムの負け、哀れにも一方的。バオがタオルを入れなきゃ、K・O、まちがいなし。」

ラサはナムの聖剣への思いを消したくて、いいつづけた。

「天下のナム様でも、相手が悪すぎたのよね。」

いきなり、ナムがどなった。

「はっきりいったらどうなんだ。あんな一匹のガラクタにK・Oされたらおしまいだって！聖剣なんて手に入りっこないって！　だって、だって……聖剣はいま、イノガニックの神殿の中なんだ。イノガニックのいっぱいいいる神殿の中なんだ！」

「……神殿の中……。」

ラサは思わず息をのんだ。

ナムは、こぶしを握りしめて、嗚咽をもらした。

「そりゃ、神殿に忍びこんだら、生きて出てこれるとは思っちゃいない。でも、もしかして、もしかして、ほんのすこしでも見こみがあるかと思っていたんだよ。でも、今日、わかったんだ。イノガニックと俺の力は違いすぎる。完全にかないっこない――俺は、勇者にはなれない。一生なれない。たとえ、人間狩りから逃げられたって、バオの宇宙船で他

の星に密航したって、一生、俺は、イノガニックの目から、こそこそ逃げまわらなきゃならない。あげくの果てが、この村のじいさんばあさんみたいに、ラサと夢見草を吸って、ままごとごっこってわけだ……そんなの、そんなの……。」

ラサは、こんなにナムが苦しんでいる姿を見たことがなかった。

「ナム……。」

「ラサの許婚のナムって男は、クズさ……どうしようもない男なのさ……お前だってそう思ってんだろ！」

ナムは、枕をかぶって嗚咽を出しつづけた。

「誰もそんなこと思ってないのにな。」

ラサのつぶやきに、ナムは、もうなにも答えず泣き続けていた。

ラサは、さびしく肩をすくめて部屋から出ていった。なんだかとても悲しかった。

いつも暴れまわって、ザックスの末裔だといばりちらしていたナムと比べて、今日はあまりにみじめだった。

いつも口げんかすると、かんしゃくを起こして、ラサの前から最低十日は姿をくらましてしまうナムのほうが、ラサには似合っているような気がした。

ラサは深いため息をもらした。

そのとき、足元にペットのモンガーが飛び跳ねながらやってきた。
「モンガー……。」
〈……モンガーは、私がこういう気持ちのときっていつもそばにいてくれる……。〉
ラサは、モンガーを抱きしめた。
「おかしいんですよね。今日のナム……。」
モンガーもせつなそうな表情をみせた。
「あなたもひとりぼっち……もし、私もひとりぼっちになったら、私とずーっといっしょにいてくれる？ モンガーは、奥さんを亡くしちゃってるし、そして私がご主人を亡くしちゃったら……いっしょにいてくれる？」
モンガーの目は、ニッコリ笑っていた。
「ありがと。」
ラサはモンガーに頬ずりすると、オイルフルーツの精製機械室へ入っていった。
今日の仕事は、まだ終わっていないのだ。

夕方が来た。
ラサは、細心の注意をはらうオイルフルーツの精製作業にくたくたになっていた。

それでも、ナムの夕食を作り、寝ている部屋に持っていった。
だが、ラサはドア口で立ち止まった。
中でほえるようにうめいているナムの声が聞こえたのだ。
「くそう、なんてざまだ！　イノガニックめ！　イノガニックめ！　……。」
壁をげんこつで叩く音が何度も聞こえた。
ラサは、食事をドア口にそっと置くと、外へ出ていった。
ラサの気持ちは、そのとき、はっきりと決まった。

ラサは、夜の砂漠をフローターバイクを走らせた。
目的地は、バオの宇宙船の着陸地だった。
バオとキムは、闇の中から現れたラサに目を丸くした。
ラサは、バオに泣きそうな顔で、でもできるだけ笑顔を作っていった。
「バオ、一生のお願いがあるの……ほんとはこんなお願いしたくないの……でもしなきゃいけないの。」
バオは、ラサの目にいつにない真剣さを見つけた。
「なんでも、相談にのりまっせ……ラサちゃんにそんな顔は似合わない。」

「ほんと!?」

「バオさんは、宇宙一いいかげんだけど、約束は守る人です。」

キムがうけおった。

一週間が経った。

ナムは、オイルフルーツの果樹園の近くの墓地に、ぼんやりとすわっていた。

目の前には、ザックス一(いち)の勇者と呼ばれた戦士、シュルギの墓があった。

シュルギは三千年前、ザックスの戦士を率いて、十万のイノガニックを倒したという伝説があった。彼の持つ剣＝バーエクスカリは、弾をもはじきとばしたという。……いいつたえは、いいつたえ——今の世の中には通じないさ……。

ナムは聖剣(シェード)のことを忘れようと努めていた。だが、忘れようとすればするほど、胸が苦しくなるのだ。

「ナム……。」

後(うし)ろから呼ぶ声に振り返ると、そこにラサがいた。

「傷、もうだいじょうぶ？」

ラサがそしらぬ顔で聞いた。

「おかげさんで……。」
ナムは振り返りもせず、ぶっきらぼうに答えた。
「どうしたの？　シュルギのお墓の前で……。」ラサが聞いた。
「なんとなくね。」ナムが答える。
ラサはチラリとナムを見てつぶやいた。
「ここに戦士はもういない……。」
「ああ……。」
「でも武器だけはあるわ。」
「えっ？」
ラサは無雑作に消音ビームガンと大ぶりのエネルギー剣をナムの足元にほうりだした。
「これは？」
ナムははじめてラサの顔を見た。
「バオの持っていたいちばん強力な武器。イノガニックソルジャーと対等に戦えるそうよ。」
ナムは、二つの武器をじっと見つめた。
ラサは無表情な声で続けた。
「今夜はね、満月の夜よね……星間商人たちが、いろいろな星から集めてきた、オーガニッ

クの古い武器を神殿に収める日なの……。」
ナムは、ラサの顔を見つめ返した。
「ラサ……おまえ……。」
ラサは、ナムとは視線を合わさず、やはり無表情な声で続けた。
「今夜、神殿の入り口は開くわ。」
ナムは消音ビームガンとエネルギー剣を見下(みお)ろした。
「そのとき、もぐりこめば……。」
「そう……私に聖剣(シェード)の輝きを見せてくれるわね……。」
ラサははじめてナムを見返した。
そして、ポツリといった。
「それとも……怖(こわ)い？　……。」

☆

A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

レーリアがアーリアにいった。
「いよいよ、聖剣(シェード)の争奪戦ね。私のイノガニック側は、まだ、ナムが神殿に聖剣(シェード)を盗みに

くることを知らない。」
二人は、ゲームの中で、たがいの側（サイド）が知っている事柄を確認しあっているのだ。
「でも、バオとつながりがあるらしいことはわかっているわけよね。」とアーリア。
「そう、イノガニックソルジャーが、ラサを追いかけたとき、バオの宇宙船につぶされたことは記録されているわ。」と、レーリア。
「でもバオは、イノガニックの下級ソルジャーに鼻薬を効かせてあるから、事故として処理されているはずよ。」と、アーリアが答えた。
「そのとおり、でも、ほかならぬ聖剣（シェード）の近くで起こった不審事故ですもの。赤マル要注意は当然でしょ。」
「了解……けど、人間狩りのイノガニックが、オイルフルーツの精製所を、ナムのいた一週間攻撃しなかったのは、なぜ……？」
「オイルフルーツの果実がとても危険だから……違う？　伝説のドンゲマハルとオイルフルーツの関係……。」
「ええ、ほんとうにわずかな数のイノガニックとオーガニックしか知らない関係ね。」
「そう、普通の使い方をしているうちは、無害だけれど、一度、最終兵器、ドンゲマハルが火を吐けば……。」

「伝説の最終兵器ドンゲマハル……聖剣と対をなすもの……正なる聖剣と、負なるドンゲマハル……か。」

「そのドンゲマハルが火を吐けば、オイルフルーツの実は誘発して、アクアロイド星はおろか、リド星雲すべてを吹き飛ばしてしまう……。アーリア、あなたらしい設定ね。」

「昔のゲームで、ピンボールゲームっていうのがあってね。あんまりプレーヤーが熱くなって、ゲーム台をゆすったり叩いたりすると、電源が切れてゲームオーバーになっちゃうの……そこから考えたのよ。」

「ラサって娘は、そんなことは知らずに、オイルフルーツを育てている……のよね。ゲームを作ったあなたは知っているのに……。」レーリアがいった。

「べつにいいでしょ。ラサは私じゃないんですもの……。」アーリアはすねたようにいった。

「まあね……でも、あれはどうにかならなかったの？」

「なんのこと？」

「ドンゲマハルって名。ちょっとイージーじゃない……ハルマゲドンでいいのにね。」

「大手メーカーのゲームソフトにハルマゲドンってあるのよ……同じ名前っていやでしょ。」

「それにしても……もっとそれらしいのがありそうなのにね……。」

「いいの、私のゲームなんだから……。それより気になるのははね……。」

アーリアがつぶやいた。

「なに?」とレーリア。

「キムの台詞よ。私のゲームのキャラクターを高校生の学芸会以下だって……失礼しちゃうな。」

「仕方ないでしょう、あなた十四歳だもの……。」

「それはそうだけど……ま、いいか……これはお芝居じゃなくてゲームだもんね。」

アーリアは肩をすくめ、

「ゲームを続けましょ。」

ゲームのPLAYⅡが始まった。

GAME THREE PLAY II

神殿の聖剣（シェード）

満月の夜、それは地球でいう満月とはあまりに違っていた。

わずかな星屑（ほしくず）を背に、丸い漆黒（しっこく）の巨大な衛星ディオが広がっている。

リド星系の太陽の光線を吸収するその表面はアクアロイドの夜空をより暗くしていた。

今、夜空のほとんどは、ディオに覆われ、星明かりすらない。

だが、地上では、蛍火のような灯が、列をなして森の窪地（くぼち）に向かっていた。

神殿にオーガニックの武器を収めるためにやってきた、星間商人たちの運搬機（うんぱんき）だった。

小高い丘の上に黒い影がひとつ……手にエネルギー剣、腰に消音ビームガンをぶらさげたナムだ。

ナムは意を決すると、神殿に面した崖を、豹のようなスピードでかけおり、一台の運搬機の荷台に飛びこんだ。
その荷台の中には、リド星系じゅうから集められた古い剣が収められていた。
この運搬機に乗れば少なくとも、神殿の中の剣の倉庫まではいけるはずだ。
剣の束を包んでいるシートが、うまく目隠しの役をしてくれている。
「上手くやって！ ナム！」
丘の上から、ラサが運搬機の列を見おろしていた。
「ま、あとは野となれ山となれ、あとはナムの腕しだいさ。」
ラサの後ろから、バオが谷の下をのぞきこんでそういった。
「だいじょうぶかな、ナム君。」
キムは、まるで祈るような仕草までしている。
「聖剣が神殿の中にあると聞いたときは、驚いたがね。あの坊やが盗りにいくっていうのには、もっと驚いた。」
バオのつぶやきにキムもうなずく。
「ラサちゃんから、神殿って聞いただけで、バオさんなんか聖剣はヤメタって叫んでましたもんね。」

「あんなところからものを盗むんだったら、軍隊に守られた刑務所の、所長のポケットからピストルを盗むほうが楽だぜ。」

バオの言葉を聞いて、ラサの胸にますます不安がふくらむ。

「ね、ほんとうに聖剣(シェード)は、剣の倉庫の近くにあるのかしら。」

「イノガニックは、銃は銃、剣は剣という具合に用途別に神殿の区画を分けている。たとえ聖剣(シェード)だって剣にはかわりねえ。ただし警戒は厳重だろうがな。」

「でも、たとえ星間商人でもオーガニックには、神殿の中はタブーでしょ。どうしてバオにわかるの？」

「二百年前、神殿のお宝を盗もうとしたばかがいてね。裏の世界じゃ、かなり有名なワルだったがね。そのころ、チンピラだったわしは、見張り役をおおせつかってね。そいつから、わしがじかに聞いたネタだ……。」

「それでお宝は盗めたの。そのワルさん。」

「持ってきたのは、もぎとられた自分の片手、片足、置いてきたのが内臓の半分……そいつは、わしに会って一分後に死んだよ。ちょうどこの場所でな、グヒヒヒ……。」

バオは、ふくみ笑いして地面を指さした。

「笑える台詞(せりょ)じゃないでしょうが。」

キムはあきれてそういったが、ラサは、バオに返す言葉もなかった。

ナムを乗せた運搬機（うんぱんき）は、神殿の門の中へ入っていく。門の中の広場で運搬機は止まり、星間商人の運び人たちの手で荷台がはずされる。

荷台を神殿の奥に通じるオートロードに乗せると、運び人たちは我先に運搬機に飛びのり、門から出ていく。

たとえ星間商人だとはいえ、オーガニックの運び人にとって、神殿のイノガニックの恐怖から一刻も早く逃れたいのは仕方のないことだった。

ナムがオートロードの上の荷台から、そっとのぞいたところでは、イノガニックソルジャーの数はまばらだった。

無理もない。たとえ聖剣（シェード）がここにあるにしろ、神殿に忍びこんだものは二百年来、だれもいなかったし、聖剣（シェード）を持つ資格のある勇者を殺すための人間狩りは、今もアクアロイドじゅうで行われている。

辺境の地だけに、イノガニックソルジャーの絶対数も、そう多いわけではない。

ナムは思わず安堵（あんど）のため息をもらした。

〈……いけるかもしれない……。〉

やがてオートロードの動きが止まり、荷台をクレーンが持ち上げた。
ナムは、荷台から頭を出した。
「!!」
前方に巨大な穴があいている。
つぎの瞬間、ナムは、荷台の中身もろとも、穴の中へ投げ出された。
そこは、まるで闇の中のすべり台のようになっていた。
「ウアッ……。」
ナムは悲鳴をむりやりこらえて、荷台の中身の剣とともにすべりおちていった。
気がつくと、いっしょにすべり落ちていく剣の中から何本かが天井に開いた穴に吸いこまれていく。
どうやら、剣の金属の種類や、剣の装飾の宝石別に、剣を選別しているらしい。
そして、屑やガラクタの剣は……。
ナムは、前方に見えるすべり台の出口に目をやり、愕然となった。
赤々と燃えていた。
溶鉱炉だ……そして俺も屑やガラクタの剣といっしょに熔かされる! 俺のエネルギー剣はどうなるんだ? せめて、それにしがみつけば、剣といっしょに上へ吸い出されるかも……。

一瞬期待をもったが、すぐにかぶりを振った。……だめだ、あのケチなバオがくれた剣だ。ガラクタに決まっている……。
がっくりと頭を垂れたとたん、なにかの力で手に持ったエネルギー剣が上に吸い上げられていく。
……しめた！　バオの剣、そんなに悪い剣じゃないんだ。バオ、ごめん……。
ナムは、剣のつかにしがみついた。
ナムの体は、剣ごと天井に吸いこまれ、たて穴の中をどんどん上昇していった。
やがて、上昇しきった剣は、切っ先を下にして降下し、巨大な広間の床に突き刺さっていた。
剣のつかから手を離したナムは、しかしほっとしてはいられなかった。
ナムの剣の近くにいっしょに選ばれた剣が、切っ先を下にして落下してくるのだ。
ナムは、時にジャンプし、時に右に左にころがりまわって、必死になって、剣の雨をよけ続けた。
そして、三分が過ぎて、やっと剣の雨は止んだ。
胸をなでおろしたナムは、自分の剣を抜いた。そしてふと、つかの後ろを見た。
そこに文字が彫られてあった。

『わが最愛のラサちゃんへ……中年ナイト・バオ』
ナムは思わず微笑した。
……そうか、この剣は、ラサへあげるつもりだったのか――なら、高級品なわけだよな。
あのイヤラシオジサン……。

「グシュン。」
丘の上で、バオがくしゃみをした。
「ちっと寒くなったみたい。」
「寒がってる場合じゃないわ。」
キッとラサににらまれて、バオはもっと寒くなった気がした。
「オ〜寒ッ!」

☆　A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

アーリアは、荒い息を吐きながら、キーボードから指を離した。
「さすがね、アーリア、三分間で千本の剣、よくかわしたわ。」

レーリアがいった。
「ええ、こういう基本的なゲームは反射神経だけが勝負ですもの。慣れれば誰でもクリアーできるわ……でも……。」
アーリアの声は沈んでいた。
「でも？」
レーリアが聞いた。
アーリアは、その問いには答えず自分の指先を見た。
あきらかにふるえがきている。
一年前までは、こんなことはなかった。
反射神経と体力が必要とされるこの種のゲームは、一日じゅうやったって疲れることなんかなかったのだ。
あきらかにアーリアの体は弱ってきている。
しかも、日一日とその速度は増している。
〈……わたしの体は、そうとう悪いんだわ……。〉
「でも……どうしたの？」
レーリアが聞きかえした。

「えっ？」

アーリアは、あわててかぶりを振った。

「ううん、なんでもない。さ、先を続けましょう。」

アーリアは、レーリアの顔(ビジョン)に笑いかけた。

だが、アーリアの見つめたレーリアの顔(ビジョン)の文字は、一瞬、ぼやけて見えた。

アーリアは、目をしばたたかせた。

〈……目まで悪くなってきたのだろうか……。〉

アーリアは唇をかみしめた。

〈……急がなければ……体がだめになる前に、このゲームだけは勝ちたいんだ……。〉

十四歳のアーリアは、あせりだしていた。

「レーリア、ゲームを続けて……。」

アーリアは、キーボードにしがみついた。

＊　＊　＊

神殿の大広間の中は、床の上につきさした剣が林立している。

どの剣も、それぞれ、つかや剣の峰(みね)に意匠がこらされ、どれ一つとして同じものがなかった。剣には素人のナムも、これらの剣が由緒のある逸品であることが感じとれた。

もしかしたら、昔、イノガニックと勇敢に闘った勇者たちの形見(かたみ)かもしれない。
そして俺の剣も選ばれて、ここに運ばれてきた。
〈……ってことは、俺は勇者、ナム様だ……。〉
思考(アイディア)が短絡(ショート)しやすいタイプのナムは、なんとなくいい気持ちになって剣をかまえた。
「イノガニックの神殿も、こよいかぎりだ。俺には、しょうげえ、てめえという、つえ～え味方があったんだ。」
そこまでいって、我(われ)にかえったナムは、
〈……オットット、俺の生涯(しょうがい)、味方になるのは、聖剣(シェード)のはずだった……聖剣(シェード)はどこだ？〉
ナムは、あたりを見まわした。
剣の数は無数だった。そして、どれもこれもみごとな剣だ。いったいどれが聖剣(シェード)なんだ……。
ナムは、そのとき、いちばん肝心なことを知らない自分に気がついた。
聖剣(シェード)、聖剣(シェード)とわめいていたけれど、その目印になる特徴を知らないでいたのだ。空を飛ぶ聖剣(シェード)の姿はたしかに見たけれども、その姿の特徴がわかるほど、近くで見たわけではない。
〈バカ、ドジ、マヌケ、オッチョコチョイ、……バオに聞けばよかったなあ……あのオッ

サンなら知っていたかもしれないのに……。〉
聖剣(シェード)を手に入れるのは自分だ、と思いこんでいただけに、聖剣(シェード)のことをくわしく人に聞くなど、思いつきもしなかったのだ。
聖剣(シェード)が空を飛べるからって、いつも飛んでるわけないだろうし……オーイ、聖剣(シェード)チャン、飛んできてくれッ……と叫んだって、〝オイヨ! 見せちゃる〟と飛んでくれるほど、乗りやすいタイプでもないだろうし……でも試しに……。
「聖剣(シェード)、飛べ!」
ナムは叫んだ。
飛んでくれるはずもなかった。
「やっぱ、ダメか……。」
ナムはとほうにくれた。
〈……こんなにたくさんある剣の中からどうやって見つけだせばいいんだ……。〉
でも、やらねばならない。
ナムはその方法を考え続けた。
そのころ、丘の上ではバオがラサに話していた。
「聖剣(シェード)はな、剣自身にすげえ力を秘めているんだ。だから、飾りなんぞつけて目だつ必要

なんかないんだそうな……。いちばんありふれたどこにでもある地味で飾り一つない型をしているそうだ。いってみれば、刃物が名物のドイツ星ゾリンゲン地区の、もっとも一般的で実用的なペーパーナイフを大きくしたようなもんだそうだ。
「フーン、能ある剣は飾りをかくすってわけ……かっこいいな……なんかナムには似合わないみたい。」
ラサは、どっちかというとかっこぶりっこのナムが、聖剣(シェード)を持った姿を想像した。
そして、かぶりを振った、やっぱ、似合わない——。

〈……きっと、ここの剣の中でいちばん派手でかっこいいやつに違いない……。〉
ナムはそう思った。
〈……でも、どれもこれもそれなりにかっこいいしな……。〉
そのときだった。
大広間のブザーが鳴り、イノガニックの放送が、「警備兵(イノガニックガード)五十名……巡視の時間まであと五分です。」
「ありがとう。ごていねいに……。」
ナムは、思わずそう答えてから、あわてた。

〈……あと五分……どうしたらいいんだ!……敵は五十人……こっちの武器は、剣が一本と消音ビームガン……おっとっとと、剣だけは、床に無数にささっている……でも、剣は、飛び道具には勝てないもんな。……ビームガンがあたれば、折れちまう……そう折れちまう……あれ……? あっ、そうか……。〉

ナムはあることに気づいたのだ。

〈……剣はビームガンには弱い。だが、まさか……、聖剣(シェード)まで、ビームガンで折れはしまい。……なんてったって、天下の聖剣(シェード)だもんな。〉

ナムは、いきなり腰のビームガンを抜くと、床にささっている剣をつぎつぎ撃(う)ちだした。

五分間で、何本撃てるかわからない。

とうてい全部は撃ちきれはしまい。

五分間で撃ちくだいた中に、聖剣(シェード)がなければ、おしまいだ。

こうなったら一発も失敗している余裕はない。

大広間のどの剣から撃ち抜いていくかも問題だ。

一分が経った。

百本は撃っただろう。

だが、ビームに耐えた剣はなかった。

二分が経った。
百九十五本め……聖剣(シェード)はない。
一分平均百本とすると、五本少なかった。
疲れてきたのか……？
三分。
しまった。撃(う)ちそんじが一本。こんなはずではないのに……しかも今二百八十三本、明らかにペースダウンだ。
だが、ビームが二百八十四本めに当たったとき、ナムの顔が輝いた。
折れなかった。
ビームより強い剣があった。
ナムは剣にかけようと思った。
だが……。
……待て！　ナム！
……ナムは、かけよりたい衝動を押さえた。
聖剣(シェード)の他にも、ビームで折れない名剣があるかもしれない。
現に、ザックスの戦士、シュルギの剣は弾丸にも負けなかったというじゃないか。

今は先を続けるときだ。
ナムはビームガンを撃ち続けた。
四分が経った。
当たった剣は三百六十五本め、……撃ちそんじが四本でた。
そして、またまたペースダウン。
撃っても折れない剣が新たに三本現れた。
ナムの思ったとおりだった。
折れない剣は聖剣(シェード)だけではなかったのだ。
〈……それにしても、なんてことだ。撃ちそんじと、このペースダウンは……俺ともあろうものが〉……そこまでつぶやいて、ナムは〈アレ?〉と思った。
〈……なぜ、俺はそんなナマイキなことを考えたんだろう。だって、俺、今までビームガンなんて撃ったこと一度もないじゃないか……。〉
だが、ナムはかぶりを振った。
〈……これでいいのだ。だって、俺、きっと天才なんだもん。ウン……。〉
ここまで、うぬぼれが強いと、ほとんどノー天気障害である。
ナムはビームガンを撃ち続けた。

巡視の警備兵（イノガニックガード）が来る時間まであと五秒を残すだけになった。

撃（う）ちそんじは十本を越え、当たった剣は四百三十二本。当たって折れない剣は、さらに二本、計六本になった。

あと四秒、三秒、二秒……。

ナムは射撃をやめ、折れない剣の一本へ走った。

……頼む！　聖剣（シェード）であってくれッ！

二秒、一秒、〇。

大広間の扉が開いた。

警備兵（イノガニックガード）たちは、撃ちこわされた剣の残骸に、一瞬とまどったが、すぐにナムを見つけて襲いかかってきた。

警備兵（イノガニックガード）の剣がナムの頭上に迫る。

ナムは折れない剣を抜こうとする。

抜けない。

力をふりしぼる。

抜けない、仕方ない。こうなったら……。

ナムはビームガンで警備兵（イノガニックガード）の一ツ目を撃った。

パシン！
警備兵（イノガニックガード）の一ツ目が割れ、後（うし）ろにもんどりうって倒れた。
〈――銃を持っている！　それも最新型の――。〉
仰天した警備兵（イノガニックガード）はあとずさった。
〈……レレレ……。〉
仰天したのはナムも同じだ。
〈……ビームガンの一発で倒れちゃった……これなら、なにも剣なんかいらないや……。〉
ナムはにやりと笑った。
〈一ツ目を狙えばいいなら、射的と同じ、さっきの射撃で自信、もっちゃったもんね。〉
警備兵（イノガニックガード）の隊長風が叫んだ。
「全員、モノアイ（一ツ目）イサングラスをつけろ！」
警備兵（イノガニックガード）たちは、胸のケースから、フィルターのようなものを一ツ目につけた。
そして、それぞれの顔を見ながら、
「似合うぜ……イレパンかい。」
「ポピュラーすぎるが、軽さがとりえさ。お前もナウイぜ……。キニ・ラウダだろ……？」
「俺、ピエール・ルカダン……お前は？」

「国産愛用……レンズは、コニンにかぎる。」
それぞれのサングラスにも、デザインの違いがあるらしい。
「グラサン自慢はそこまで！　オーガニックのガキを始末しろ！」
隊長風が命令を下した。
「始末されてたまるか！」
ナムは、ビームガンを撃った。
だが、サングラスをつけた一ツ目には効きめがなかった。
「こんなのありィ？」
「ビームは、しょせん山の手中央線の光線だ。サングラスはキザでつけるんじゃねえ。お目々を光から守るためにあるんだぜ、坊や。」
隊長風は能書きをいった。
「チッ！　クソッ！」
「きたない言葉は禁止用語にしようぜ、坊や。」
「じゃ、お食事！」
ナムは、そう叫んで隊長風の腕を撃った。
隊長風の腕がはじけとんだ。

だが、隊長風は、ビクともせずにいった。
「なんだい？　そのお食事！　ってやつは。」
「クソッ！　になる前だい。」
「納得。」と隊長風。
「俺、納得しない。」とナム。
「納豆なら食う？」と隊長風。
「納豆も納得できない。どーして、腕がとれても平気なの？」
「我々（われわれ）、イノガニック、痛さなんか感じない。急所を狙わないと死なないのよね。」
「急所どこ？　一つは目だってわかったけど。」
「どこと聞かれて、答えるバカに、聞くバカ。時間のむだだ、やっちまえ！」
警備兵（イノガニックガード）たちは、ジリジリとナムに迫ってくる。
「こうなりゃ、聖剣（シェード）しかない！」
ナムは、必死で折れない剣を抜こうとした。
ドカーン！　警備兵（イノガニックガード）の一人が腕のバズーカ砲を撃（う）った。
一瞬、飛びすさるナム。

爆発の後の剣は、粉々だった。

〈……聖剣（シェード）じゃなかった……ビームガンよりバズーカのほうが強力だもんな……ビームがだめならバズーカあるさ、か……。〉とナムはあたりまえのことを思った。

〈……すると聖剣（シェード）は残りの五本の内の一本……。いや、さっき撃ち残した剣の中にあるのかも……撃ち残したといっても、さっき撃ったのは、たった四百三十二本、この大広間には万を越す剣があるのだ。……五本の内に聖剣（シェード）のある確率のほうがずっと低い……ほとんど絶望だ……。〉

そのとき、警備兵（イノガニックガード）の隊長風が、バズーカを撃った警備兵（イノガニックガード）をしかる声がした。

「ばか、ばか、神殿の大事なコレクションを粉々にしおってからに！　お前、六か月間四十パーセント減俸確実ね。」

その言葉に、バズーカを撃った本人はもちろん、他の警備兵（イノガニックガード）も動揺した。

警備兵（イノガニックガード）の間にささやきが広がる。

「やたらに銃やバズーカは撃てないぞ。」

「へたにこの広間の剣をこわしたら、えらいこっちゃ。」

「♫働けど働けど、我が暮らし、楽にならざりき、じっと手を見る。」

この啄木（たくぼく）の歌は、どうやらイノガニックの流行歌らしい。

「昔のただの流行歌だ。恐れるな!」
隊長風が叫ぶ。
「恐れますよ、それが現実ですもん。」
警備兵(イノガニックガード)の一人がぼやいた。
ナムは、パチンと指をはじいた。いい考えが浮かんだのだ。
〈……そうか、この広間にある剣は貴重品……あいつら、こわしちゃいけないんだ……それなら手があるぞ……。〉
ナムは、二本めの折れない剣に走った。
それも抜けなかった。
ナムは、三本めに向かった。
抜けない。これも聖剣(シェード)じゃない。
ナムは、そう思いこむことにしたのだ。
なぜなら……聖剣(シェード)を手にしたものは、イノガニックに勝てる勇者になる。それが俺だとしたら、俺が持てない剣など聖剣(シェード)ではない……。
まことにかってな解釈だが、ナムが持てない聖剣(シェード)なら、それが本物の聖剣(シェード)でも、ナムにとってはなんの役にも立たないことは事実だった。

四本め……。
〈抜けた！　抜けたぞ！
これが聖剣(シェード)だ！　でもついでに五本めも……。
え～ッ、こんなのありィ？　これも抜けてしもた。〉
ナムは二本の剣をかかえてとまどった。
〈どっちが聖剣(シェード)だ？〉
おまけにナムは、バオからもらった自分の剣も持っている。あたりまえだが手は二本しかない。
バオの剣は、エネルギー剣でビームガン並の光線を発射できる最新式だ。古い、こっとう品の剣よりは性能がいいに決まっている。それにラサの気持ちがこもっているだけに捨てたくない。
〈……こういうことを考える俺って、いい男だねぇ……おっとっとっとっと。〉
警備兵(イノガニツクガード)たちが迫ってくる。
ナムは、抜き取った二本を見くらべた。
〈片方は、味もそっけもない、ただの剣……。もう片方は、つかに宝石のちりばめられた、まばゆいほどの剣……。〉

警備兵（イノガニックガード）たちは、すぐそこまで迫っている。
決断だ！
ナムは、華麗な剣を聖剣（シェード）と思うことにした。
性格上、ぜったいそう思うことにした。
この剣こそ俺に似合う。
ナムは、もう一本の剣を、警備兵（イノガニックガード）の一人に投げつけた。その警備兵（イノガニックガード）は、思わず腕で剣をはらった。
剣ははじかれて、床にころがった。
〈……やっぱり、あれは、聖剣（シェード）じゃない……。〉
ナムは安心して、撃（う）ち残しの剣が無数に立っている中へ飛びこんだ。そして身を伏せた。
床に落ちた剣を見て安心したのは、警備兵（イノガニックガード）も同じだった。
隊長風が、一応、床にころがった剣を見たが、傷もなく、たいして貴重でもなさそうなただの剣だ。
「よーし、これならたぶん滅俸なーし！　坊やをさがせ！」
警備兵（イノガニックガード）たちは、腰の高さほどの剣の林の中に入っていった。
つき立っている剣と剣との間は一メートルもない。

剣の高さはまばらだが、それでも平均一・五メートルはある。
身をかがめながらチョコマカと走りまわるナムを見つけるのは難(むずか)しかった。
よほど目の前に来なければ、わからないのだ。
しかも、警備兵(イノガニック)たちには、つきたっている剣をこわせないというハンディもある。
銃やバズーカを下手に撃って、剣がこわれ、減俸になったらえらいことである。
一方、ナムはそんなことはおかまいなしだ。
あまり剣をこわしすぎて、自分の姿が、警備兵(イノガニックガード)たちに、見え見えになるのさえ、気をつければいい。
ただし、警備兵(イノガニックガード)たちの数は四十九体……しかも、ナムは生身の人間だが、警備兵(イノガニックガード)は、急所をねらうか、バラバラにしないかぎり、倒れることのないメカニックの体なのだ。
どっちのハンディが多いか――それを決めるのはナムの腕しだいの四十九対一のデスマッチが始まった。
ナムは、身を伏せながら、エネルギー剣と、先刻抜き取った剣が聖剣(シエード)であることを願いつつ、両手に持った
〈……願わくば二刀流開眼……宮本武蔵じゃ……。〉
目の前の右と左に二体の警備兵(イノガニックガード)が来た。

すかさずナムは、ジャンプした。
ナムは、右手の警備兵（イノガニックガード）の一ツ目にエネルギー剣を叩（たた）きこんだ。
いくらサングラスをつけていても、物理的な剣の一撃にはかなうはずがない。
急所をやられて、右手の警備兵（イノガニックガード）が倒れるその間髪を入れず、左手の警備兵（イノガニックガード）の胴を、抜きとったあの剣ではらった。
その瞬間、ナムの胸に驚きにも似た確信が走った。
〈……これは聖剣（シェード）だ！　俺は聖剣（シェード）を手に入れたんだ！〉
なぜなら、左手の警備兵（イノガニックガード）の胴は、剣によって、まっ二つに分かれたのだ。
上半身と、下半身が生き分かれでは、さすがのメカニックボディーも役にたたない。
〈……信じられない剣の切れ味……これぞ、聖剣（シェード）だ。〉……ナムは、自信をもった。
そして身を伏せながら剣の林をかけずりまわった。
ナムのようなお調子者に、自信をつけさせたら、火事場のばか力どころの騒ぎではない。
矢でも鉄砲でも原爆でも水爆でも波動砲でも(古いか……)、伝説の最終兵器ドンゲマハルでも、本家ハルマゲドンでも持ってこいっ！　という勢いだった。
二時間後——。
表情はないが、もしあったとしたら、信じられないという顔をしているだろう、隊長風

の警備兵（イノガニックガード）の首がはねとんだ。それで終わりだった。
四十九体の警備兵（イノガニックガード）と最初に倒した警備兵（イノガニックガード）の、計五十体は全滅した。
「俺（おれ）はやったぞ。俺は聖剣（シェード）の勇者、ナム様だ！」
ナムは飛びあがりながら、警備兵（イノガニックガード）たちの入ってきた通路へかけていった。
もう恐ろしいものはなにもなかった。
ナムは通路を走る……。プツン!!

☆A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

通路を走るナムの姿が消え、途中中断の文字がレーリアの顔に映（ビジョン）った。
アーリアが驚いてレーリアに聞いた。
「途中中断ってなんの冗談？」
「中段と冗談(上段)をひっかけた冗談？」
やさしく語りかけるレーリアに、アーリアはきつくいった。
「本気よ。私は！　まだ今日のゲームは終わっていないわ。」
「ええ、でも、私はやめるべきと判断したの。

ナムは剣の射撃で何回もしくじったわ。それにトータルの成績の悪さ。アーリアの今年の記録としては最低だわ。
そして、剣の林の戦い。四十九人を二時間もかかっている。いつものアーリアなら、一時間以内でクリアーできているわ。」
「でも、勝ったわ。記録はともかく。」
「私が心配しているのは勝負でも記録でもないわ。あなたの体なの……休むか、病院に行ったほうがいいわ。」
「病院にはいくわ。でも、まだその時間じゃないもの。やれるところまでやっておきたいの。」
「気がすすまないわ。」
レーリアの言葉にアーリアは叫んだ。
「やるのよ、レーリア！　これは私の作ったゲームなのよ。！　誰にも指図されないわ……もともとあなただって、私がいなかったらただの子供向けコンピューターでしょ。誰がここまでりっぱなコンピューターにしてあげたと思っているの!?」
アーリアの言葉に、レーリアはしばらく黙っていた。
それから、……さびしそうな口調でいった。
「……わかりました、ご主人様……。」

アーリアは、ハッと顔を上げた。
「おおせのとおりにいたします。」
レーリアの言葉にアーリアはかぶりを振った。
その顔にさっきの興奮はなかった。
「……ごめん、レーリア！　あんなことという気はなかったの……ただ、ゲームを続けたかっただけなの……あなたは、私のたった一人の友だちだわ。今も、これからも……。」
「体をたいせつにしてほしいのです。アーリア……お願いだから……。」
「だいじょうぶよ。さっきの記録が悪かったのは、後半のためにセーブしていたの。だって、たいへんなのはこれからだもん。」
「ほんとうですね。」
「もち！」
レーリアはもう一度、念をおした。
「ほんとうですね。」
「レーリア、ゲームを続けて。」
アーリアの口調は静かだったが、有無をいわせぬ強さがあった。
レーリアの顔（ビジョン）に、中断解除の文字が浮かんだ。

顔(ビジョン)に、神殿の通路を走るナムの姿が映った。

＊　　＊　　＊

ナムは走った。
走った。
出口を求めて猛然と走った。
ナムは前方の床を見て、アッと声をあげた。
床の底からのこぎりのようなものがつき出してきたのだ。
今なら、のこぎりの上を飛べる。
ナムは思いきりジャンプした。
「やった！」
とんぼをきって着地したナムは、パチンと指を鳴らした。
だが、安心はしていられなかった。
さらに前方の、今度は壁から、ヤリが飛びだしている。
ナムは全力で走ると、ヤリの下をスライディングしてくぐりぬける。
〈……ちぇっ、この様子じゃ、この通路、先にどんな仕掛けがあるかわかったもんじゃないな……引きかえすか……。〉

しかし、後ろをふりかえったナムは仰天した。

いつのまにか、背後に通路はなく、剣山のような壁が、猛烈なスピードで、ナムを追ってくるのだ。

「前進あるのみ！　ってわけ！」

ナムは肩をすくめてから、ふたたび全力で走りはじめた。

床から、のこぎりがとびだす！

ジャンプ！

壁からヤリ！

スライディング！

さらに天井からハンマーのような金属が、ナムを押しつぶそうと降ってくる。

横っとびでナムはかわす。

後ろから追ってくる剣山の壁は、ますますスピードがあがってくる。

ナムは走り続けた。

そして、前方に現れる障害物をつぎつぎにかわしていった。

まるで、ハードルとはしごくぐりとモグラ叩きをいっしょにしたレースをやっているようなものだった。

汗みどろで走るナムは、一瞬思った。

〈……なんでこんなことさせられなけりゃなんないんだよ……もうたくさんだ！〉

そのときだった。

前方に明かりがみえた。

〈……出口だ！〉

ナムは、明かりにまっしぐらに走った。

あと百メートル。壁にそう表示されたランプが点灯した。

〈……ごていねいにアリガトさん！

チェッ！　ばかにしやがって！〉

あと五十メートル。

カール・ルイスもまっ青の走りだ。

あと十メートル。あれ？　……今まで続々と現れていた障害が今のところなくなってい

る。

へんだぞ……こういうときって、ラストでドカンと……。

あと五メートル……。いきなり足の下の床がなくなった。案の定、落とし穴だ。

ナムは心の準備をしていてよかった。

ナムは、ラサからもらったエネルギー剣を落とし穴の壁につきたて、そのつかに、もう一本の聖剣(シェード)のつかをひっかけると、落とし穴の壁を思いきりけった。
ナムの体は、てこの力の応用で、落とし穴の上に出た。
剣山(けんざん)の壁は目の前まで迫っている。
ナムは、聖剣(シェード)の先を引っぱった。エネルギー剣のつかにからまっていた聖剣(シェード)のつかは、エネルギー剣のエネルギーボタンを押した。
落とし穴の壁につきさした剣から、エネルギーがほとばしり、壁をくずし、剣の先が壁からはずれた。エネルギー剣は、聖剣(シェード)とともに、ナムに引っぱりあげられ、ナムの手に収まった。
ナムは、間髪をいれず、出口に飛びだした。
ナムが落とし穴に落ちそうになってから、ここまで一秒もかかっていなかった。
後ろ(うし)で剣山の壁が止まった。
「助かった！　やったぜ！」
だが、まだ終わりではなかった。
ナムのやってきた出口は、ガランとした広間だった。
そこにはなにもなく、ただ三つの扉だけがあった。

まるで、どれか一つを選べといわんばかりだ。
ナムは用心深く一つの扉に近づいた。
〈……こうなったら、なにが出てこようとかまうもんか……驚くもんか……。〉
ナムは、なかばヤケクソで、扉を開けた。
そこもやはり広間だった。
そして、さっきの思いがまるで嘘のように呆然となった。
そこにはイノガニック戦士たちがたむろしていたのだ。
それも、ざっと見て千体はいるだろう。
〈……ヤバーッ……。〉
ナムは二本の剣を持って身がまえた。
〈だが……。〉
「なにやってんの、君？」
イノガニック戦士の一人が、ナムにいった。
「はあ？　なにって、身がまえてんですよ。さ、こうなったらしゃあない。どこからでもかかってこい！」
イノガニック戦士は、肩をすくめ、指を一ッ目の前で交差させていった。

「チッチチッチ……坊や、ここがなんの広間か知っているのかい？」
「あん？」
「ここね。俺たちのレストルームなの。ご休憩所で剣をふりまわしちゃいかんがな。」
「はあ……そうですか？」
ナムは、広間を見まわした。
なるほど、オイルの入ったグラスを飲んでいるのや、火炎放射機の煙草を喫っているのや、TVゲームを楽しんでいるのや、金属をこすったりひっかいたりするときに出る金属音をベースにして演奏されている、イノガニックディスコ音楽にあわせて踊っているのやら、明らかにギンギンのリラックスムードだった。
「わかった？ 俺たちは勤務外はぜったい仕事しないんだよ、ほら。」
イノガニック戦士は、腕につけたマークを見せた。
「なんですか？」
ナムが聞くと……。
「チッチチッ、君は常識がないね。これこそ、イノガニック戦士労働組合、略して、イノ戦労組のマークでんがな。」
「はあ、それでストライキなんかしたりして……。」

「悲しいことに公務員の戦士（ソルジャー）にはスト権がないんよ。だから、こうやって順法闘争（じゅんぽうとうそう）……。」
「なるほど、イノガニックも楽じゃないんですね。」
「まあな……宮づかえはつらいよ。俺たちの勤務時間まであと一時間……それまで、君とはかかわりたくないんでね。早く出ていってくれ。」
イノガニック戦士（ソルジャー）は、ナムを追いはらうように手をヒラヒラさせた。
「そりゃ、どうもおじゃましました。」
ナムは、扉の外に出た。
「ほんと、スイマセン。」
あいそ笑いをして後ろ（うし）手に扉を閉じたナムはポッと吐息をもらした。
〈……いや～、ヤバかったよね。でも、一時間したら、あいつら襲ってくるわけか……そんでもって、今、勤務中のやつも、あいつらと同じ数いるはずだよね。これは、見つかったらエライことですよ……。〉
ナムは、残る二つの扉を恐る恐る見つめた。
どっちかの扉には、勤務中のイノガニックたちがいるかもしれないのだ。
なむさん!!
ナムは、思い切って片方の扉を開けた。

「キャーッ!?」

女の悲鳴がした。

「えっ？　なに？」

イノガニックが、オイルの風呂に入って叫んでいる。

ボディーをまっ赤にしてわめいている。

「エッチ、チカン、ノゾキ、出ていって！」

「え、あの、そのスイマセン。」

ナムに手おけやブラシや修理道具が投げつけられる。

「でてけ～ッ！　見ないで！」

ナムは、あわてて扉の外に出て扉を閉めた。

「イノガニックの女風呂かぁ……。」

ナムの頬が赤くなった。

もう一度のぞきたくなった。

そして、コツンと頭を叩いた。

〈……ばかだね、イノガニックって人間じゃないんだぜ。いくら女の子だといっても機械じゃね……まるで違う形しているもんね。でも……でも……。〉

ナムは、女風呂という言葉だけで、心ときめかす年ごろなのだ。

〈……おっとっと。こんなことを考えてられる時間なかったんだ。〉

ナムは残りの扉の一つを開けた。

と、そこは暗闇で……。

やはりさっきの広間と同じような扉が二つ並んでいた。

中央に光る円が書かれてある。

どこからともなく声が聞こえてきた。

やさしい女の声だ。

「前の広間の三つの扉は、練習問題でした。本番はこれからです。あなたの前にある二つのどちらかは通路です。しかし、どちらかには、たいへんな危険が待っています。さ、あなたの前の丸い円の中に立ってください。そして、どちらかの扉を選んでください。」

〈……イノガニックのやつら、俺をおちょくっとんのか？　……まるで、もてあそばれているみたいじゃん……。〉

ナムはおもしろくなかった。しかし、おもしろくなくても声にしたがうよりほかに、方法も見あたらない。

ナムは、中央の円の中に立った。

「さ、どっちを選びます？」
声が聞いた。
「左を！」
「左でいいのですね。」
声が確認した。
「俺は男だ。一度決めたこと、変えたりしないよ。」
「では左！」
左の扉が開いた。
とたんに非常ベルのような音が鳴り響いた。
「残念でした。あなたは危険を選びました。あなたのまわりをごらんなさい。」
ナムが、円の中からあたりを見ると、いつのまにか、ナムを取りかこむように扉がいくつも立っていた。
ナムは、とっさに扉の数をかぞえた。
……二十の扉か……。
「あなたのまわりの扉には……。」
声が説明した。

「二十頭のイノガニック虎(タイガー)が入っています。どの扉が、いつ開くかはわかりません。あなたは、その円の中で、手持ちの武器だけで闘わなければなりません。二十頭を倒せば、この部屋から出られるでしょう。」
「能書き、アリガトサン。ごていねいに。」
ナムは、剣を持って身がまえた。
部屋の中も、ナムのまわりの扉も静まりかえっている。
〈……どこから来る気だ! 早く出てこい……。〉
バタン! 目の前の扉が開いた。
扉の向こうは、霧がたちこめて見えない。
ナムは目をこらした。
遠くから、うなり声が聞こえてくる。
霧の向こうに、二つの赤い目が見える。
ぐんぐんこちらに近づいてくる。
ガチャン、ガチャン、床をける金属音が響く。
どうやら、それは四本足で走ってくる。
ガチガチと牙(きば)の交錯する音が聞こえる。

ナムに向かってまっしぐらに走ってくるそれは、たしかに虎だった。それも金属でできた虎――。
シャキーン！
四本の足からつめがとびだした。
そして、ナムの頭めがけ、今、ジャンプした！
「聖剣(シェード)、頼む！」
ナムは、聖剣(シェード)をイノガニック虎の顔面に叩(たた)きつけた。
シャーッ！
まるで布をはさみで一気に切り裂くような音がした。
「一頭あがり！」
虎は、ナムの頭上で、鼻先から尾の先まで、一刀両断にされて、まっ二つになって床に落ちた。
「さすが、聖剣(シェード)、切れ味抜群！　それに今日の俺は二枚刃だぞ。」
ナムはラサの剣を持った。
そのときだ！
いきなり背後の扉が開き、虎のつめが、聖剣(シェード)をひっかいた。

ナムは、あやうく聖剣(シェード)をとり落とすところだった。
「おっとっとと……。」
ナムは、ラサのエネルギー剣で、虎の頭を狙い撃(う)った。
後(うし)ろの扉の虎は、それで動かなくなった。
〈……油断禁物、火がぼうぼう。あと十八頭か。〉
バタン、バタン!!
左右の扉が開いた。
〈……二頭か！　こっちは二刀流開眼じゃい！〉
ナムは、身を伏せると、二頭の虎の腹の下にもぐるようなかっこうで、両手に持った剣を、二頭の胴体に叩きこんだ。
そして、三十分もしないうちに、残る扉は一つだけになった。
だが、ナムの体はもうへとへとだった。
扉が一つだと思ったとたん、どっと疲れが出てきたのだ。
〈……もうたくさんだよ。だけど、どうしてこんなにくたびれるんだろう。勝ちっぱなしだっていうのに……昔、アクアロイドの荒れ野をかけずりまわっていたころは、二、三日眠らなくても、こんなに疲れやしなかったぜ……年とったのかな？　……よせよ、俺、ま

だ花の十五歳だよ……。〉

ギイーッ！

最後の扉が開いた。

〈……おいでなすった。よし、最後は聖剣でケリをつけてやる……。〉

霧の向こうにイノガニック虎の姿が見えた。

のそりのそりと、ナムに向かって歩いてくる。

その大きさは、今までの虎の三倍はある。

〈……真打ち登場ね……。〉

ナムは、もうたいして驚きはしなかった。

〈……なにが来ようと、俺には聖剣があるんだもん……。〉

虎は、牙をむきだしにした。

そして、二本足で立ちあがると、ナムの体を押し倒すようにとびかかってきた。

ナムは、虎の牙に、聖剣を叩きつけた。聖剣は虎の牙を折り、アゴを引き裂いた。

虎は、頭部を半分けずりとられて動かなくなった。

だが、しかし、ナム自身もヘナヘナとその場にしゃがみこんでしまったのだ。

ナムの体のどこにも傷はなかった。

だが、ナムにとって信じられないことが起こったのだ。
手に持った聖剣はつかの部分しか残っていなかったのだ。
「こ、こんなことって……！」
剣身は、二つに折れて、虎の頭部につきささっていた。
「聖剣が折れた！　聖剣が折れちまった！」
聖剣は折れるはずがない。それが折れたということは……ナムが持っていたのは、聖剣ではないということになる。
〈……じゃ、なんなんだい。あんなに切れ味がよかったじゃないか……。〉
ナムは、ふっと、手に持ったつかを見た。
そこには文字が書かれてあった。
——ザックスの勇者、シュルギの名剣、バーエクスカリ——。
ナムはうなずいた。
……そうか、これ、伝説の勇者、シュルギの剣なのか、どうりで切れるはずだ……それで折れちまったのは……そうか……俺の切り方が悪かったんだ……俺、えらいものこわしちゃったな……。
ナムは、尊敬する勇者の宝物をこわしてしまったことに悄然としていた。

そして、それよりなにより今まで手にしていたのが聖剣ではなかったことを知り、落ちこんでいた。

「うち帰って寝よ。」

ナムは、ラサのエネルギー剣を手に、ノロノロと、部屋の出口の扉へ向かった。

そして、扉を開けたナムは、呆然とした表情で、さらにガックリと肩を落とした。

なぜなら、そこは、無数の剣の林のある、あの元の大広間だったのだ。

今までの苦労は、まったく徒労だったのだ。

〈……元にもどっちまった。また、やりなおせっていうの？　もう俺、いやだ！　……だいいちもう俺、くたびれちまったよ……。〉

それにもう、イノガニックに勝てる気もしなかった。

勤務時間外のレストルームを出てから、そろそろ一時間経っていそうだし、勤務時間になった、あの連中と戦うのはぞっとしなかった。

〈……だって、千人以上いたもんな。……逃げられそうもないし、ここで自殺でもすっか……。〉

そう思って、ナムはかぶりを振った。

〈……ばか！　なに暗くなっているんだ。ナムらしくないぞ。あきらめるな。もういちどやりなおすんだ。聖剣はこの中にたしかにあるんだからな……。〉

気をとりなおしたナムは、ビーム銃を取り出し、剣の林を撃とうとした。
しかし、イノガニックは二度めをやらしてくれるほど、甘くはなかった。
ドドドド……突然、地鳴りがした。
ナムの足元がくずれ、今まで見たこともない金属性の巨大なものが、出現したのだ。
「なんだ、こりゃ？」
それは、今までのイノガニックたちのどれよりも不かっこうだった。
緑色のおむすびといった感じで、それに小さなのりまきで手足をつけたような、まるで幼児用の弁当の中身のような姿だった。
ただ、その身長は三十メートルは越え、胴まわりは百メートルはゆうに越えていた。
まさに幼児向け巨大ロボットという感じだった。
そいつは、ブルンブルンと体をふるわせ、体についた床の破片をはらうと叫んだ。
「イノガニック宝庫の守りパートII、ザ・リトルタガー（小鬼）参上……。」
ナムは、リトルタガーを見上げて思った。
……パートIIっていうと、パートIIIやIVがあるのかな……。やれやれ……。
リトルタガーは、巨体の上にちょこんとのっかった、みの笠のような頭についた一ツ目で、じろりとナムを見つめた。

「盗っ人は許さん！ トマト!!」
そう叫ぶと目から光線をほとばしらせた。
「えっ!?」
ナムは、あわててとびすさった。
今までナムのいた場所が爆発し、ふき飛んだ。
ナムが叫んだ。
「今、なんていったんだ!?」
「トマトー!!」
リトルタガーは叫んだ。
「なに、それ、どーいう意味？」
ナムの問いに、リトルタガーは、首をひねって考えていたが、肩をすくめ、
「なんや知らんが……。」
リトルタガーは、腕をグイッとナムに向けた。
「アスパラガス！」
リトルタガーの腕からこぶしがはずれ、ロケットパンチになってナムに襲いかかった。
「な、なんなんだ。」

ナムは頭をかかえ逃げた。

昔、なつかしい子供向けのロボットアニメそのものだったが、現代の子供のナムにはわかるはずもなく、通用もしない。

ロケットパンチはナムの頭をかすめると、ふたたびリトルタガーの腕にもどった。

次の攻撃は、胸の部分がパカッと開くと、ミサイルがいっぱい……ほとんどアナクロである。リトルタガーが叫んだ。

「かいわれ大根！」

ミサイルが全弾発射される。

「ヒーッ！」

ナムは、剣の林の中に飛びこんだ。

ミサイルは、林をよけて、爆発した。

……やっぱ、宝の剣はこわせないもんな……だけど、なんで、かいわれ大根なの？

ナムは首をひねった。

☆　ギリシア・アクロポリス

アーリアの額に冷や汗が出ていた
そうとうに体がまいっていた。
しかし、どんなにくたびれていていても、疑問点は解決しておかねば気がすまない性質(たち)だ。
「かいわれ大根……って、あれなんなの？」
レーリアが答えた。
「意味はありません。ただ、ああいうときによく使う言葉、『くそ』とか『畜生！』、『このやろう』は汚いから使うのはよそうということに決めましたでしょ……だからです。」
「でも、どうして、かいわれ大根なの？」
アーリアの問いに、レーリアはしばらく黙っていたが……。
「……あなたの体のために、野菜をとらねばだめだよ……という健康管理用の菜食データが、なぜか、まぎれこんでしまったんです。」
「……野菜きらーい。」
「果物もあります。栄養のためです。」
レーリアは平然といった。

＊　＊　＊

リトルタガーは、みの笠のようなくさりつきの頭をはずすと、ブルンブルンとふりまわ

して、剣の林に投げこんだ。
「ピーマン!!」
笠の頭は、剣をはじき飛ばしていった。
どうやら、笠のふちには、ゴムのようなやわらかいものがついていて、剣をはじき飛ばしても、剣には傷がつかないようだ。
リトルタガーは、剣の林から、ナムを追い出しにかかったのだ。
ナムはつぶやいた。
「ピーマン、きらい！」
笠の頭は、剣の林の一部を倒すと、また、元の頭部にもどった。
リトルタガーは、ふたたび頭をふりまわしはじめる。
「ジャガイモ!!」
剣の林に投げつける。
ナムは飛びはねてよける。
「ポテトフライ！」
ナムも、そう叫んだ。
剣の林をすこしずつ倒しながらのかけ合いが始まった。

リトルタガーが、
「メロン!」
ナムが……、
「シャーベット。」
リトルタガーが、
「ほしブドー。」
ナムが、
「ペチャパイ!」
あまり続けると、出版社が怒りだすので——。
「ナスビー!」といえば、「おしんこ!」
「ほうれん草!」対「ポパイ!」
「パパイヤ!」vs「マンゴー、ママスキ。」
「南京豆!」……
「ロッキード、ちと古い!」
このぐらいでやめておきます。
とにかく、いつのまにか、大広間の剣の林はすべてなぎ倒されてしまった。

追いつめられたナムは、手に持ったビーム銃とエネルギー剣をなんども使ったが、リトルタガーはびくともしない。
これでは逃げる一方だ。
そのときだった。
大広間に、ドーッとイノガニック戦士たちが飛びこんできた。
勤務時間が始まったイノガニックたちだ。
「しまった!」
イノガニックの新手に気をとられたナムに、リトルタガーの頭の笠が襲いかかった。
笠は、エネルギー剣とビーム銃をはじきとばし、ナムの体を大広間の壁に叩きつけた。
「ウッ!」
体の痛みに顔をしかめながらよろよろと立ち上がったナムに、イノガニック戦士たちがじりじりと迫ってきた。
ナムの手にもう武器はない。それに、あまりに疲れすぎている。
〈……これまでか……。〉
ナムは、ガックリと頭をたれた。
だが、そのとき、

「ん、あれは……？」

数メートル先に、剣がころがっていた。

なんの飾りもない、ペーパーナイフを大きくしたような剣……。

そう、ナムがシュルギの剣と見比べて、捨てたほうの剣だ。

〈……あんな剣じゃ、役にたたないよな……でも……。〉

ナムは、キッと顔をあげた。

〈……でも、俺は最後まで、悪あがきする！〉

ナムは、剣に飛びついた。

ナムは剣をかまえた。

イノガニック戦士（ソルジャー）たちが、腕を剣に変え、襲いかかってきた。

〈……それにしても、なんて手ごたえのない剣なんだ。軽すぎて持った気がしないや……。〉

ナムは、剣で受けた。

ズン！

激しい衝撃が剣の先に走った。

「えっ？」

剣に力がみなぎり、金色の光が、すさまじい勢いで剣身のすべてからほとばしり出た。

次の瞬間、起こったでき事をナムは信じられなかった。
ナムに襲いかかったイノガニック兵の姿はもとより、あとに続いた数十体のイノガニック兵のすべてが、光に斬(き)り裂かれ、はじけとんでいた。
〈……これが？　これがもしかしてほんとうの聖剣(シェード)……？〉
「カリフラワー!!」
リトルタガーが、ナムをふみつぶそうと、巨体をゆらして走ってくる。
ナムは、その巨体を下から上に剣で切りあげた。
光が走り、リトルタガーの体は、まっ二つになった。
「練馬大根!!」
そう、断末魔の声を残して、リトルタガーの体は大爆発を起こした。
ナムはぼそりとつぶやいた。
「大根役者。」
爆発は、天井に燃え移り、神殿じゅうに波及した。

丘の上の夜空が白々としてきた。
「あきらめたほうがいいみたい。」

バオがラサの肩を叩いた。

「もう夜明けも近いというのに、なんの音沙汰もないんだものね。」

キムが、肩を落としていった。

「イヤ！　もうすこし、もうすこし、待ってみたいの。」

ラサ自身も、あきらめていないといえばうそになった。

それでも、ナムのことを知るなにかの手がかりが欲しかったのだ。

〈……手がかりのないのが、死んだ証拠だっていうのはよく知ってはいるのだけど……。〉

ラサは、親指のつめをかんだ。

つめはほとんどすり切れていた。

そのときだった。

ズズズズ……。

地軸をゆるがすような地鳴りがした。

「な、なんじゃや？」

「みんな！　あれを！」

キムがイノガニックの神殿を指さした。

神殿の円形の壁にみるみるヒビが入っていく。

金属の壁が、金色の光に包まれ、パチン、パチンとはじけはじめた。
そして、一瞬のうちに、巨大な神殿そのものが大爆発を起こして吹き飛んだのだ。
「こんなことって。」
「あるのよねえ。」
キムとバオは、ポカンと口を開けたままだ。
「ナム!!」
ラサは、フローターバイクに飛び乗った。
バオが、あわてて、バイクの前に立ちふさがった。
「どこいく気なの。」
「ナムを、ナムを助けなきゃ!」
「助けるったって、向こうは高い崖(がけ)の下。……なにが起こったか確かめなきゃ危険だわさ。」
ラサはエンジンをふかして叫んだ。
「どいて! そこを!」
「こんな谷で、ナムちゃん、死んじゃダメ。」
「どいてー!」
ラサは、フローターバイクを発進させた。

いったのだ。
なぜなら、フローターバイクは、バイクにしがみついたバオもろとも、崖をかけおりて
かけおりるといっても、わずかに浮く力しかないバイクだ。ほとんど垂直に落下してい
くといっていい。
「ひえええ！」
バオの悲鳴だけが崖にこだました。
激突の瞬間——ラサはエンジンをふかし、バイクの前部を宙に持ちあげた。
まるで、スキーのジャンプの着地のように、フローターバイクは、崖下におりた。ラサ
は、バイクから飛びおりると神殿の残骸へ走っていった。
バオは、あわをふいて目をまわしている。
「バオさん、だいじょうぶですか？」
「ん？」
アドバルーンのような降下装置をつけたキムが、フワフワとおりてきていった。
「おい、キム、おめえ、そういうのがあるんだったら、なぜ先に……。」

「だって、二人ともいきなりおりていっちゃうんですもんね。」
「おりたくておりたんチャウわい。信じられんわ。最近の女の子のすることは……。」
「ええ、すっごいですねぇ。」
キムは、残骸の間を歩くラサの後ろ姿を、ほとんど尊敬のまなざしで見つめていた。
「ナム、どこにいるの？　どこ？」
ラサはとほうにくれていた。
残骸に、神殿のおもかげはまるでない。
金属でできたイノガニックの残骸すら見当たらないのだ。
それほど完膚ない大爆発で、生身のナムが生きている可能性は、万に一つもなさそうだった。
「ナム……ナム……死んじゃ、いやだ！」
そのときだった。
足元の残骸がガサガサッと動いた。
「えっ？」
残骸が、ムクムクッと持ちあがり、
「ブハハーッ！　たまんねっす。」

ナムだった。
そして、ラサに、ニッコリ笑いかけた。
「ラサ、やったぜ。ほら、これが聖剣（シェード）さ。」
ナムは、ラサに聖剣（シェード）を見せた。
そして声も出ず涙ぐんでいるラサの前で、目をまわして倒れた。
疲労が極に達していて気を失ったのだ。

☆　A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

「プレーIIは、あなたの勝ちね。よく聖剣（シェード）を手に入れたわ。」
レーリアの言葉にアーリアは答えを出さなかった。
「アーリア……アーリア！　どうしたの、アーリア！」
アーリアは、キーボードにつっぷして気を失っていた。
アーリアの病は重く、今日のゲームはアーリアにとってやはり過酷（かこく）すぎたのだ。
「アーリア、しっかりして、アーリア……。」
レーリアの声だけが響き続けていた。

最強の敵

☆　A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

気を失ったアーリアは入院し、しばらくレーリアに会いにこなかった。
ゲームは中断したままだ。
レーリアの内部回路は、アーリアを心配しつづけた。
〈――アーリア、がんばって！　このまま、ゲームを中断したままじゃいけないわ。ここまできたら、最後まで続けましょう、ね。
このままでは、わたしもゲームをどうしたらいいのかわからない――。〉

三日が経った。

カラカラと車輪の音を響かせて、なにかがレーリアのそばにやってきた。

「誰?」

「わたしだったりして。」

いきなりアーリアの上半身が、後ろからレーリアの前に現れた。

「アーリア! だいじょうぶだったの?」

「どうにかね……。」

「でも、なんの音……今のは……。」

「え、あ、これ、車いす……わたし、歩けなくなっちゃった。こんな姿、あなたに見せたくないから、こっそり来たの。これだと、足のほう、見えないでしょ。」

「アーリア……。」

アーリアはレーリアをじっと見つめた。

「レーリア……。」

「えっ?」

「わたし……わたしね……ときどき思ってたんだけど、もしも、わたしに子供が生まれるとしたら、あなたとわたしの子供が欲しいな。」

「突然、なにをいいだすの?」
とまどったレーリアは聞きかえした。
「今のわたしはもうすぐだめになるじゃん。次のわたしたちが欲しいなって思って……。」
「アーリア、あなたは今のあなたのことを考えるべきだわ……十四歳のあなたが、次の世代のことなんか考えちゃいけないわ。」
「十四歳でも、終わりの近い十四歳……機械のあなたと、人間、それも異形のわたしとの間に生まれる子供って、どんな子なのかな、なんて思っちゃったりして……。」
「機械と人間だなんて、不自然だわ。」
「男と男どうしの子より、女と女どうしの子より、この世界の人間とわたしの子供よりはずっと自然だと思うけど……少なくとも、わたし、あなたを好きだもの……。」
「ええ、わたしも……でもそれは、兄弟姉妹のようなものだと思うわ。」
話題をそらすようにレーリアは、アーリアにいった。
アーリアはフッと笑った。
「姉と妹か……うん……そうね。」
肩をすくめたアーリアは、レーリアの顔(ビジョン)を見すえていった。
「ゲームを続けましょう。先を急がなくっちゃ。」

車いすのアーリアはキーボードを叩き始めた。

＊　＊　＊

ナムの頬に、ぽたり、ぽたりと水滴が落ちる。
「ん？　ここどこ？」
ナムは、ぼんやりと目を開けた。
その目に、水滴が、目薬のように落ちた。
ナムは思わず目をしばたかせた。
水のベールの向こうに、女の顔が見える。
「ここは、天国か？」
ナムは、そっと、女の顔の頬に触った。
「ナム……。」
女の顔はしだいにはっきりしてくる。
「ラサかぁ……。」
「気がついたのね。」
ナムは、ラサの膝枕で倒れていたのだ。
「よかった！」

ラサは、思いきりナムの首根っこを抱きしめた。
「ぐ、ぐ、苦しい……息が……。」
「ごめん。」
ナムはラサを見つめ返した。
ラサの顔は涙でぐちゃぐちゃだ。
〈……ということは、さっきの水滴はラサの涙か……アハ……俺、ラサと目と目でキスしちゃった……では、本来のも、どさくさにまぎれて……。〉
二人は見つめあった。
そのとき、遠くでバオのため息が聞こえた。
「あーあ、いちゃりんこ、、、、、、のーちゃりんこ、、、、……近ごろの若いものは、人前もはばからず……。」
「よい中年は、ひがまず優しく見守るものです。」とキム。
「わ——、寂しい……。」と、バオはキムを抱きしめ、キスを連発した。
「ギャーッ！　僕の顔を、べったらづけにしないでください！」
キムの悲鳴に白けてしまったラサとナムは……。
「……また、べつのときに……。」
「うん、ギャラリーの質が悪すぎるみたい。」

ナムは、コホンとせきばらいをするとバオとキムに聖剣を掲げてみせた。
「やったよ。ほら、これが聖剣さ。」
朝の陽に剣身がキラキラと輝いている。
「おめっでと……ザックスの勇者、ハッピーバースデーツーユー……でも、あんまり、ハッピーじゃないかもな。」
バオの言葉に、ナムはけげんそうに聞いた。
「どうして？」
「うむ、イノガニックの神殿をこんなにハチャメチャにしちまって……祟りが恐いわい。」
「祟り？」
「うむ、神殿を破壊せし星、イノガニックの悪魔によりて、死をもたらせられん……ちゅう予言がいいつたえられているのよ。
すなわち、祟りじゃ～!!」
バオがすごみをきかせた声で、幽霊のように手をだら～んと垂らし、おまけに水かきから水を滴らせて、そういったものだから、
「キャッ！」

思わずラサはナムに抱きついた。
キムはうんざりしていった。
「バオさん、よしてよ、ここは、お化け屋敷じゃないんだから。かえって、若い男女が楽しむだけですよ。」
「サービス、サービス。」
バオは肩をすくめた。
そのときだった。
「あなたたちはむだ話が多過ぎます。先を急ぎなさい。」どこからか声が聞こえた。
「あん？　誰？」
ピカーッ！
突然、聖剣の輝きが増した。
聖剣の先から、ぼんやりとした青白い女の姿が浮かびあがった。
「ひえ、お化け！」
一同は飛びあがって仰天した。
だが、顔をおおった手のすきまから女を見たバオがうなった。
「じゃが、お化けにしても、べっぴんねえちゃん。」

「えっ？　べっぴん。」
ナムとキムも、まじまじと女を見つめて、同時につぶやいた。
「ほんまにべっぴん。お化けでもいい……。」
ムカ～ッ――。
ラサは、三段跳びで、ナムとキムとバオの足を踏んづけていった。
「ん、たくもう、女の人だったらお化けだろうとなんだろうと、目がないんだから。」
「いいかげんにアホはやめてくれませんか!?」
剣から浮かびあがった女が叫んだ。
「私はお化けではありません。あなたたちとこの世界を作ったものです。」
「わしらを作ったって？　よしてくんなさいよ。わしを作ったのは、かあちゃんととおちゃんで、もしも、ねえちゃんだったら、わし、もうちっといい男に生まれてたんちゃいまっか？」バオが女にいった。
「納得……。」と一同もうなずいた。
「へんに納得しないでください。私が作ったというのは、そーいうことではなく……わかんないかな。」
じれったそうに身をよじる女に、キムがニッコリ笑いかけた。

「要するに、この宇宙を作った創造主、神、だってことでしょ。」
「神ってほどオーバーではなくても、ま、アーリアと本名で呼んでください。よーするに、この宇宙は、私の作った一個の生命体なのです。でも、残念なことに、今は病気……あなたがたオーガニックの生命が宇宙にあふれたとき、宇宙は、病気から解放され、元気な宇宙になるのです。あなたたちに敵対するイノガニックは、生命体を破壊させる病気のもと、いわば、ガン細胞のようなものなのです。でも、不必要なものでも、この宇宙にあるかぎり、オーガニックのあなたたちは、戦わなければなりません。聖剣(シェード)は、多くのオーガニックの生命エネルギーが結晶したものです。
聖剣(シェード)には、生きる希望が満ちあふれ、聖剣(シェード)こそ、宇宙の死を呼ぶイノガニックの生命パターンを打ち破る、最大のエネルギーなのです。」
「なんか、しっちゃか難(むずか)しいけど、早い話が、聖剣(シェード)でイノガニックをやっつけりゃいいんでしょ。」
ナムの言葉に、一瞬アーリアはポカンと口を開けたが……。
「そう簡単にいわれては身もふたもありませんが、早い話がそーいうことで、今、宇宙はほとんど死にかけています。あわてて、急いでやっつけてください。ただし、聖剣(シェード)の使い手は、それなりの力がなければなりません。最初だけは顔見せで、その力を一部見せまし

たが、これからは、そうはいきません。」
「どういくわけ？」ナムが聞いた。
「あなたのやる気しだいです。意識の力しだいです。」アーリアがいった。
「まかしぇんしゃい。フォース・メイ・ビー・ウィズ・ミー。」とナムは胸を張った。
アーリアは天を仰いだ。
「不安です。ひじょうに不安です。でも仕方がありません。聖剣（シェード）はあなたが持っているのですからね。結果がどう出ようと当方はいっさい関知しませんので、そのつもりで……なお、私の姿は、二秒後に消えます。」
言葉どおり、アーリアの姿は二秒後に消えた。

☆A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

アーリアは、ため息をついた。
「私、頭が痛くなったわ。」
「わざわざ、回線にあなたの姿をインプットして忠告したのにね。あれで、ナムの手助けになったのかしら……。」レーリアもあきれている。

「子供なんだわ、けっきょく、私も。」
「えっ?」
「説得力が足りないのよね、いやになっちゃう。」
アーリアは唇をかんでそれからいった。
「レーリア、ゲームを続けましょ。」

＊　＊　＊

その日、イノガニックの神殿とは裏腹に、ザックスの村は何事もなく朝が明けていった。
だが、その地下数千メートルで、何者かがつぶやいていたのを知るものはいなかった。
「イノガニックの神殿が崩壊?　兵士たちも全滅?　しかも聖剣(シェード)を持ち去られただと?
ザックスの一族に、そんな力を持っているものがいるだと?　信じられん。」
もう一つの声が答えた。
「だが、事実、神殿はなくなってしまった。我々は、惰眠(だみん)を貪(むさぼ)りすぎたようだ。この二百年の間、アクアロイドに危険なしと思い込んだのがうかつだった。」
「聖剣(シェード)を使わせてはならぬ……。」
「イノガニックの作りだしたこの星の秩序をくずすものは許せぬ。」
二つの声の持ち主は活動を始めた。

それから十分もしないうちに、ザックスの村は微かな地鳴りを感じた。
それは、いつものように、囲炉裏をはさんで、茶をすするナムの伯父と伯母の体にも感じられた。
「おや？　ばあさんや、貧乏ゆすりかえ。」
「いやですよ。わたしゃ、いくら貧乏でも、ゆすりたかりはしませんえ……。」
「そうじゃったな。それだけが、ばあさんのとりえじゃったの。つまみ食いはようしなさったが。」
「いやですねえ、おじいさんたら。」
だが、地鳴りはさらに激しさを増し、二人の体は、起き上がりこぼしのように揺れた。
「お、お～っ、地震じゃ～っ！　ばあさん、火じゃ！　火を消すんじゃ。」
「はい、はい。」
ばあさんは、茶の湯を囲炉裏に注いで火を消した。灰が舞った。
「そうじゃ、よろし。地震のときには、まず火の始末。」
「そして、とんとんとんからりんの隣組。」
「懐かしいのう。」
だが、懐かしがっている時間はなかった。

ますます激しくなっていく地震に、ザックスの家は、あっというまに倒壊してしまったのだ。

被害の状況をテレビニュース風に伝えます。リード通信、アクアロイド放送局、中継車より——。
「こちら、アクアロイド星、ザックス大地震現場の火の見やぐらより中継しております。村の惨状は目を覆うものがあります。満足に残った家屋は、ほとんどなく、死傷者の救出は困難をきわめております。といって、救出に向かうものとていない悲惨な有り様です。おそらく、この村のほぼ全員が、押しつぶされた家屋の下にいるものと思われます。幸い、防災訓練が徹底していたために、火災のなかったことが不幸中の幸いといえましょう。
ん？　お？　なんでしょう。あ、きゃ、地震です。揺れてます。揺れてます。」
すさまじい地鳴りが聞こえる。

「あ〜あ、村の中央に、激しい土煙が！ これは、地震ではない。明らかに、地底から、なにかが出現しようとしています。
なんだ？ お〜っと、出てまいりました。出てまいりました。
身の丈三百六十五メートル、東京タワーを越さんという巨体……目にも鮮やかな真っ赤なその色……ドラム缶のような胴体……これは！ そう、これこそイノガニックが誇る、アクアロイド星の守り神、レッドデーモン（赤鬼）に違いありません。皆さん、我々がこの伝説の悪魔に会えたのは、じつに幸運、いいえ、じつに不幸なことであるといえましょう。
おや、お〜っと、もう一体が現れました、あれはなんだ……。今、その巨体をアクアロイドの表面に姿を現した。あれは何者か？ 青い体、やはりドラム缶のような胴体を、そうです。君知るやブルーデーモン（青鬼）を……デーモンついにそろい踏み。
アクアロイドの悪魔二人衆、堂々の登場です。お——っと、出た、出ました。その一ツ目から必殺の怪光線。倒壊した家屋をさらに紅蓮の炎が焼きつくしていきます。地獄です。これはまさに生きた地獄です。あ、悪魔たちは、動きはじめました。あ、あああ、ぬあんと、こちらに向かっ

てきます、我々に逃げる余地はありません。どんどんこちらに向かってきます。光る一ツ目がこちらをにらむ。ああ！　皆さん、これで終わりです。我々の中継はこれで終わります。アクアロイド星ザックス村、火の見やぐらより送りました。担当はアナウンサー……わ〜ッ!!」
　そこまでで放送は切れました。自分の名をいいきれなかった勇敢なアナウンサー氏に合掌（アーメン）しましょう。

　宇宙船に向かうパオとキムと別れたナムは、聖剣（シェード）を背負い、ラサとフローターバイクに乗り、意気揚々と村に向かっていた。
と、風船玉のようなものが、ころがるように、こっちへ向かってやってくる。
ラサが叫んだ。
「モンガーだわ。」
モンガーは二人の前に急停止した。
「モンガー、お出迎え？　ありがとう。」
しかし、モンガーは、汗をかきながら、手のようなものを広げ、なにかを話しかけようと必死になっている。

「どうしたんだ？　その小動物(ペット)君は？」とナム。
ラサにはモンガーのいいたい意味がすぐわかった。
「行くなといっているわ。村に行くなって！」
「えっ？　どうして？　いくらガッツのない村の人たちだって、聖剣(シェード)を見れば、ハリキっちゃうと思うけど。」
急にあたりが暗くなった。
「ナム、多分あれのことだわ。」
ラサがふるえながら指差したほうを振り向くと、陽の光をさえぎって、ドラム缶のような影が立っていた……レッドデーモンだ。
「出たな、イノガニックの化け物！　でも、こっちは聖剣(シェード)持ちじゃ～い。」
ナムは、聖剣(シェード)を振り上げると、レッドデーモンに向かって走っていった。
「無茶よ！　相手が大き過ぎるわ！」
「無茶苦茶、し茶く茶、番茶にでがらし、お茶の子さいさいさ。」
しかし、ずいぶん近くに見えたレッドデーモンの姿だったが、ナムは、なかなか近くまでたどりつけなかった。それほど、レッドデーモンは大きかったのだ。人間が足元に来る蟻を見るように、レッドデーモンはナムを見つめていた。

まるで、この虫けらが、聖剣を手に入れたなど信じられないといった感じだ。
荒い息で、レッドデーモンの足元にやってきたナムは自信満々で——。
「聖剣の力を見せてやる。」
力いっぱい、聖剣を足に、——いや足など届かなかった——かかとの片隅に叩きつけた。
カキーン。
聖剣は軽くはじきかえされた。
「あれ？　へんじゃありませんか？」
ナムは、首をひねりながらもう一度……。カキーン！
やはり結果は同じだった。三度めも四度めも……ナムの顔に冷や汗がジトーッと流れた。
「こんなはず、ありィ？」
レッドデーモンは、せせら笑うようにじっとしていたが、やがて巨大な足を持ちあげてナムを踏みつぶそうとした。
巨大なガスタンクが落ちてくるような感じだ。
「!!」
足がすくんだナムを、デーモンの足が踏みおろされる瞬間、ラサのフローターバイクが、救いあげた。ナムは礼もいわず呆然となってつぶやいた。

でしょ。」
「なんで聖剣(シェード)が効かないの？」
「しっかりしてよ！　ナムには、聖剣(シェード)を使いこなす力がまだないのよ。それっきゃないでしょ。」
ラサの肩に止まっているモンガーもうなずいた。
ナムは情けなくうなずきかえし、
「うん、それっきゃないよなぁ……現実は厳しい……。」
「現実はもっと厳しいわよッ！」
そうなのだ。ラサのフローターバイクを追って、レッドデーモンの目から放たれた怪光線が、いたるところで炸裂(さくれつ)する。巨大なレッドデーモンの光線だ。並の光線とは破壊力が違う。フローターバイクは光線を避けるというより爆風に翻弄(ほんろう)される木の葉のようだ。
「このままじゃやられちゃう！」
ラサは、フローターバイクをせまい谷に突っこませた。ここなら、レッドデーモンも入ってこられないだろう。
だが、後ろを振り向いたラサは、それが甘い計算であったのを知らされ、息をのんだ。
レッドデーモンは、谷の両側を削り落としながら、進んでくるのだった。
フローターバイクのすぐ後(うし)ろで、光線が炸裂した。爆風がせまい谷をかけぬけた。それ

はまるで高層ビルのビル風のように複雑な流れだった。
　フローターバイクは、ものすごいスピードでせまい谷から吹き出され、岩場に叩きつけられた。ラサが気がついたとき、手に持っているのは、フローターバイクの握りの部分だけ……。あとはバランバランだった。そして、ナムとモンガーの無事にも気がついたが、さらに目の前に新手のブルーデーモンが立ちふさがっているのに気がついた。
〈……もう、だめみたい……。〉
　ブルーデーモンの目がキラリと光った。次の瞬間、発射されるはずの怪光線……だが、それはなかった。かわりになにかの爆発音がした。
　見上げるとブルーデーモンの頭部に、バオの宇宙船が体当たりしていた。
　もとより、宇宙船の体当たりぐらいで、倒せる相手ではなかった。しかし、それでも、ラサたちを怪光線の餌食から救うことはできた。
　ラサの顔が悲しみにゆがんだ。
「バオとキムが死んじゃった……私たちのために……。」
　ラサは、声をあげて泣き出した。
「乙女の涙はうれしいが、三百年生きたこの命、簡単にゃくたばらねぇぜ。」
　背後で声がした。

重機関砲を後部に乗せたスズキジムニー(ジープ)の上に太陽を背に受け、すっくと立ったバオの影があった。運転しているのは、もちろんキムだ。
「あの宇宙船はラジコンだ。今は特攻で死ぬ時代じゃねぇ。」
「バオ!」
「ノーノノー、再会の喜びはおあとでたっぷり。お二人にゃ乗り物を用意した。」
ジープの後ろに、脚部が車輪でできた頭でっかちな馬のような乗り物が止めてある。
「ポニー7、車検も終わったばかりだ。早く乗んな。」
「あんがと!」
ラサとナムはうなずき合うとポニー7に飛び乗った。
「俺が運転する。」ナムが、操縦席にすわった。
「あんた無免許でしょ! 私にまかせなさい!」ラサが操縦桿をひったくった。
「さてと……どうやって動かすのかな?」

ポニー7　使用説明書

小型の空陸両用機で、空中、地上、ともにマッハ2で走れ……。

〈……おっと、使用説明書を読んでいる暇はないわ。どうせ乗り物なんて、自転車も宇宙船も似たようなものよ……。〉
体勢を整えたブルーデーモンと、谷をぬけてきたレッドデーモンはすぐそこだ。
「行っちゃえ！」
ジープとポニー7は、デーモンたちの攻撃をジグザグにかわしながら全速力で走り続けた。ジープの後部で重機関砲を撃ち続けるバオに、キムがため息まじりにいった。
「ジープなんて、こんな骨董品持ち出して、バオさんってアナクロだなぁ……。」
「男のロマン、男のロマン！」
バオは、当たっても効きめのあるはずもない機関砲を連射しながらわめいた。

そのときだった。この追跡劇を見おろす丘の上から、一台の小型バイクが飛び出した。
小型バイクには、やはり小さな一ツ目のイノガニックが乗っていた。
小型バイクは、ラサのポニー7のわきに並ぶとマイク越しに話しかけてきた。
「ねえちゃん、ねえちゃん……。」
「ん？」
ラサは、小型バイクに気づいた。

「わし、ベービーゆうねん。鬼ごっこ、おもしろそうやね。わいも入れてぇな。」
「なんじゃ？　こりゃ？」
ラサは目をパチクリさせた。

☆A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

「なんですか？　これは？　私のデータにないプログラミングです。」
レーリアがつぶやいた。
「そうね、私とあなたとの間に子供ができたらそんな子になるだろうと思って作ったの。」
アーリアは、そう答えてニッコリ笑った。
「体は、機械で、心は人間……それも私みたいなひとりぼっち……。」
「かってなもん、入れないでください。」
レーリアはあきれかえった。
「ごめん。でもこのゲーム、私にとって最後のゲームになるかもしれないもん。なんでも思いついたの入れときたいの……お願い……。」
アーリアにそうまでいわれては、レーリアも黙るよりほかなかった。

＊　＊　＊

ベービーは、追われているラサの気も知らずに話し続けた。

「すごいやろ、このバイク、わいが改造したんやでェ！　ねえちゃん、仲間に入れてえや……それともええとこ行かへんか？　豆乳でも飲んでディスコ行って遊ばへんか……？」

……この忙しいときに子供の相手ができますか……無視……無視……。

無視しなければ、わき見運転で、たちまち、デーモンたちの餌食になることもたしかだった。

ベービーはわめいた。

「こら、こっち向かんかい！　なに気どっとんねん。なあ、ねえちゃん、なあ、オバン、このブス、ブス、ブス！」

〈……今日びのガキャ、口が悪いんだから、どういう教育うけとんじゃい！……〉

ムカッときたラサは、ポニー7の翼を広げ、空に飛び上がった。

ベービーは、ぽつんと取り残され、

「あのアマ、無視してけつからにィ～。わいは夢と希望と愛に満ちた美少年やど～ッ！」

そこへデーモンたちが通りぬけていく。

「あっ、おいちゃんたち、わいと遊んでェな。」

デーモンたちは、土煙でベービーを吹きとばして、ラサたちを追っていった。
「あ、おいちゃんたち、待って！　わい、ガキとちゃうでェ、わい、まじにつきあいたいんや……。」
だが、デーモンたちの巨大な姿も今は、遠く小さく見える。
ベービーは、バイクからおり、肩を落として空を見上げた。
「だ〜れも、かまってくれへん……一人や……一人や……ひとりぼっちや……イノガニックも、オーガニックも……わいのことなんか無視するだけや……。」
ベービーは空に向かって叫んだ。
「青い空なんて……青い空なんて、でえっきらいや――っ！　バカヤロー！」
機械の体では出るはずのない涙が、その一ツ目からポロポロ流れた。

☆A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

アーリアは、ガックリと肩を落とした。
「ベービーをゲームに入れるんじゃやなかった……。」
アーリアの目にも、ベービーと同じ涙が光っていた。レーリアは黙っていた。

「レーリア、今日は、ここまでにしてくれない？　私、疲れたわ……。」
「そうしましょう、アーリア……。」
レーリアの言葉に、答えはなかった。
力の抜けたアーリアは、車いすの上で、気を失っていたのだ。

GAME FOUR PLAY II

最終兵器

☆　A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

ゲームを中断してから、一週間も経つのにアーリアは、レーリアの前に姿を現さなかった。
こんなに長い不在は、はじめてのことだ。
ゲーム中断の文字だけが寂しくレーリアの顔に映っていた。
テーブルの上に置かれた目と口だけついた、モンガーという名の丸いフワフワぬいぐるみも、そのままの場所に置かれていた。

片隅に置かれた、今はもう乗ることもできなくなったアーリアのヘルスサイクル、「フローターバイク」もカバーをかぶせたままだ。

ペガサスをかたちどった、小さな木馬も、空気調整の風でいつものようにわずかに揺れている。

違うのは、この部屋の主、アーリアがいないことだ。

いったい、こんなに長い間、アーリアの身になにが起こったのか、レーリアの計算機能は不安を表示していた。

それから、さらに三日が経った。

レーリアは、どこかでかすかに警報装置のようなものが鳴るのを感知した。

いきなり扉の開く音がして、病院の患者を運ぶ自動ストレッチャーの動く音がして、レーリアの前で止まった。

「レーリア……扉をロックして!」ストレッチャーに乗ったアーリアだった。

「アーリア、あなた、いったい、今までどうしてたの?」

「いいから……ともかく、この部屋の扉をロックして! 一時間でいいから……誰も通さないで……。」

レーリアはいうとおりにした。

この部屋は、レーリアがロックすれば、外部のものがどんな道具を使っても開きはしなかった。
「さ、ゲームの続きを……。」
「それはいいけど……。」
レーリアは、アーリアがストレッチャーからおりる様子がないのに気がついた。
ストレッチャーの上から、直接キーボードを動かそうとしているのだ。
「そんなかっこうでゲームをするの？」
「動かないの、もう体が……使えるのは、手と頭だけ……。」
「そんなことって……。」
アーリアは悲しげに、苦しげにいった。
「わたし、みんなが、わたしの体を直してくれるんだと思ってた。みんなと違いすぎるわたしの体をね。でも、違っていたわ。みんなは、世界で一つしかない異形のわたしの体を実験に使っていただけなの。そして、わたしの寿命が、あと四日ももたないって決まったとき、生きている間に解剖しようって決めた。だからわたし、病院から逃げてきたの。」
「どうして、そんなことに……。」
「あんまり長く病室にとじこめられるもんだから、私、病室の通信回路に細工して、病院

じゅうの通信を聞いちゃったの……先生が院長にいっていたわ。死んでから解剖しても意味はありません。アーリアは、貴重なサンプルです。有意義に使うべきです。そして、みんなそれに賛成した……。」

部屋の扉のドアが、ドンドンと叩(たた)かれた。

「アーリア、出てきなさい。その部屋にいては体に悪いよ。」

扉の外から、優しさをよそおった男の声が聞こえた。アーリアが荒い息でレーリアにささやいた。

「先生たちは、わたしが通信を聞いていたのをまだ知らないのよ……さ、早くゲームを……。」

レーリアはゲームを再開した。

＊　＊　＊

ポニー7(セブン)とジープは、デーモンたちに追われて、アクアロイドの荒野を逃げまくっていた。そろそろ燃料も尽きかけていた。

バオがマイク越しにポニー7のラサとナムにいった。

「こうなったら禁制地帯に逃げこむよりないな。」

「禁制地帯!?」

ナムがあわててバオにいった。

「やばいよ、あそこは！　放射能があるから行くなって、昔から村でいわれてんだよ。」
「へん、そりゃ、大昔のことよ。核兵器でぶっつぶれた地下の街だが、もうだいじょうぶなはずだ。」
バオの言葉にキムが注釈をつけた。
「放射能には半減期があるからね……もう安全レベルにいってるよ。」
「オーガニックにも禁制ならイノガニックにとっても禁制だ……上の命令大事の連中のことだ、あそこまでは追ってこねえだろ。俺についてこい！」
バオは、キムからジープのハンドルをひったくると猛然と走りはじめた。

禁制地区、または禁断地区
ＳＦや冒険物の小説にやたら登場する設定の一つで、だれも入ってはいけない場所のこと……かつて、この掟（おきて）が守られた小説や映画は一本もない……といっていい。

ジープとポニー7は、禁制地区に突っこんだ。禁制地区には、異様な形をした巨大な岩の柱が、いたるところに突っ立っている。中国の桂林を思わすこの岩の群れも、よく見る

と、熱で焼け溶けた都市の廃墟だった。
「よーし、ここまでくりゃ、だいじょうぶだ。」
バオがいったとたん、頭上の岩の柱が怪光線で砕け落ちた。
「だいじょうぶじゃないですよッ!」
キムの叫びに後ろを振り向くと、デーモンたちがしっかり追いかけてくる。
「わしらがだいじょうぶってことは、やつらもだいじょうぶってことか……いまや、ここは、どなたさんにとっても禁制地区にあらず……先、行こ。」
バオは、ジープのアクセルを踏みこんだ。
「この先に、地下都市への入り口があるはずだ。」
「よく知っていますね。」
「出入口のねえ地下都市なんか、あるはずがねえ。さがすんだ。」
「な、無責任な……。」
ポニー7を運転していたラサが、前方を指差した。
「見て! 洞穴があるわ。」
直径三十メートルほどの穴で、その丸さはいかにも人工的だった。
「よっしゃ、あそこが入り口だ。突っこめ!」

バオが叫んだ。
「な、イージーに決めないでください。」キムが叫んだ。
「イージー、カム、イージー、ゴー！　行く先は洞穴に聞け！」
ジープとポニー7(セブン)は、洞穴へ飛びこんだ。
岩盤でできていた洞穴はすぐにコンクリートのトンネルに変わった。そして、トンネルは、ゆるやかに下降していた。
「見ろ！　やっぱ、地下都市への入り口だ！」
バオが躍(おど)りあがって喜んだ。
ラサは、ホッとため息をもらした。
「この大きさのトンネルなら、やつらも入ってこられないわ。」
「でも、こういうときは……。」
ナムが口を開いた。今まで、しばらくの間、ナムの台詞(せりふ)がなかったのは、ラサの、あまりの無謀運転に、目を閉じて、助手席にしがみついているよりなかったからだ。ナムは続けた。
「たいがい、トンネルの中を丸い大石とか、鉄砲水が追いかけてくるんだよな。」
「そんな無声映画時代の古い手を使うもんですか……いくらなんでもね。」

そこまでいって、背後の轟音に気づいた。

「あん？」ジトーッと冷や汗が出た。恐る恐る後ろを振りかえる。

すさまじい量の水と巨大なエボナイトの玉がころがりおりてきた。

「両方来ちゃったわ。」

「ワンパターンは不滅です！　急げ！」

ポニー7とジープはトンネルをフルスピードで逃げに逃げた。いったい今まで全速とか、さらに猛速とかもっとフルスピードとか、何回この手の表現を使ったことだろう。彼らのスピードの限界がどこにあるのか定かではないが、ともかくメチャクチャなスピードである。

洞穴の入り口では、レッドデーモンが、ビリヤードのキューで赤玉や白玉をつぎつぎに穴に打ちこみ、ブルーデーモンは、ポンプを上下しながら、ホースで水を注ぎ入れていた。

「出口だ！」

巨大な玉に押しつぶされる間一髪、地下都市に飛びだしたポニー7とジープは、急にハンドルをきってトンネルの出口の両側へ逃げた。

トンネルから鉄砲水と巨大な玉が四つ飛びだし、地下都市のビルの廃墟をガンガンくずしながら、遠ざかっていった。

「安心するなよッ！　そこの地図を頭に叩きこんでおくんだ。」

バオが、トンネルの出口に掲げられた地下都市の案内図を指した。

最初は、なんのことかよくわからなかった一同だが、やがて、ゴゴゴゴという轟音が近づいてくるのに気づいて、わけがわかった。先刻、通りすぎた玉が、地下都市の外壁に様々な角度ではねかえってもどってきたのだ。

目の前のビルが、いきなりくずれ、玉が現れる。必死でジープとポニー7はかわす。玉は一つではない。四つの玉がそれぞれ都市の外壁にはねかえっては、ビルを倒しながら地下都市じゅうをかけまわるのだ。

ジープとポニー7は、ビリヤード台の上にまぎれこんだノミのように、地下都市じゅうをかけずりまわって、逃げまくった。

やっと、玉が止まり、地下都市に静けさがもどったとき、都市のビル群は、ほとんど倒されていた。しかも、トンネルから流れこむ水は、広大な地下都市の底を水びたしに、おまけに、わずかずつながら水位を上げていた。

バオがあごをなでながらいった。

「今のところ、床下浸水ってとこだが、そのうち、都市全体が水タンクになっちまうぜ。水かきつきの、水の中育ちのわしゃ、かまわんが、お前たちはドザエモンの水ぶくれだ。早くここからぬけださにゃな。」
「ぬけだそうにも、燃料がもうすこししかありませんよ。」とキムが唇を嚙みしめていった。
ナムは、あたりを見まわした。路上に放置された車の間にオートバイが倒れていた。
ナムはポニー7から飛びおりていった。
「手分けして捜そうよ。こんだけ大きい地下都市だ。どっかに燃料があるかもしれないよ。」
ナムは、倒れかけていたオートバイを立てて乗った。
スタートボタンを押す……エンジンがかかる……しめた！　動くぞ！
「じゃ、お先に！」
「あ、待って、わたしも行くわ。」
「ラサはラサで捜してよ。」
ナムはバイクを発進させた。
ナムは、ちょっとだけホッとしていた。
〈……ラサ、君と別行動したいわけじゃないけれど、正直いって、女の運転は酔っぱらいより、怖いって、ほんとうだよな……。〉

バオたちも、ラサと別行動をとり、燃料を捜しはじめた。
「いいのかな？　女の子を一人にしといて。」
キムがバオを責めるようにいった。
「空を飛べるポニー7だ。あれに乗ってりゃ誰より安全よ。それより、わし、燃料のほかにちょっと捜しもんがあるわけ。」
「捜しモン？」
「ドンゲマハルって知ってっか？」
キムには聞いたことのない名だった。
「伝説の最終兵器さ。オーガニックが対イノガニック用に作った切り札でな、すべての分子をプラズマ状態にしちまうんだ。」
「へえ、それで使ったのかい？」
「いや、あまりに威力がでかすぎてな。爆弾そのものは小さくて、バズーカ砲でも撃てるんだが、いったん爆発するとつぎつぎに連鎖反応を起こし、しまいにゃ、島宇宙そのものをプラズマのかたまりにしちまうのさ。」
「それじゃあ、あってても使えないじゃない。爆発させりゃあ、自分の住んでいる惑星はおろか、このリド星系までいかれちまうんだろ。」

「だが、和平交渉の手段にはなる。脅迫のネタにだってなる。『俺たちはどうなったっていいんだ。俺たちの要求を聞かなきゃ、これを爆発させてやる。』ってな。ところが、完成したかどうかわからぬうちに、ここは核攻撃を受けて崩壊されちまった。」
「イノガニックだって、それ知っているんでしょ。」
「多分な。しかし、これを手にしたものは、イノガニックだろうとオーガニックだろうと、一人で、宇宙を脅迫できるわけだ。たった一人の阿呆が、ドンゲマハルさえ手に入れれば宇宙の王様になれる寸法だ。そんな阿呆が、敵に現れようが味方に現れようが迷惑千万なことさ……。」
「わかった。バオさん、その阿呆になるつもりだね。」キムはバオを見すえた。
「乗りかかった船、男のロマンよ。……だがな、俺ァ阿呆になるつもりはねえ……ただ、チラッチラッとイノガニックに見せつけて、ちょっとだけ、甘い汁を吸わしてもらうのさ。俺だって、宇宙をぶっとばしたくはねえもんな……。」
「で、どこにあるかわかっているんですかァ。」
「わかってりゃ、捜しゃしないよ。」
「あっ、そうですね、そりゃそうですね。」キムはすこしだけほっとした。
〈……バオ……悪いけど、そんな物騒なもの、僕はぜったい見つけさせはしないよ……。〉

ナムは地下都市をオートバイでかけまわった。水位はすでに、一メートルを超えている。

水面に出たビルの破片や、放置された車の屋根をジャンプしながら、ナムは円形の見慣れないビルの前にやってきた。

外壁のくずれ落ちたビルの中に、巨大な金庫があり、先刻の玉の衝突でロックが外れたのだろう、金庫の扉が開いていた。

〈……なんか、ありそうだな。行ってみるか……。〉

ナムはオートバイごと金庫の中へ突っこんでいった。

金庫の中は意外に長い通路になっていた。

やがて通路は階段になり、地下へおりていく。この地下は、外部とまったく遮断されているらしく、浸水はまるでなかった。

ナムは、階段をオートバイで走りおりた。

階段の先は行き止まりだった。

ナムは、オートバイのヘッドライトで、行き止まりの壁を照らした。壁の前に来て、すきまがないかどうか捜してみた。

かみそりの歯の入るすきまもなかった。

「けっきょく、南極、地の果てか……。」

そのとき、背負った聖剣(シェード)のつかに当たったヘッドライトの光が、天井の一部に反射した。
突然サイレンが鳴り、目の前の壁が音を立てて開いた。
天井に壁を開けるセンサーがついていたのだ。壁の向こう側に明かりがついた。
サイレンの音にとまどったナムだったが、……エーイ、行っちゃえ……。
壁の中は、なにかの研究室だった。
見たこともない機械が整然と並べられて、かすかな電磁音を響かせて動いていた。
ナムは、あたりをうかがいながら奥へ向かっていった。人の気配はまるでない。生きているのは、機械だけのようだった。
「アーッ！」
ナムは息をのんで足を止めた。
目の前に、人間が倒れていた。それも白骨化した人間が三人も……それぞれ拳銃を持ち頭骸骨に穴が開いていた。それはどうやら、撃ち合いではなく、自ら命を絶ったように見えた。
そのうちの一人の白骨化した指は、壁のボタンを指差していた。
ナムはためらいながらもボタンのそばに行った。
へ……このボタンはなんなんだ。

……いいさ……ここまで来たんだ……押しちゃえ！〉

ナムは目を閉じてボタンを押した。

スーッと音もなく、ナムの目の前の壁が開いた。

その中に、赤い色をしたバズーカ砲のようなものが備えつけられていた。

砲身には、こう書かれてあった。

「ドンゲマハル砲」

ナムには、それがなんの意味だかわからなかった。

ナムのいる地下室で鳴っているサイレンは地下都市じゅうに聞こえていた。

給油所を見つけ、キムと燃料を入れていたバオは、思わず燃料パイプを取り落としそうになった。

「だれかが、ドンゲマハルを……。」

地下都市の上空を飛ぶポニー7のラサもその音を聞いた。

そしてその音は、地上にいる二体のデーモンにも、もれ聞こえていた。

デーモンたちに空から指令が下った。

「急げ……ドンゲマハルの使われぬうちに、抹殺するのだ。」

デーモンたちは、巨体を、地表に体当たりさせはじめた。
ナムは、ドンゲマハル砲を持って、地下室から出てきた。
そのとたん、轟音(ごうおん)を響かせて、地下都市の天井がくずれおちた。続いて、天井を突き破って二体のデーモンがおりてきた。

バオとキムのジープは、ふりかかる天井のがれきの下を、サイレンの鳴る方向へひたすら走り続けた。
いつのまにか、ラサのポニー7(セブン)も横を走っている。ラサが叫ぶ。
「バオ！　ナムの身になにかが……。」
「わかってる。下手なことが起こっちゃ皆おだぶつだ！」

「これ、役に立つかな？」
落下する天井の破片から、かろうじて身をかわしたナムは、ビルの陰に隠れて、ドンゲマハル砲をかまえた。
かまえてみたはいいが、撃(う)ち方がわからない。
引き金らしいものはあるのだが、安全装置がかかっているらしくて動かない。

〈……ちぇっ、どうやって動かしゃいいんだ！〉
デーモンたちの怪光線は、メチャ撃ちで地下都市を焼きはらっていく。
ナムの隠れていたビルにも、怪光線が直撃した。
「わ――ッ！」
ナムの体が爆風で吹っとび、路上に叩きつけられる。
〈……こんなのありかよ。全編やられっぱなしじゃないか！〉
ナムは、起きあがるとかたわらに落ちているドンゲマハル砲をけっとばした。
そのとたん、台尻のランプが点灯した。
「DANGER」の文字が砲身に浮かびあがる。どうやらけっとばした衝撃で、ドンゲマハル砲の安全装置がはずれたらしい。
〈……最後につきがまわってきたかなァ……。〉
ナムはドンゲマハル砲をかまえ、スコープをのぞいた。わけのわからない数字や図形が動きまわっている。〈……なんなんだこりゃ？〉
サイレンの鳴る方向へジープとポニー7は猛然と走り続ける。
ジープを運転しているキムが叫んだ。

「バオさん、あれを！」
ナムが、レッドデーモンめがけ、砲をかまえている。
バオの目がカッと見開かれた。
「まさか！　ドンゲマハル！　あれがうわさの……ナム、撃っちゃなんねぇ！」
バオの血を吐くような声も、怪光線の爆発とくずれおちるがれきの音でナムには聞こえない。
「くそッ！」
こうなったら汚い言葉もへったくれもない。
バオはジープの重機関砲に飛びついた。

ナムは、ドンゲマハル砲の引き金に手をかけた。
〈……スコープの見方なんかわからなくったっていいさ。相手はでかいんだ……。〉
ナムは、引き金に力をこめた。
〈……あれ、わりと硬いな……よし、力いっぱい引いちゃお……。〉
その瞬間、足元で、バオの重機関砲の弾丸が砕けた。
「ひっ！」

思わず、引き金から手を離す。
突っこんでくるジープから、バオがジャンプし、ドンゲマハル砲の砲身にしがみついた。
ナムは目を丸くして叫んだ。
「なにするの！」
「撃っちゃなんねぇ！　よーし、よーし、押さえて、押さえて……。」
バオは、ナムではなくドンゲマハルの砲身をなでさすった。
「撃っちゃなんねぇっていったって……あっちは撃ってくるじゃん！」
ナムたちを見つけた二体のデーモンたちは、怪光線を乱射する。
まきあがる爆煙と土砂で視界は0だ。
ポニー7のラサは、祈るしかなかった。
「みんな、生きていて……。」
数秒後、煙の中から、ナムとバオとキムを乗せたジープが飛びだしてきた。
「やったね。生存！」
ラサは、パチンと指をならした。
だが、次の瞬間、ラサの顔は青ざめた。
ジープの至近距離で爆発した光線の爆風が、バオをジープから叩き落としたのだ。

「バオ!」ナムが、手を伸ばして叫ぶ。
ジープは火花を上げて急停止する。しかし、加速したジープのブレーキは、止まったところで、落ちたバオとの間に五百メートル以上の距離をつけてしまった。
バオは、もう、レッドデーモンの足のすぐそばだ。
「止まっちゃなんねぇ! わしにかまわず逃げろ!」バオが絶叫する。
しかしジープは反転し、レッドデーモンに向け突進した。
運転するキムが叫ぶ。
「バオさん、あなたを死なせはしない! 僕はあなたが好きでした!」
ラサの操縦するポニー7も、急上昇するとレッドデーモンの一ツ目に突っこんでいった。
ラサは肩に乗ったモンガーにいった。
「モンガー、どうせ、このポニー7は燃料がほとんど切れている。こうなったら行くっきゃない。パラシュートは頼むわよ。」
モンガーは、『任せなさい。』とでもいうようにうなずいた。
レッドデーモンの一ツ目がどんどん大きく見えてくる。デーモンも、ポニー7に気がついた。一ツ目の中に、青い光が一瞬走った。光線発射の前ぶれだ。
「今だわ! 脱出!」

ラサは、脱出レバーを足でけった。コクピットのカバーが飛び、ラサの体が宙に投げだされる。ズガーン!!　ポニー7は、デーモンの光線でこなごなに吹き飛んだ。
デーモンが、ポニー7に気をとられたその一瞬のすきを逃さず、ジープは、バオを拾いあげ、デーモンの足の間をくぐりぬけ、背後に出た。

宙に投げだされたラサは、モンガーにしがみついた。
ブオーッ!　モンガーは全身の力をこめて空気を吸いこんだ。軟体動物のモンガーの体は、急速にふくれあがり、ラサを乗せて、風船のようにふわふわと地上に落ちた。
ドスン!!
「アタタ……。」
尻もちをついたラサは痛がる暇もなく、すっとんできたジープの上のナムの手に引っ張りあげられた。
「全員収容!」ナムが叫んだ。
「よっしゃ、ここはやばい、外へ出よう!」とバオ。
「了解!」キムはアクセルを踏みこむ。
ジープは、地下都市に入ってきたときのトンネルに飛びこみ、逆にかけのぼった。

二体のデーモンは、トンネルに光線を浴びせかける。トンネルの入り口は燃えあがり、煙と炎が、トンネルを矢のようにかけのぼってくる。後ろを見ながら、ナムはあきれ、つぶやいた。

「丸い石に鉄砲水に煙に炎、トンネル追いかけっこのワンパターン、フルコースじゃん……よくやるよ。」

「こっちもよくやんなきゃ困っちゃうわ。キム、がんばって!」ラサが運転するキムの肩を叩いた。

「やってみせましょ。」キムは、後ろを向いてラサにウインクした。

「前、向いて!」ラサは、思わずキムの首をひねった。ゴキッ!

「イテテ!　首が……。」

首が動かなくなったキムは、トンネルの道を、斜めに見ながら運転するよりなかった。したがって、まともな運転になるわけもなく、丸いトンネルを上になり下になり、螺旋状に突っ走った。

「外だ!」

ジープは、上下さかさまになって洞穴から弾丸のように飛びだした。

次の瞬間、洞穴は、炎と煙に包まれた。

ひっくり返ったジープの下から、四人は泥だらけの顔を出し、ニンマリと笑った。
「助かった……。」
だが、その笑いも数秒の間だけだった。
四人は、あたりが真っ暗なのに気づいたのだ。
〈……まだ夜になる時間じゃないぜ……。〉
四人は空を見上げて息をのんだ。
なにかがおりてくるのだ。
空の全体をおおいつくした黒いなにかが——。
嵐が吹きあれた。いたるところで雷が光る。地割れが網の目のように走る。とても立ってはいられない。
今、アクアロイド星の地表は天地の異変になすがままだ。
バオがうなるようにつぶやいた。
「衛星サイズのイノガニック、アクアロイド星の黒い月、ディオがおりてくる……。」
「ディオ?」ナムが聞きかえした。
「そう、あの黒い月自身が、イノガニックの生命体なんだ。」
ディオの大きさは、アクアロイド星の四分の一はある。それがおりてくるのだから、表

現としては、空がおりてくるとしかいいようがない。
やがて、黒い空から、無数の光の点滅する塔のようなものがおりてきた。塔といっても、直径十キロ、高さ三百キロはあるだろう。それでも、アクアロイド星から見れば針のようなものである。
そんな巨大な針が、アクアロイドの地表に、鈍い音をたてて突き刺さった。
「イノガニックめ、アクアロイド星に注射をしやがった。」
「お注射、きらい。」ラサが身をふるわせた。
「なんの注射なの？」キムがつぶやいた。
「興奮剤さ、惑星のな……見ろ！」
バオのいうとおり、たちまち、地表の断層からマグマが吹き出し、山々が火を噴き出しはじめた。
「やつら、どうやらこのアクアロイド星、そのものを破壊する気だ。今まで静かだったやつが急に興奮するとショック死するようにな……。」
「なんのために……？」ナムが聞いた。
「ドンゲマハルさ。そいつが発射されるぐらいなら、発射される前に星ごと消しちまったほうがいい。」

「畜生！　よくも！」
ナムは、ドンゲマハル砲を黒い空に向けた。
「なら、今、撃ってやる！」
「よせ！　撃つな！」バオが叫んだ。
「だって、このままじゃ、アクアロイド星も俺たちもおしまいじゃないか。」
バオは、いつになくおちついた声でいった。
「引き金を引こうと引くまいと、アクアロイドとわしたちは助かりはせん。それより、引き金を引けば、他の星も、いやこの宇宙全体が消えてしまうんだ……わしらにそんなひどいことができるか？」
「他の星も……。」
ナムはドンゲマハルの砲身をおろした。
「そう、ドンゲマハル一発で、この宇宙のイノガニックも、我々オーガニックもすべてが消えてしまうんじゃ。」
「なんてこった。」ナムは吐くようにいって肩を落とした。

☆A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

アーリアは肩で息をしながらつぶやいた。
「なぜ撃たないの？　あなたたちが死んじゃったら、あとの宇宙なんて、どうなったって関係ないじゃない。あなたたちはやられっぱなしで死んじゃっていいの……？　撃ちなさい……ドンゲマハルを……撃って！　ドンゲマハルを……。」
アーリアは、体からどんどん力がぬけていくのを感じていた。アーリアもまた、すぐそこに自分の死が近づいているのを感じていた。

＊　＊　＊

噴き出す溶岩、飛び散る火山弾、地核の変動はますます激しくなり、アクアロイドの最期はもう目の前だ。
「どうすることもできないの？」
ラサがナムの腕にすがるようにつぶやいた。
バオも、キムも、ナムを見つめている。
ナムは三人を見つめかえした。
四人とも同じことを考えていた。
聖剣(シェード)——。聖剣(シェード)なら——。
ナムはうなずいた。背負っていた聖剣(シェード)を手に持った。……先刻は失敗したけれど……も

しかしたら、今度こそは……。
ナムは聖剣（シェード）を黒い空に向けて振りかざした。全身に力をこめ、心を聖剣（シェード）に集め、思った。
……聖剣（シェード）よ！　俺に力を！
聖剣（シェード）にはなんの変化もなかった。
ナムはもう一度、思った。
だめだった。
三度やっても、四度やっても、いや十回、繰り返してもむだだった。
ナムは疲れ、もう最初のころの精神集中ができなくなっていた。
ナムは、かぶりを振ってガックリと膝をついた。
ラサが、その肩に優しく手を置いた。
ナムは顔を上げた。バオもキムも優しくうなずいてくれた。口にこそ出さないが、その顔は「いいんだよ。」と答えてくれていた。

☆A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

「聖剣（シェード）なんか効（き）かないわ……なぜなの？　なぜドンゲマハルを使わないの？　くやしくな

いの？　イノガニックに負けたままで……。」
アーリアは、ナムたちの気持ちが理解できなかった。
「あの人たちは、あなたにさからっているようです。」
レーリアがいった。
「なぜ？　あれは、私が作ったキャラクターたちなのよ……。」
「なぜなのか、私にもわかりません。」
どちらにしろレーリアは、最後までアーリアに従うつもりだった。

＊　＊　＊

アクアロイドの地核変動はさらに激しくなった。今、地下都市の割れめの間から、レッドデーモンとブルーデーモンが、ゆっくりと、黒い空、黒い月ディオに向かって浮かんでいく。
惑星アクアロイドでの役目が終わった二体は、次の目的地を目指すべくディオに回収されるのだ。
そのときだった。噴火と地割れを繰りかえすなかを、小さなバイクが走ってきた。イノガニックとオーガニックの混血児の乗ったバイクだ。
「えらいこっちゃ、えらいこっちゃ！　この若さでまだ死にとーなーい！　待っちくれーっ！

わいも連れてってくれィ、見捨てんでくれィ！　わいも回収してくれィ。」
だが黒い空はなんの反応もなかった。
浮上していく二体のデーモンは、冷ややかにベービーを見おろしていたが、やがて、プイッとそっぽを向いた。
「そんな！　わいかてイノガニックやないか……そりゃオーガニックの血かて入っているけど、イノガニックにはかわりないやんけ……仲間やないけ、同じイノガニックどうしやないけ！」
なんの答えもなく、黒い月ディオは二体のデーモンを回収すると、地表に刺した巨大な針をぬき、しだいに遠ざかりはじめた。
もうディオが影響を与えなくても、アクアロイドの最期は明らかだった。
ベービーは肩を落とした。
「ええわい、ええわい！　すねたるわい！　みんなでワイのことばかにしくさってからに！」
そのとき足元の岩盤がいきなり、噴き上がった。
「ワ――ッ」
宙を飛んだベービーは、感無量で最期を待つナムたちの後ろに落ちた。
一度はその一ツ目をまわしたものの、我にかえったベービーはあたりを見まわした。

目の前に、ベービーの見たことのないものが岩に立てかけてあった。
今まで武器を扱ったことのないベービーも、それが大砲か鉄砲の一種らしいことはわかった。
ベービーは、その武器に手を伸ばした。
「あ、あっ！」なにげなく後ろを振り向いたラサが悲鳴に近い叫びをあげた。
ベービーが、ドンゲマハルをかまえて立っていたのだ。
「みんなみんなきらいや……とくにお前らなんか大きらいや！　お前らのおかげで、わい、イノガニックの仲間に入れてもらえんかった。」
他の三人もはじかれたように立ち上がった。
「よせ！　そいつは撃つな！　撃ったらたいへんなことになるぞ！」ナムが叫んだ。
「イノガニック君、話せばわかる。」とバオ。
「君はもう大人だ！　分別を……。」とキム。
「問答無用じゃい！　もう大人のいうことなんかだまされへんぞ、こんなシケた世の中、ぶっこわしてやるんや。」
不良少年の意味のない決まり台詞そのままである。
ラサは、むりやり、笑顔をつくっていった。

「ね、気を静めて！　おねえさんといっしょに豆乳飲みにいきましょ……。」
内心、……このガキが……とも思ったが、この際は仕方がない。
だが、ベービーは、見すかしたようにわめいた。
「フン、なにいうてけつかる。先刻は無視したくせしよって！　わいは！　……わいは……皆、でえきらいやあ〜っ！」
ベービーは力いっぱい、引き金を引いた。
鈍い音がして、ドンゲマハル砲から、砲弾が飛びだした。
「うっそーッ!!」
「な、ばかな！」
あわてて身を伏せる一同の頭、スレスレをかすめ、砲弾は急上昇——、黒い月ディオに向かって走っていった。
そして——。
ドンゲマハルは爆発した。
黒い月は、みるみる赤く光りだした。
赤い光は、矢のようにアクアロイドの地表を走った。
ラサのオイルフルーツの実が、赤い光にこたえるように光った。オイルフルーツの光は、

くもの巣のように、アクアロイドを包んだ。
オイルフルーツは、ドンゲマハルの威力を数億倍に強化したのだ。
バオが叫んだ。
「ナム、もう一度、聖剣(シェード)だ。もうこれはアクアロイドだけの問題じゃない。宇宙全体の問題だ。それなら聖剣(シェード)も効きめを示すかもしれん！」
「ああ！」
ナムは、聖剣(シェード)を握った。
「聖剣(シェード)よ、俺に力を……。」
やはりなにも起こらなかった。
みるみるあたりの光景が赤く燃え、消えていく。
ナムは、絶叫した。
「俺に力なんかいらない。聖剣(シェード)、お前の力で宇宙を救え！」
むだだった。
ベービーは、岩場の上で、ぽつんとすわってつぶやいていた。
「消えていく……みんな消えていく。」やがてベービーも赤く燃えて消えていった。

続いて、キムの姿が……バオも……ラサも……ナムも……モンガーも……アクアロイド星が、黒い月ディオが……そして、赤い光は、リド星系から、広大な宇宙へ広がっていった……もうすぐ宇宙は消えようとしていた。

「なんてこった！」
体も命も消滅したが、ナムたち四人とモンガーの意識だけは、まだ、いくばくかの余命があった。
「こんなのあり？」ラサが思った。
「!?!?!?!?」モンガーの思いである。
「仲間はずれにされた、ガキの思いこみで、宇宙がなくなっちまうなんざ、やってられないぜ！」
バオが吐き捨てるように思った。
「俺が追いかけていた聖剣（シェード）ってなんだったんだい？」
ナムは、むなしさをとおりこしてばかばかしかった。
「誰（だれ）かが、使えるはずの聖剣（シェド）を使えなくしたんだ。」キムは思った。
「誰が？」一同は思った。

「僕たちと、この世界、いやこの宇宙を創り、オーガニックとイノガニック、聖剣(シェード)とドンゲマハルの設定をこさえ、全部をおぜんだてしながら、途中でほうりなげたやつさ。」キムは思った。

「アーリア？」一同は同時に思った。

「こんなことって許せるか……？」バオは思った。

「許せない！」一同は、やはり同時にそれを思った。

ひときわ強くそれを思ったのはラサだった。

「私とナムのラブロマンスは、いったい、どうなっちゃったのよ！　なによ！　最初は、あんなにもったいぶってやらせてさ……もうほんと、頭きちゃうじゃすまされないわ。」

ラサが、そう思うのは、若い娘として、いや、どんな女の人だとしても、当然の怒りだといえた。

ゲーム「バース」終了

☆　A・AD二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

レーリアの顔(ビジョン)に、「宇宙消滅進行中」の文字が明滅している。
アーリアは目に涙をいっぱいためて、つぶやいた。
「終わるのね。」
「ええ、もうすぐ、ね。ゲームの宇宙が消滅した瞬間に、私の機能も停止し、私も死ぬわ。」
「あなた一人で死なせはしないわ。私のオイルフルーツはちゃんと活動するんでしょ?」
「もちろんだわ。ラサはあなたをモデルにした少女ですもの。ドンゲマハルが発射された

ときに、ラサが管理していたオイルフルーツが誘発して宇宙を滅ぼしたように……私の機能が停止したとき、あなたのオイルフルーツも誘発して、この地球を滅ぼしてしまう。あなたがインプットしたとおりに、私は動くわ。」

アーリアは、けだるくうなずいて、つぶやいた。

「私のしたことって悪いことかな……。」

「私に聞かないで……もう終わったことだわ。だれにも止められはしない。」

レーリアが答えた。

「ありがとう、レーリア……私、体が冷たくなっていくのがよくわかるわ。もうあと一日生きていたらいいほうよね。」

アーリアの耳に、部屋のドアの向こうから、にぶい電磁音が聞こえる。

部屋の外の人たちが、電子工具で、ドアのロックを焼き切ろうと必死になっているのだ。

レーリアがドアをロックしてから四十五分は経っている。あと十五分もしないうちに、ドアは破られ、アーリアは手術台に連れていかれるだろう。

病室からぬけだしたアーリアの衰弱は、極端に進行し、余命はいくばくもない。

生きている間に、解剖研究するには、待ち時間はほとんどないのだ。

「私、生きたまま、解剖なんて、ぜったいさせない……。」

アーリアが、自分の意志で自分の体を動かせる時間もわずかしか残っていない。胸から下の感覚は、もうなくなっていた。

「急がなくっちゃ……。」

アーリアは、渾身の力をふりしぼって、ストレッチャーの上から身を乗りだすと、コンピューターテーブルの筆立ての中から、ペーパーナイフをつかみだした。

アーリアは、ペーパーナイフを手首にあてた。ナイフは、聖剣の形、そのままだった。

「さよなら、レーリア。わたし、自分の最期を自分で決めるわ。」

「生きていてほしかったな。」

「私だって生きたかった……でも……さよなら……。」

アーリアは、残る力をふりしぼって、ペーパーナイフに力を入れた。

「なんのまねだよ!」

ペーパーナイフがだれかの手でもぎ取られた。

「えっ?」

かすむ目で、目の前にいる男の姿を見たアーリアは息をのんだ。

〈……私は、もう死んでいるんだろうか? ここは天国なんだろうか……?〉

アーリアは、頬に手をやった。感触がある。

<まだ、生きている。……とすると……これは、いったいどういうこと……?>

目の前に立っているのは、ナムだった。

その後ろに、ラサが、バオが、キムが……そして、ストレッチャーの上にポンと飛び乗ってきた小動物は、モンガーだった。

「あんたがアーリアさんだね。」バオがいった。

「これ、どういうことなの……?」

「あんな終わり方、許せないんだもん。」ラサがいった。

「我々は、あのままでは、死んでも死にきれないんですよ。いや、死ぬのがいやなんじゃない。それは、我々を作ったあなたの自由だ。しかし、死ぬのなら死ぬで納得できる死に場所、死に方を考えてほしい。あんなばかな終わり方では、我々は、死ぬわけにはいかないんだ。」キムが、アーリアを見すえていった。

「なぜ? あなたたちを作ったのは、私なのよ。どうしようと、私のかってでしょ。」

アーリアは、自分に納得させるようにうめいた。

「それは違うね。」と、バオがかぶりを振った。

「えっ?」

「たしかに、我々を生みだしたのは、あんたかもしれん。しかし、生まれたいじょう、わ

しらは生きている。たとえ親だろうと、意味もなく殺す権利はない。違うかな?」
「わたしたち、これからやりたいことがいっぱいあるのに、なぜ、それを止めさせられなきゃなんないの? ね、教えて……さあ、答えてよ!」
　ラサは、アーリアに語気強くいった。
「ラサ……あなたは私なのよ。私のかわりに、ゲームの中で飛びはねる私自身なの……ナムは、私の欲しかったボーイフレンド。私、ただのやさしい男の子なんて欲しくない。ナムのように、やんちゃで、無鉄砲で、女の子に手を焼かせるどうしようもないタイプ……。」
「それはいえる。」とラサがうなずいた。
「コホン!」ナムは思わずむせた。
「でも、とっても元気で、運動神経抜群で、いつかきっと、私のために頼りになってくれる男の子。そんなボーイフレンドが欲しかった……。」
　アーリアの目から涙が落ちた。
「ほんとうの私には、ぜったいいるはずのないボーイフレンドよね。私が、ゲームをやっているときだけに会えるボーイフレンド――楽しかった……でも、私はもう死ぬの。もうなにもかも消えるのよ。」
「いやよ!　ナムも私も消えるなんて!」

ラサが叫んだ。
「仕方ないじゃない……ラサは私、私はラサなんだもん……。」アーリアの息はもう絶えだえだった。
「私は、あなたじゃないわ、ぜったい。」ラサは、かぶりをなんども振った。
「えっ……？」
「私、ナムを好きよ。でも、あなたと同じじゃないわ。私、ナムと幸福になりたい……。そのためだったらどんなことでもする。それに、たとえ、私が死んじゃったって、ナムには生きてて欲しいわ。殺そうなんて思わない。いい？　……あなたとなんかぜったい違うわ。私があなたと同じなら、私は、ナムにあんな危険なめにあわせたりしないもん。ナムは、あなたのせいで、どれほどひどいめにあったと思ってるの？　私、あなたに頭にきてるの。そんな私が、あなたと同じだなんて、冗談、通りすぎて、死にたくなっちゃうわよ。もち、あなたとべつの時間に、べつのところでね。」
ラサは、一気にまくしたてて、フッとため息をついた。
「ラサ、それ、ちょっといいすぎだよ。」
ナムがいった。
「なにがいいすぎよ。相手が美人だとすぐ甘くなっちゃって……、こんなこと許してたら

くせになっちゃうんだから。」
「だって、アーリアさん、死にかかってんだよ。」とナム。
「こっちは、その前に殺されちまった。」バオが肩をすくめた。
「わけもわからない、かんしゃく持ちの子どものせいでね。」キムも、うんざりといった表情だ。
アーリアは、自分の作った登場人物たちの反逆に驚き、声もでなかった。なによりも、衰弱しきった体には、こたえていた。
「もう、アーリアをせめるのはやめてください!」
レーリアが叫んだ。
「あんたは……?」一同はレーリアを見た。
「アーリアの作ったコンピューターです。あなたたちは、私の中のゲームで生きていたのです。いわば、あなたたちの世界の宇宙が私です。」
「この小さいのが、わしらの宇宙……。」
あきれたバオが、うめくようにいった。
「正確にいえば、私の中のもっともっと小さなフロッピーチップにプログラミングされたゲームが、あなたたちの宇宙です……アーリアはもう話もできないほど、弱っています。

アーリアのかわりは、この私がしますわ。」
レーリアは、顔（ビジョン）に、様々な絵や図形を映しながら話し始めた。
「アーリアと私の住むこの地球は、二千五百年前、核戦争によって一度滅亡したのです。生き残ったのは、ほんのひとにぎりの人間たちでした。しかし、彼らは強靱（きょうじん）な生命力で生きぬき、今の文明を育てあげました。しかし、時として、核の影響でしょうか、数十年に一度の割で、異形の人間が生まれることがありました。その人間は、外気に当たるとすぐに死んでしまい、無菌のカプセルの中でしか生きられず、そのカプセルの中でも寿命は、十数年しかありませんでした。
　地球医学研究学会は、そんな子供のため、この土地に、病院を作ったのです。この土地には、古代の遺跡があり、発掘された大理石の神像に異形の人間はよく似ていたからです。
　医学の進歩で、異形の誕生は減少しました。
　そして今ではもう、ほとんど生まれるはずのない人間でした。
　ところが、十五年前、そんな人間が生まれてしまったのです。それがアーリアでした。
　アーリアは、生まれてから、今まで、この病院の中でたいせつに育てられました。外に出ること以外は、なに不自由ない生活をしてきました。
　ただ、異形であるため、だれ一人、友だちはできませんでした。ひとりぼっちのアーリ

アは、おもちゃとしてあたえられたコンピューターを改造して、私を作りだしました。異形の人間の特徴として、知能指数だけは、異常に高かったのです。
アーリアは私一人を友だちとして生きてきました。そして、私を操るうち、偶然、奇妙な回線とコンタクトできたのです。それは二千五百年前の古代文明の軍事基地のコンピューターの回線でした。しかもそれは一つではなく、世界じゅうに点在していました。」
レーリアの顔に、世界地図が映った。その上に点で示される基地は、世界じゅうにちらばっている。
「それは二千五百年前の核戦争で生き残った無人の基地でした。
アーリアにとって、私と核基地のコンピューターを連動させることなど、朝飯前でした。
アーリアは誰にも知られずに、この地球を破滅させる鍵を握ったのです。でも、だからといって、アーリアは、それを活用する方法も思いつきませんでした。地球の支配者を気取ったところで、病院の外に出たら死んでしまう体のアーリアには、なんの意味もありません。
そこで、アーリアは、いつも遊んでいるゲームに、その鍵をつなげて、スリル満点のゲームを作ることにしました。
そのゲームは、アーリアの思いをそのまま投影したようなゲームでした。

少数のオーガニックは異形の自分。多数の敵イノガニックは、地球の人間たちすべてのつもりだったのです。イノガニックを機械に仕立てたのは、自分こそ人間だ……という、ひとりぼっちのアーリアのはかないつっぱりだったのでしょう。
核基地はオイルフルーツに見立てて、自分が管理していると同じように、ラサの身近におきました。」
「知らなかったわ。オイルフルーツにそんな力があるなんて……。」
ラサは、呆然（ぼうぜん）となった。
「知っていたら、ラサは、すぐにゲームの切り札として使いたがるでしょう。アーリアは、安易なゲームにしたくなかったのです。そして、核基地の発射の鍵になるものをドンゲマハルとして、禁制地区においたのです。
いつものゲームでは、禁制地区もドンゲマハルも、オイルフルーツも、あまり関わりはもちませんでした。
ゲームの本筋は、少数のオーガニックが、聖剣（シェード）を手にして、多数のイノガニックを、どう撃ち破るかです。
ゲームは難（むずか）しすぎて、アーリアには勝てませんでした。それでも、なんどもなんども、アーリアは私を相手にして、このゲームに挑戦しました。

ゲームに挑戦すること自体が、ひとりぼっちのアーリアの生きがい、いえ、生きている姿、そのままだったのかもしれません。」
ナムたち一同は、アーリアを見つめた。
アーリアは死んだように、ストレッチャーに横たわっている。
目から流れ落ちる涙だけが、今も生きている証拠だった。
レーリアは続けた。
「アーリアは、ゲームの登場人物の一人、ラサに自分をあてはめました。少女としての思いこみのボーイフレンドをナムに……少女マンガによく出る型で冷静で、女に見向きもしない育ちの違う年上の美形少年をキムに……ペットのモンガーは、いつもかわいがっているぬいぐるみでした……。」
「で、わしは……?」とバオが口をはさんだ。
「それは……私にもわかりません……ともかくアーリアの身近ななにかだと思います。」
「なにか……。」
「女の子は、いろいろなものをイメージで人に見立てますでしょ……。」
「そりゃそうだが……気になるぜ、わしゃなんなのかね。」バオは首をひねった。
レーリアは話を続けた。

「やがて、アーリアにも、ドンゲマハルを意識しなければならないときがやってきました。体の衰弱です。そろそろ異形としての寿命がおとずれたのです。

アーリアは、ますますゲームに熱中しました。ゲームに勝つことで、なんとか自分をはげましたいと思ったのです。

ゲームにさえ勝てば、死んでもいいと考えていたようです。

でも、そのうち、アーリアは、この病院の奇妙な動きに感づきはじめました。それまで、腫れ物にさわるようにかわいがってくれていた病院の人たちが、あわただしく、アーリアを検査しはじめました。まるで、アーリアの命が消える前に、調べられることは調べておこうとでもいうように……そして、それは事実でした。

アーリアは、この世界の人間にとって、医学上の研究材料でしかなかったのです。めったにない貴重なサンプルだったからこそ、たいせつに育てられていたのです。人間として認められていたわけではなかったのです。

アーリアは、少なくとも、この世界を、自分の生きる世界、生きなければならない世界だと思っていました。でも、現実は、研究材料としてしか存在価値がなかったのです。

この世界は、人間としてのアーリアが生きられる世界ではなかった……その疑問が確信になり、ついに、その証拠を知ったとき、聖剣（シェド）は力を失い、ドンゲマハルは発射されたの

です……。」

そのとき、部屋のドアの外の騒ぎが大きくなった。

ドアのロックがもうすぐ破られるのだ。

「そろそろ終わりが近づいたようです。私の中のゲームの宇宙が消滅したとき、私は機能停止し、それを合図に世界じゅうの核基地から、核兵器が発射され、一時間後には、この世界も滅亡します。」

「この世界なんてどうでもいいんだ。アーリアが、この世界で生きられないなら、俺たちの世界にくればいいんだ。」ナムが叫んだ。

「そうよ、私たちがこの世界にきたように、アーリアさんが、私たちの世界にくればいいのよ。」ラサはナムにうなずいた。

「もともと、この人が創造した世界だ。自分の作った世界に住めないはずはないよね。」

キムがニッコリと笑った。

「しかし、わしらの宇宙は、ほとんど消滅寸前じゃい。」バオがどうしようもないという感じでかぶりを振った。

「聖剣（シェード）があるさ。」ナムが、手に持ったペーパーナイフを見せた。

「俺は聖剣（シェード）が使えなかった。なぜかっていうと、アーリアが使わせてくれなかったからだ。

でも、アーリアなら使えるかもしれない。」
「なるほどね、この人にとって聖剣(シェード)はなんだったのか？　我々にとっても希望であり、この人にとっても希望だったんだ。それを失ったとき、聖剣(シェード)はなんの力ももたなくなった。
この人がもしやる気になれば……うん、いけるかも。」キムが納得したようにうなずいた。
「能書(のうが)きはいいんだよ。わしらの宇宙のおだぶつはもうすぐなんだ。なんとかせにゃ！」
バオがわめいた。
ナムは、ストレッチャーの上で、もうほとんど動かないアーリアの耳もとでささやいた。
「聞こえただろう。俺たちの声が……さあ、アーリア、聖剣(シェド)を握るんだ。俺たちとあんたの宇宙を救えるのは、今、あんただけなんだよ。」
ナムは、ペーパーナイフを、アーリアの手のひらに乗せた。
だが、アーリアは、閉じたまぶたをすこし動かしただけだった。
「アーリア、私があなただったら、私、……私、生きるわ！　あきらめない！　ぜったいに！」ラサは、手のひらを閉じて、聖剣(シェード)を握らせた。そして、そのこぶしを両手のひらであたためるように包んだ。
ラサは、アーリアのこぶしに、すこしだけ力が入ったのを感じた。
レーリアは、アーリアに語りかけた。

「アーリア、聖剣（シェード）を使いなさい。私は、あなたに作られたコンピューターだけれど、あなたに意見はいいこそすれ、さからったことはないけれど、今は、あなたの妹として、あなたの宇宙として、きっぱりいうわ。アーリア、あなたは生きるべきだわ、聖剣（シェード）を使うのです。あなたは、あなたの宇宙で生きるのです！」

ペーパーナイフを握るアーリアのこぶしが、かすかに、静かに、しかしたしかに動きはじめた。

バオとキムは、思わず顔を見あわせた。

ラサとナムはうなずき合った。

モンガーが飛びはねた。

アーリアは、腕をピンとのばした。

その手に握られたペーパーナイフは、今、たしかに聖剣（シェード）だった。

アーリアの口もとは、なんども同じ言葉をつぶやいていた。

「聖剣（シェード）よ……私に力を……。」

＊　＊　＊

アーリアの部屋のドアを破って、医者や看護婦たちがなだれこんできた。

だが、その部屋には、アーリアはおろか、人影はだれもいなかった。

そして、アーリアがかわいがっていたぬいぐるみも消えていたのに、気づくものもいなかった。

一同は、一ツ目だけの鼻のない顔で、けげんそうにたがいの顔を見つめあった。

部屋の隅の小型コンピューターだけが、静かに作動していた。

*　*　*

赤い光がつぎつぎと星を食いつぶし、消し去り、宇宙は、今、まさに消滅寸前だった。

だが、どこからともなく現れた白い光の流れが、赤い光の進攻を食いとめた。

やがて、白い光は、赤い光を押しもどしはじめた。

消えたはずの星が宇宙がしだいに再生していく。

白い光の中心に輝いているのは聖剣（シェード）だった。

聖剣（シェード）の刃の中に、かすかに数人の人影が見えた。

ナムとラサ、バオとキム、そしてアーリアだった。

*　*　*

宇宙が完全に再生されたとき、レーリアは、核基地との連動を切った。

核基地のコンピューターとレーリアとは、無縁になった。もう、レーリアが機能停止になっても、核兵器が発射されることはなかった。

レーリアは、アーリアの作った宇宙のプログラミングを、自らの体内から、地球上に網羅された業務用の通信コンピューターの回路に流した。
そのプログラミングには、レーリアの思考回路もふくまれていた。レーリアは、コンピューター本体からプログラミングに乗り移ったのだ。
病院の看護婦が、レーリアが作動しているのに気づき、スイッチを切り、ごていねいにコンセントまでぬいたときには、レーリアはすべての作業をとっくに終えていた。

☆　Ａ・ＡＤ二五〇〇　ギリシア・アクロポリス

病院の会議室では、一ツ目で鼻のない人々が、アーリアが消えた事件を話し合っていた。
「せっかく誕生した、核の影響を受けない、唯一、純粋な人間のサンプルだったのに、惜しいことですな。」
「しかし、いったいどこへ消えてしまったんでしょう……。」
担当の医師がため息まじりでいった。
誰にも答えようがなかった。
「こうなったら、残された資料のすべてを洗いなおして、純粋な人間、いわゆる、古代人

間の研究をするよりありませんな。」
「サンプルが遊んでいたコンピューターには、資料的な価値のあるものはないんですか?」
「とりたてては、ありません。一部、プログラミングが、通信コンピューター網にもれだした形跡がありますがね。」
「どんなプログラミングです?」
「知ることは可能ですが、世界じゅうに網羅された通信網のどの部分を、今、そのプログラミングがただよっているか……それを調べるには、たいへんな時間と手間がかかります。なに、所詮十四歳の少女のプログラミングです。ゲームか教育用のものでしょう。それを調べるために多額の費用を捻出する余裕がおありですか?」
一同は苦笑した。
病院長は、担当の医師にいった。
「それにしても残念でした。あなたはずいぶん、あのサンプルをかわいがっていたのにね。」
「ええ、欲しいものはなんでも与え、最良の環境を作ってやったつもりです。かえすがえすも、生きたまま解剖できなかったのが残念です。こんなことなら、もっと早めにやっておくんでした。」
「お気持ち、よくわかりますよ。バオ先生……。」

病院長は、アーリア担当の医師、バオをなぐさめた。
前方には、再生したアクアロイド星が見える。
バオやナムたちは、今、宇宙をゆっくり進む聖剣(シェド)の中にいた。
「クシャン!!」
バオは大きなくしゃみをした。
すべてはもういちど、最初からやりなおしになるはずだ。
ただ一つ違うのは、登場人物に、アーリアと、そのペットのモンガーが加わったことだ。
「私のモンガーと同じっての……ややこしいわね。」ラサがいった。
「名前を変えるわ。ガーモンって、どう?」
アーリアが答える。
「なんか、あなたのつける名前っていつもイージーなんだよな。」キムが肩をすくめる。
「えへっ……。」舌を出したアーリアは、ラサを見つめた。
「それにしても……ラサ。」
「ん?」
「この宇宙では、私はあなたのはずでしょ。どうして、私たち、二人とも同時にいるのか

しら……。」

ラサはニッコリ笑った。

「うん、たぶん、どんなにあなたが、私をあなたに似せて作ったにしても、私は私。あなたじゃないもん。

私は、私で生きてるもん。

だから……。

あなたも、あなたの作ったあなたの世界でさ、あなたを生きればいいんじゃない？」

「私は私か。」アーリアはつぶやいた。

「うん。」ラサはうなずいた。

アーリアは、ラサにほほえみかえした。

「うん、私は、私の世界で私を生きるわ。」

聖剣（シェード）は速度を早め、アクアロイド星めざし、まっしぐらに飛んでいった。

元コンピューターのレーリアは、彼らの生きる宇宙そのものとして、彼らをやさしく、見守ることにした。

（ＢＩＲＴＨ）
人がある肉体から誕生するのは一度だけでも、誕生日はなんどもやってくる。
人は、生まれかわろうと思いさえすれば、何度も生まれかわる。

〔蛇足〕

冒険活劇のもっともありふれた結びの文章
彼らは、その後も様々な出来事に会い、様々な冒険をした。
だが、それはまた、べつの物語である。

ＢＩＲＴＨ　完

あとがき

金田伊功

アーリアという女の人の体内に――ちょうど盲腸のあたりですが――イノガニックという癌細胞が発生したんです。

で、アーリアはなんとかして、この癌細胞を退治するために、自分の細胞の一部であるラサ、ナム、キム、バオたちといった新しい生命体に望みを賭けたのです。

でも、ラサたちの活躍もむなしく、癌細胞はおろか、ラサたちの生命体の命までもほろびてしまいました。

あいにく、聖剣というわけのわからない物質の中に、ラサ、ナムたちの生存が確認されたのです。

そして悲しむアーリアに妹のポカラが自分の宇宙（体内）を望むようにすすめます。

そこには、あの細胞たちが大海原を背景に新しい冒険の旅へという姿で転生しているのでした――。

以上が――アニメ版「バース」の単なる設定――なんですけど、アニメ版では絵もたりない、カットつなぎも不十分で、ややわかりにくかったと思います。

――反省しています――ビデオを購入された方、ごめんなさい。

というところで――。
シナリオ作家の首藤剛志（しゅとうたけし）さんの登場となるわけです。
そして、首藤さんなりのバースの世界を小説にしていただきました。
さすが。アニメ版のてきとうな部分に、よくこれだけのつじつまあわせをしてくださって、たいへんだったと思います。

P.S. アニメ版「バース」はスケジュールにめどがたたず、作画の遅れが原因となり、背景、仕上げ、撮影の方がた、はたまた音響や声優さんへのめいわくとなり、さらに予定製作費オーバー、もうまにあわない!!
そしてビデオ版から劇場公開上映になったり、もう……いろいろありましたが……。
スタッフならびにキャストの方がた、お疲れさまでした。
この紙面をかりて、お礼の言葉とさせていただきます。

作品解説

あいどる＋カナメプロダクション製作によるオリジナル・アニメビデオ作品「バース」('84年発売)を，アニメ界の人気脚本家首藤剛志の手によって小説化したものです。

バース または 子どもの遊び

首藤剛志(しゅどうたけし) 文　金田伊功(かなだよしのり) イラスト

定価420円

昭和59年11月28日　第1刷発行

発行者――伊藤章彦
発行所――株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930

デザイン――100パーセント
製版――凸版印刷株式会社
印刷――凸版印刷株式会社
製本――株式会社 国宝社

落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えします。

ISBN4-06-190017-X (0)　(映)

講談社 X文庫

話が早い×文庫

SF新世紀レンズマン㊤

C／Gを駆使したアニメ超大作映画「レンズマン」の完全小説化。

原作／E・E・スミス
文／吉川惣司

SF新世紀レンズマン㊦

平和と繁栄を誇っていた自由銀河連合に、凶悪な魔手が迫ってきた……!

原作／E・E・スミス
文／吉川惣司

昭和二十九年作品
シリーズ第一作

ゴジラ

二百万年の眠りを、突如としてさました伝説の怪獣ゴジラ――シリーズの原点を小説化。

監修／田中友幸
文／海原俊平

昭和三十九年作品
シリーズ第四作

モスラ対ゴジラ

大地を裂いて、またしても巨大な姿を現した水爆大怪獣ゴジラ。巨蛾モスラとの対決は?

監修／田中友幸
文／上田高正

シリーズ
最新作

シリーズ新ゴジラ

ゴジラが時間を超えて、ふたたびよみがえった。東京に大パニックが……。

原案／田中友幸
飯野文彦
文／野村宏平

早い話が×文庫

レンズマン㊤は380円，レンズマン㊦は360円，ほかはいずれも400円です。